

ISSN 2188-2576

越谷保育専門学校研究紀要

第8号

令和元年度

学校法人ワタナベ学園 越谷保育専門学校

研究紀要（8号）発刊によせて

越谷保育専門学校長 山崎 芙美夫

本校の歴史は、昭和44年（1969年）に埼玉県知事より「学校法人ワタナベ学園」が認可され、4月に吉川幼稚園教員養成所として「第1回幼稚園教諭養成課程入学式」を挙行了のが始まりである。現在では埼玉県唯一の文部科学大臣と厚生労働大臣の指定を受けている専門学校として歩みを継続しています。平成26年度に文部科学大臣より「職業実践専門課程」の認定を受け、平成30年度には「職業実践専門課程に係るフォローアップに係る手続き」により引き続き認定され、令和元年9月には「高等教育修学支援認定校」として指定を受けました。

先日、「第一回学校評価」を実施しました。学生の本学に対する満足度を把握すると同時に今後の学校運営に学生の意見を生かすことを目的に実施いたしました。専門学校においても学生満足度を上げることは重要課題のひとつです。数年前より実施に向けて構想を温めてきましたが、今年度実施の運びとなりました。評価項目「本学での生活は、全体として満足できるものでしたか」という質問に対して90%以上がそう思う・だいたいそう思うに返答し、「友人や後輩に、本学への進学をすすめたいですか」に対しても9割以上がそう思う・だいたいそう思うと答え本学の教育活動全般について肯定的な意見が数多く寄せられました。

さて、幼稚園教諭・保育士養成機関として、教員の研究資質向上は避けて通れない道です。専門学校も高等教育機関として社会の期待にこたえていかなければなりません。社会に広く専門学校の教育活動を認知してもらうためにも教員の資質向上は欠かせません。本学では教員研修会の場として年に2回の「講師会」を開催して教育課題について意見交換を実施し教員一人ひとりの資質向上に努めています。併せて、平成25年度からは「紀要委員会」を校務分掌に位置づけ、委員の教員が中心となって研究紀要編纂を進めてきました。ここに令和元年度「研究紀要第8号」として、皆様にお届けすることができました。

この研究紀要は、越谷保育専門学校の専任教員、非常勤の先生方が日々の校務の間で、教育研究に励み、その研究の一端を発表するとともに、本学のミッションである「学びつづける保育者」を育成し、さらに教育活動に取り組み魅力ある教育の場を創造していくことを目指しています。今後さらに研鑽を積み重ね質の高い教育水準を維持し、優れた教員の人材育成に、この研究紀要が少しでも役立つことができれば幸いです。

これからも皆様の温かいご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

目 次

研究紀要（８号）発刊によせて

越谷保育専門学校 山崎扶美夫

【授業実践報告】

音楽Ⅰ授業の実践報告

—実践につながるピアノ授業をめざして— 横関由紀・永島晴美 . . 1

【実践研究論文】

実習体験における教育実習Ⅰの課題と方法

—保育教材の製作を通して子どもの反応をふまえた学生の学び—
. 片桐恵子・渋谷るり子 . . 10

【研究論文】

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「自立心」についての一考察

—ニューヨーク州日英プリスクールの保育環境より考える— 片桐恵子 . . 18

保育者養成校におけるピアノ弾き歌い学習のあり方を考える

—新しい教本作成への模索— 川上由美 . . 26

本校独自の実習体験が本実習に与える影響と今後の課題

—事後指導から考える振り返りを取り入れた実習体験より考察する—
. 渋谷るり子・片桐恵子 . . 34

自然の音環境に意識を向けた活動の一考察

—公園での音探しの活動から— 渋谷るり子 . . 44

ソフィア・アラベラ・アルウィンの“会集”の保育実践について

—玉成幼稚園の保育実践内容の一考察— 畠田貞子 . . 52

『越谷保育専門学校研究紀要』第８号 規程

. 65

【授業実践報告】

音楽Ⅰ授業の実践報告
— 実践につながるピアノ授業をめざして—
横関由紀※ 永島晴美※

Practical Report of Music I class
— Aiming at practical Piano classes —
YOKOZEKI Yuki • NAGASHIMA Harumi

本校は、2年間で卒業と同時に幼稚園教諭免許・保育士資格が取得できる保育者養成校である。保育者を目指し入学してくる学生の内、ピアノの初心者には6割から7割と多く、確かに厳しいスタートであるが、2年間の学びにおいて保育で歌われる童謡を40曲以上、経験者はさらに多くの曲を習得しそれぞれの就職先にて活躍している。

近年、就職先を考える際、幼稚園（認定こども園含む）より保育園を選択する傾向がある。その理由の一つに、幼稚園ではピアノを弾く機会が多く求められることが挙げられる。2年間でピアノの基礎力を身に付け、演奏技術を磨くとともに、授業での学びが実践に生かされるためのカリキュラムであることがこれからの養成校の課題となっておりと感じ、本稿では専門教育科目である音楽Ⅰ授業の現在の取り組みについて実践報告することとした。

キーワード：ピアノ、基本的な演奏技術、弾き語り、ロールプレイ、ディスカッション

1. はじめに

本校では、入学前ピアノ講習会を開講し、初心者中心に基礎から学べる機会を設け、入学後の授業にスムーズに繋がれるようにしている。また入学後は、週1回の授業の他に音楽専任教員による「放課後のサポートレッスン（80分×2日間）」を設け、初心者をサポートする体制を整えている。もちろん日々の練習量など、個人の努力次第で進度もそれぞれだが、卒業時期には初心者で入学した学生も40曲以上を習得することが出来ている。

2年次の実習が全て終了する秋頃から本格的な就職活動に入る訳だが、ここ数年、ピアノが苦手、もしくはピアノ技術に自信がないために幼稚園への就職は諦める話を耳にする。ピアノを弾く機会が幼稚園より少ないという理由で保育園を選ぶ傾向にあることは、非常に残念な選択である。なぜなら、養成校で学んだことが実践に繋がっていないことと卒業後にピアノを

弾く機会が減少することでせっかく時間をかけて身につけた技術もあつという間に衰退してしまうからだ。楽器演奏は特にその傾向にあると言われている。2年間養成校で学んだことをより実践に繋げ、学生が自信をもって就職するためにはどのような授業カリキュラムにするべきか、改めて検討する機会に直面していると考え

2. 授業の位置づけ

本校では、1年次必修（音楽ⅠAピアノ基礎・音楽ⅠBピアノ基礎）、2年次選択（音楽ⅠC弾き語り演習・音楽ⅠD弾き語り演習）の授業を「教科に関する科目」と「保育の表現技術」の同一科目として開講し、童謡の弾き語り¹⁾やピアノの実技等、音楽に関する専門的な知識や技能を習得する科目と位置づけている。

以前は幼稚園等の就職試験において弾き語り曲とピアノ曲が課せられていたが、近年は弾き

※ 越谷保育専門学校専任教員

語り曲1～2曲、もしくは、ピアノの実技を求めない傾向がみられる。また、平成23年度より保育士養成の教育課程では「基礎技能」から「保育の表現技術」へと変更された。そのような時代の流れと共に、本校では2年間の集大成として、保育者らしい演奏技術や完成度の高い実践力の習得を学生の到達目標としている。

3. 授業実践報告

(1) 1年次必修

<授業概要>

読譜に必要な基本的な楽典を学びながら、簡単な弾き語りや保育現場での生活の歌、ピアノ実技を習得する。2度(7回目と15回目)の授業内発表では人前での演奏をする。この経験を通し実習での実践力を身につけ、必修曲の習得を目指す。1年次の必修弾き語り曲は25曲。

音楽ⅠAピアノ基礎 (前期)

バイエル3番から68番まで(数曲抜粋)・音階生活の曲「おはよう・おべんとう・おかえりのうた」

童謡「むすんでひらいて・ぶんぶんぶん・かたつむり・チューリップ・たなばたさま・あなたのおなまえは・きらきらぼし・とんぼのめがね・うみ」を学ぶ。

<一般目標>

- 日常の保育における歌の伴奏(弾き歌い)を想定した、基本的な演奏技術を身につける。
- 読譜に必要な楽典知識を習得する。

<到達目標>

- ①必修曲の習得
- ②楽譜を理解して弾くことができる。
- ③歌いながら弾くことができる。
- ④子どもと一緒に歌うことをイメージして演奏する。
- ⑤発表の課題曲を人前で演奏する。
- ⑥楽譜に表記されている演奏表現の意味を知る。

音楽ⅠBピアノ基礎 (後期)

バイエル94番まで(数曲抜粋)・音階

生活の曲「おはようのうた・はをみがきましよう・さよならのうた」

童謡「山の音楽家・どんぐりころころ・ありさんのおはなし・せんせいとおともだち」

行事等で歌われる曲「こいのぼり・お正月・まめまき・うれしいひなまつり・思い出のアルバム・ハッピーバースデー」を学ぶ。

<一般目標>

- 日常の保育における歌の伴奏(弾き歌い)を想定した、基本的な演奏技術の習得。
- 子どもが音楽に親しみ、楽しめる環境づくりを身に付ける。

<到達目標>

- ①必修曲の習得
- ②歌と伴奏のバランスを考えて演奏する。
- ③楽譜に表記されている演奏表現を理解する。
- ④歌詞の情景をイメージして演奏する。
- ⑤場面に応じた設定で導入を考え、子どもと一緒に歌うことを想定し発表する。

<発表形態について>

「音楽ⅠAピアノ基礎」は、子どもと一緒に歌うことをイメージして保育者らしく弾き語りで発表する。発表曲は各個人の進度に応じて選曲も変わってくる。

「音楽ⅠBピアノ基礎」は、子どもが音楽に親しみ楽しめる環境を想定し、指導法²⁾の実践を演奏前に加えて弾き語りの発表を行う。

導入の一部を紹介すると、歌詞の内容を模造紙に書く、曲にちなんだ話をする、歌詞の内容を絵・製作物など視覚的な保育教材を用いて発表する、などがある。

このような対話的な実践形式の発表を体験しながら、バイエル3番から始めた初心者もこの1年間で基礎を身につけ、各個人の努力によってある程度の読譜力や演奏技術を身につけることが出来、この段階で弾き語り曲を25曲は習得することになる。

(2) 2 年次選択

2 年次になると選択授業となり、前期に「音楽 I C 弾き語り演習」後期に「音楽 I D 弾き語り演習」が組まれている。「音楽 I C」については、ほぼ全員の学生が受講している。その背景には、8 月の保育実習、9 月の教育実習の責任実習においてピアノを弾く機会があり、さらにピアノ技術の向上を目指していかなければという危機感を感じていることが考えられる。後期に行われる「音楽 I D」については、完成度の高い実践力を身に付けると共に、就職に向けてレパートリーを増やすことを目標に多数の学生が受講している。

<授業概要>

子どもは音楽に関わる活動を好み、現在の保育現場ではピアノを使い子どもと音楽活動を楽しむ場面が多い。この授業では弾き歌いを中心としたピアノの技術の更なる習得をめざしながら、音楽に関わる活動の工夫や、音楽に親しみ楽しめる環境を考え、ロールプレイ（模擬保育）³⁾ やディスカッションを通して実践力を養っていく。また、幼児たちがさまざまな場面で心を動かしていることに共感出来るよう、授業内で色々な曲に触れながら自らの感性を磨いていく。実習への準備に向けた選曲ができる。

音楽 I C 弾き語り演習（前期）

<一般目標>

- 季節に応じた歌の伴奏（弾き歌い）を習得する。
- 幼児が音楽に親しみ、歌を歌ったりする心地良さを十分味わえるような音楽表現を身に付ける。
- 幼児の音楽への興味を引き出すための方法について考察し、様々な導入があることを理解する。

I C 弾き語り演習課題曲は、各季節の曲 4 曲を含む 8 曲以上を担当教員と相談しレベルに応じて

て選曲、習得する。

<到達目標>

- ①具体的な練習内容の習得
- ②弾き語りの部分実習を考え発表する
- ③楽譜に指示された演奏表現を実践できる
- ④自分のレベルや目標に合った曲を選曲し習得する

音楽 I D 弾き語り演習（後期）

<一般目標>

- 目的に応じた歌の伴奏（弾き歌い）を習得する。
- 完成度の高い実践力を身に付ける
- 幼児が音楽に親しみ、歌を歌ったりする心地良さを十分味わえるような音楽表現を身に付ける。
- 幼児の音楽への興味を引き出す方法を理解し、自分らしい導入の仕方を身に付ける。

I D 弾き語り演習課題曲は、掛け合いの歌と行事の曲各 1 曲を含む 8 曲以上を担当教員と相談しレベルに応じて選曲、習得する。

<到達目標>

- ①具体的な練習内容の習得
- ②弾き語りの部分実習を考え発表する
- ③楽譜に指示された演奏表現を実践できる
- ④各自の目標に合った曲を選曲し、保育者らしい総合的な技術で演奏する

<発表形態について>

1) ロールプレイ

ピアノレッスン室を保育室に見立て、6～7 人の少人数グループで行う。発表者は実習時と同じ様にエプロンを着用し保育者として模擬保育を行う。その際、何歳児クラスを想定しているのか、時間帯や状況等も自由に設定することが出来、参加している学生はその状況に合わせて子ども役となり参加する。

ここでは、2019 年度の音楽 I C・I D 授業

での発表の中から一部を紹介する。

事例1 「いもほりのうた」

- ・ 設定…3 歳児 初めての芋掘り遠足前を想定
- ・ 学生が考えた指導の方法…「うんとこしょどっこいしょ」のフレーズを楽しみながら、歌に合わせてツルを引っ張り芋を収穫する模擬体験

(活動)

里芋・じゃが芋・さつま芋等、いろいろな種類の芋と、土の中に埋まっている畑の写真を示して、どれがさつま芋かを聞く。初めての芋掘り遠足への期待と、どのように掘るのかの練習をすることを伝える。

イラストを貼り、1・2・3 番の歌詞の違い（でっかいぞ・ちっちゃいぞ・まっかだよ）をわかりやすく示す。

畑の土に見立てたこげ茶色の紙袋から葉っぱのついたツルが少し出ている。みんなでそのツルを引っ張ると大小様々なさつま芋が出てくる。(写真 1-1)

(写真 1-1)



「みんなでツルを引っ張ってお芋の収穫をしよう」と声かけをした時に、「私が一番前で引っ張る」「じゃあ、次は私ね！」等と興奮気味にツルを持ち、子ども役の学生全員が楽しんでいた。そしてツルが長く、「うんとこしょ～」の歌詞に合わせてみんなで何度も引っ張り、いろいろなサイズの芋が出てくるたびに歓声を上げていた。(写真 1-2)

(写真 1-2)



(発表後)

参加した学生からは、

- 1) ゆっくりとした優しい口調で、全員が楽しめる参加型の発表がよかった。
- 2) 歌った後に芋の製作活動につなげて良いのではないか。
- 3) とても長いツルで何度も引っ張ることが出来、なかなか出てこないところが子どもの興味を引く。

等の意見が出た。

事例2 「南の島のハメハメハ大王」

- ・ 設定…4 歳児 朝の会で季節の歌を歌う想定
- ・ 学生が考えた指導の方法…歌詞に当てはめた紙芝居を作成し、子どもたちの理解を深める指導法

(活動)

自作の紙芝居で歌詞の確認をする。1～4 番までの大王、女王、子ども、そして島に住む人々が出てくるが、ストーリーもオリジナルで登場人物のキャラクターがしっかり作り込まれている。

- (例) 大王…夜こっそり城を抜け出して丘の上から星を見ている。いつか星を集めるのが彼の夢。(写真 2-1)

(写真 2-1)



(例) 女王…朝日が昇った後に起きてきて、夕日が沈む前に寝てしまうので、大王がいつか星を見せてくれるのが彼女の夢。(写真 2-2)

(写真 2-2)



子どもの目線で見やすいように座って、情感豊かに読む。子ども役の学生たちが一気に引き付けられ非常に集中して聞いていた。特徴をつかんだ鮮やかな絵も子どもたちに喜んで受け入れられる一助になっている。(写真 2-3)

(写真 2-3)



(発表後)

参加した学生からは、

- 1) 自然とイメージが出来る。
- 2) 子どもたちへの伝わりやすさを考える上で参考になった。
- 3) 紙芝居は自分の選択肢の中になかったが、楽しく覚えながら歌えるように工夫するという着眼点を得られた。
- 4) 話し言葉が丁寧で、表情豊かな読み方が保育者らしい。かわいらしい絵が目から入ってきて内容が伝わりやすい。

等の意見が出た。

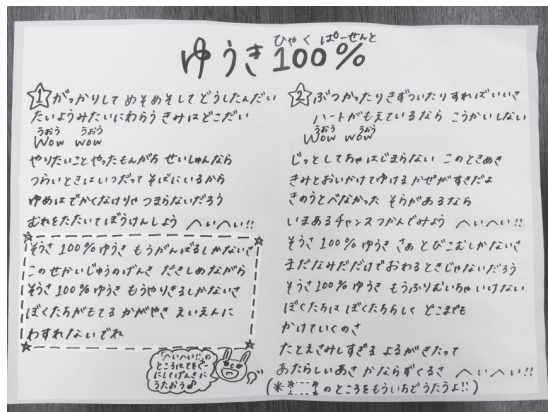
事例3 「勇気 100%」

- ・ 設定…5 歳児 朝の会終了後、卒園式に向けた歌の練習初日を想定
- ・ 学生が考えた指導の方法…テーマソング等の長い曲を初めて下す時の指導法（自作の歌詞カード）

(活動)

卒園式で歌うため今日から練習をする、という設定で、1 人 1 枚ずつ歌詞カードを準備した。“ヘイヘイ”の掛け声の入るところや、繰り返して戻る箇所に印があることを伝えて確認をする。(写真 3-1)

(写真 3-1)



少しずつ区切りながら保育者がお手本としてまず歌い、子どもたちが後から歌う、という方法で練習をする。メロディのみのピアノの後、伴奏を付けて歌うところまで順序立てて丁寧に進めた。

ピアノのそばに子どもたちを集めて柔らかい表情で卒園式の話をし、体ごと子どもの方に向けて歌の練習をした。伴奏をしながら歌う時も子どもたちに視線を送りながら楽しく一緒に歌っていた。(写真 3-2)

(写真 3-2)



(発表後)

参加した学生からは、

- 1) 長い曲でもわかりやすく工夫されていた。
- 2) 初めて歌う設定での指導法が参考になった。
- 3) 保育者のそばに子どもたちが集まって歌うのが良かった。

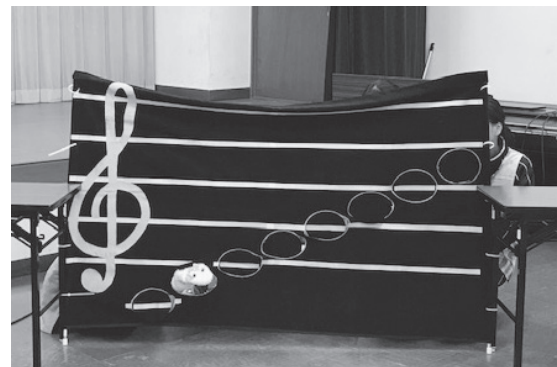
等の意見が出た。

事例 4「ドレミのうた」

- ・ 設定…5 歳児 大好きな歌で音楽遊びをする時間を想定
- ・ 学生が考えた指導の方法…みんなで楽しめる教材を作成し、子どもと一緒に演じる参加型体験

黒い布に白テープを貼った五線、ヘビのパペット 8 体を事前に準備する。子ども達が好きな音を選び、歌を歌いながらドレミの音符の穴からパペットの顔を出して楽しむ。パペットは靴下を利用して手作りし、口をパクパクさせながら歌をうたっている様な工夫が施されている。(写真 4-1、4-2)

(写真 4-1)



(写真 4-2)



(活動)

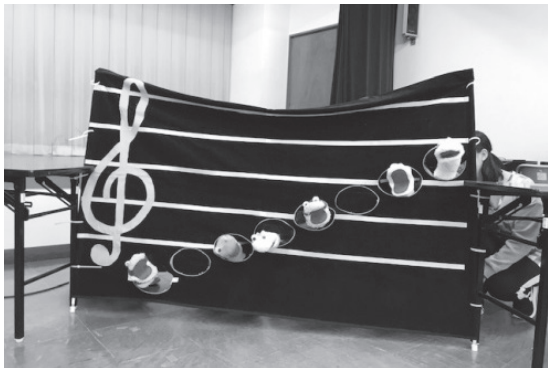
子どもに 1 体ずつパペットを渡し、五線の裏側のドレミの音符の穴からパペットの顔を歌に合わせて出す。「さあ、うたいましょう～」の所は全員が顔を出したりと、ドレミの歌を十分に楽しめるように進行していた。(写真 4-3)

(発表後)

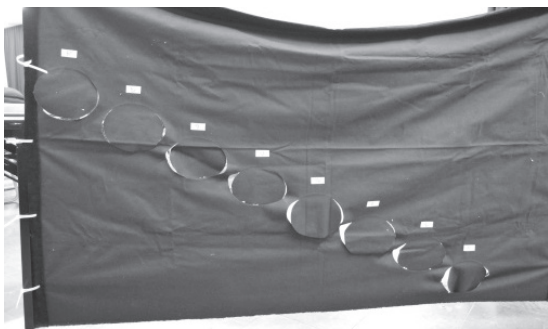
参加した学生からは、パペットの可愛さに魅了され、作り方等盛んに発表者に質問していた。参加型にすることでパペットを演じながら一緒に歌い、ドレミを理解しながら楽しめることを実感したようだった。黒い布の裏側には、各音の場所が分かるように階名が表示され、子どもが交代しても楽しめるという意見が挙がった。(写真 4-4)

実際の保育ではいくつかのグループに分け発表型にして見せ合うと演じている側も見る側も楽しめるという意見が出た。参加した誰もが、今回のアイデアをもらってパペットをぜひ作りたいと声があがっていた。

(写真 4-3)



(写真 4-4)



(写真 4-5)



2) ディスカッション

一人の発表が終了後、参加した人がシートの内容について考察点を記入し、発表者進行の下、5分程度のディスカッションを行う。ディスカッションシートの内容は以下のとおりである。

- ①導入は子どもに伝わりやすい言葉遣いでやり取りのある内容であったか。
又、どのような点が工夫されていて良かったか
- ②演奏、歌、言葉遣い、表情、進行等、保育者らしい立ち居振る舞いだったか。
又、特に良いと感じた点
- ③より良くなるためのアドバイス点
- ④あなたがこの曲を子どもと一緒に歌うとしたら、他にどのような導入や環境づくりを設定しますか？

4. 授業担当として考察

(1) 専門学校は2年間で幼稚園教諭免許と保育士資格を取得するので、4年制大学の学びに比べると、限られた時間の中で凝縮されたカリキュラムをこなしていかななくてはならない。他教科とのバランスを考えながら、ピアノも学んでいくことになるのだが、ピアノに関しては、レポートのように短時間で課題を完了させることは不可能であり、基本的な楽典を学んだ後は、いかに日々の自己練習を積み重ねるかが上達の差につながっていく。現に、毎日30分以上地道に予習復習を兼ねた練習をしている学生と、週1回の授業時のみ、その場で練習している学生とでは、同じ初心者スタートであっても、入学して2～3か月経つ頃には大きく差がついてくることが分かる。音楽にかかわらず、どんなことにも通ずることだが、継続させる努力が必要になると言える。

初心者スタートの学生も入学数か月後、徐々に譜読みに慣れ、鍵盤の位置も覚えてくると、次第に弾くことがそれ程億劫に感じないようになる。そして曲らしく弾けるようになってくる

と演奏することが楽しくなり、次はこの曲を弾けるようになりたいと前向きに考えられるようになる。この段階までくればあとは各個人のペースで習得数を増やしていけば良い。それが1年次の到達目標である。2年次の選択授業で行われる中間発表のロールプレイも、発表者が保育者らしく話し方や表情を変え、子ども役の他学生とやり取りしていく内に、保育室のある一場面のような空気感が自然とうまれてくる。発表時間は5分程度。数分、歌をうたう時間なのだが、子どもに語り掛ける保育者の言葉や導入には、必ず歌に対する保育者の思いやねらいがある。その思いやねらいを実際に感じながら予測不能な子どもとのやり取りに言葉を選んで対応し、模擬保育を進めていく。進めていく中で子ども達と歌う楽しさを共有したり、歌をより理解して歌いやすくするための導入法を深く考える機会となる。発表後は、実際に子どもに伝わりやすい導入法であったか、歌いやすいテンポ設定であったか等、良い点も改善点も互いに気づき合うディスカッションを通し、意見を交わしていく。1グループに7人いれば7パターンの模擬保育に参加できるこの演習授業は実践的であり、学生にとって刺激にもなる良い学びになっているという感想が挙がっている。(横関)

(2) 今年度の後期のロールプレイの発表も終了した。前期での経験を生かして更にレベルアップした学生の姿が多く見られた。1年生の後期で初めて導入つきの発表をしてから、幼稚園・保育園で各2回ずつの実習も経験し、ちょうど1年後となる今回の発表では現場に即したアイデア豊かなロールプレイが出来るまでに成長したと感じる。学生は自分の発表のみならず他の学生の発表に子ども役で参加することによって見えてくるものがあることに気づき、自らが楽しんで積極的に参加している。自分が弾いたことのない曲を、子どもと一緒に楽しんで歌うためにはどのようなアプローチの方法があるかを考える良い機会として捉えている。

また初めての曲を子どもに下す方法や何歳児

向けの設定とするのか等、全員で想像力を働かせて、より伝わりやすい内容となるようディスカッションして共有する。そこには卒業までの2年間で築いてきた信頼関係があり、褒めることばかりにならずにより良い発表にするための活発な意見やアドバイスが出されている。本校のカリキュラムとして、また音楽授業担当者として、到達目標としている「保育者らしい総合的な技術で演奏する」力が2年間の学びで身に付いていると推察できる。

2年生の発表の形態をロールプレイにしてまだ2年目であるが、シラバスの内容を理解し回を重ねるごとに充実した発表・ディスカッションとなっている。学生にとって実践に結びつく技術を習得出来る有益な授業となるよう、今後もカリキュラムに修正を加えながら充実した学びに繋げていきたいと考える。(永島)

5. まとめと今後の展望

2年間を通して、「音楽ⅠAピアノ基礎」・「音楽ⅠBピアノ基礎」の課題曲として25曲を習得し、2年次の「音楽ⅠC弾き語り演習」・「音楽ⅠD弾き語り演習」では課題曲16曲以上習得していく。初心者としてスタートした学生も2年間で41曲も弾くことが出来るようになり、改めて数字で表すと驚異的な進歩である。ただ継続していないと、せっかく習得した技術があつという間に後退してしまうということを念頭に置いておかなければならない。それに加え、保育の現場で使われている曲は多数あり、学校で学んだ曲はまだ一握りである。そのため、就職後は各就職先で日常歌われる曲を自分で練習していく必要がある。例えば宗教曲等を生活の中に取り入れている園もあれば、わらべ歌を中心に取り入れている園もあるため、知らない曲は自力で習得していくことになる。また新しい歌は、今も次々と作られているため、常に子ども向けのテレビ番組や情報をキャッチし、決まった曲だけではなく、毎日練習する時間を見つけ、新しい曲のレパートリーを増やしていくことになる。保育者が奏でるピアノ演奏

は子ども達が気持ちよく歌えるための伴奏である。ピアノの技術を磨き、間違えないように弾くことだけが保育者に求められているのではない。はたして子ども達は楽しんで歌えているのだろうか、どんな表情をして音楽に触れているのか、コミュニケーションはとれているのだろうか、感性豊かな心を育む音楽の時間になっているだろうか。

音楽担当者としては、2年間で基礎力をしっかりと身に付けた上で、上手に演奏するというより、子どもと情緒豊かに音楽を楽しめる保育者を育成し、保育現場に送り出したいと考えている。就職後も常に自分を磨く研究心・向上心をもって日々練習する姿勢を持ち続け、様々の体験を通じて感性豊かな保育者になって欲しいと願っている。

注

- 1) 弾き語りとは、ピアノを演奏しながら歌をうたう弾き歌いのことを指す。
- 2) 授業では指導法のことを「歌う前の導入」としている
- 3) 3頁の＜発表形態について＞を参照

付記

本実践報告は、越谷保育専門学校の音楽Ⅰ授業の実施内容を専任の音楽教員2名の総意によってまとめた授業実践報告である。

主に1.2.3. 3-1) ロールプレイ事例4 4.5を横関が、2. 3-1) ロールプレイ事例1. 事例2. 事例3 4を永島が、担当分担執筆した上、2人で推敲を行ったものである。

謝辞

本稿の執筆にあたり、授業内発表の様子の写真掲載に協力して頂いた学生の皆様に感謝申し上げます。

【実践研究論文】

実習体験における教育実習Ⅰの課題と方法 — 保育教材の製作を通し子どもの反応をふまえた学生の学び — 片桐恵子※・渋谷るり子※

Theme and way of student teaching I in a training experience — What students learned, being based on childrens' reaction through the making of teaching materials for childcare — KATAGIRI keiko・SHIBUYA Ruriko

現場での実習に入る際、子どもたちの前で自己紹介をすることを前提に、授業で自己紹介の教材を製作、ロールプレイの実践を行った。その後、学生は実習体験の現場で実践体験を積み重ね、自己紹介の教材を更に改良し教育実習にいかされたことがわかった。授業と実習体験の交互の学びの繰り返しが学生の気づきや理解を深め、教育実習に臨めたことが考えられる。学生のアンケートをもとに教育実習の意義につながる役割に本校独自の実習体験があり、中央審議会答申の「学校現場や教職を体験させる機会を充実させることが必要である」との答申を踏まえ考察を試みた。

キーワード：教育実習指導、実習体験、部分実習、自己評価、資質と能力

1. はじめに

2015年の中央審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」では、「実践的指導力の基礎の育成に資するとともに、教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせる機会として、学校現場や教職を体験させる機会を充実させることが必要である」¹⁾と養成校の学生が教職の意義、教員の役割、職務内容などに関する理解を深める中で、教員を志願するものは教職に対する自らの適性を考察することが述べられている。その方法としては、教育実習その他の体験を通じた教職の実体験・類似体験などの機会を教員志願する者に与えることが言われており、養成段階において、現場における実践、実習の重要性が分かる。

本校の学生が初めて経験する実習が入学後の9月の幼稚園実習（以下、教育実習Ⅰという）である。1年生前期に「教育実習指導」の授業で、実習の目的に合わせて幼稚園の一日の保育の流れ、年齢ごとの子どもの姿、保育者の職務や役

割など、幼稚園での実習に向けて最低限必要な知識と技術について、理解を深め実践的に学べるように指導計画を立て実践している¹⁾。

入学をしてくるほとんどの学生が、中学、高校での職場体験を通して、将来、子どもに関わる仕事をしたいと思い描き、保育園もしくは幼稚園での就職を希望している。入学後は普段の授業が忙しく、実習に行くまでに現場の子どもや教職員達と関わる機会はほとんどない。その現状より、本校では、以前より「教育実習指導」の授業と並行して5回の「実習体験」を6園の附属幼稚園と連携し実施している。実習体験の目的は、教育実習Ⅰに行く前に現場の幼稚園の雰囲気を感じ取りながら、授業の学びと実体験を交互に繰り返すことで、より理解を深めることである。また、学生が一番まずく、実習記録や部分実習指導案の書き方等も教育実習Ⅰに倣い実施し、実習体験を行う附属幼稚園には、子どもに対する自己紹介をはじめ多くの部分実習の経験を学生にさせていただけるようお願いをしている²⁾。

※ 越谷保育専門学校専任教員

2018年9月、受講学生に教育実習Ⅰの事後指導後「今後の課題として必要と思われる項目」についてのアンケートを実施した。学生自身は、「部分実習の導入やまとめ方」「ピアノのスキル」「年齢に合わせた援助」と答えた学生が全体の半数を占める結果であった（表1）。そこで、今年度の「教育実習指導」の授業では、実習初日に必ず子ども達の前で自己紹介をしなければならないことを踏まえ、自己紹介教材を製作し、授業時にロールプレイを実践した。

幼稚園教育要領には、「環境全体が緊張や不安を感じさせるような雰囲気では、活動意欲は抑制されてしまう。幼児が安心して周囲の環境に関われるような雰囲気が大切である。」そして、さらに「幼児の中に興味や関心がわいてきて関わらずにはいられないように、そして、自ら次々と活動を展開していくことができるように配慮され、構成された環境が必要である」と述べられている³⁾。

本研究は、一つ目に学生自らが製作した自己紹介の教材が教育実習指導（以下、授業時）の授業及び実習体験を通し、「教育実習Ⅰ」の実習がスムーズに実践できる手がかかりとなり、実習に対する不安が少しでも解消でき、自信につながることへの検証である。二つ目は子どもが安心して実習生を受け入れ、同時に実習生が行った自己紹介に興味や関心を持ち、実習生を受け入れる環境が整うことで、実習生とスムーズに関わることができたかどうかの検証をする。

そこから、学生自身が自己紹介の保育教材を準備することの過程の中で、保育者としての仕事の一部を経験する。その教材を授業時、実習体験時、「教育実習Ⅰ」時と回を重ね段階を踏むことでどのように学び得たのかを明らかにすることで、より体系的、自律的な学びへの手がかかりを得ることを目的とする。

【表1】
今後の課題として必要と思われる項目
(2018年度1年生)

Q. 今後の課題として必要と思われる項目	パーセント
絵本・紙芝居や手遊びの際の導入やまとめ（終わり）方	14%
ピアノのスキル	12%
年齢に合わせた援助	11%
手遊びのレパートリー	10%
記録の中の気づきの記載	9%
絵本・紙芝居や手遊びなどの年齢、興味関心に応じた選び方	8%
実習記録の全体的な記述	7%
実習のねらいの立て方	7%
部分・責任実習指導案の立案	5%
その他の遊びの知識	5%
考察の書き方、内容	4%
その他	4%
自己紹介	3%
環境構成の書き方	2%
合計（%）	100

2. 研究方法

（1）調査対象

受講学生 57 名

（2）調査内容

- ①自己紹介教材についてのアンケート
- ②実習体験時、自己紹介に関する自由記述式アンケート
- ③実習後、自己紹介、部分実習、環境構成に関する選択形式アンケート

（3）調査時期

2019年4月～9月

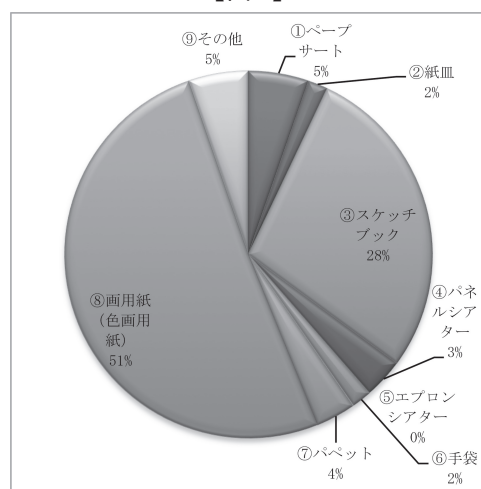
（4）倫理的配慮

学生には、来年度以降の教育実習指導の授業の改善を含め、教育実習Ⅰがスムーズに行えるように検討する等の趣旨説明を行い、調査結果については目的以外に使用しない旨を伝え、同意を得た。

3. 結果と考察

(1) 自己紹介で作った教材の種類

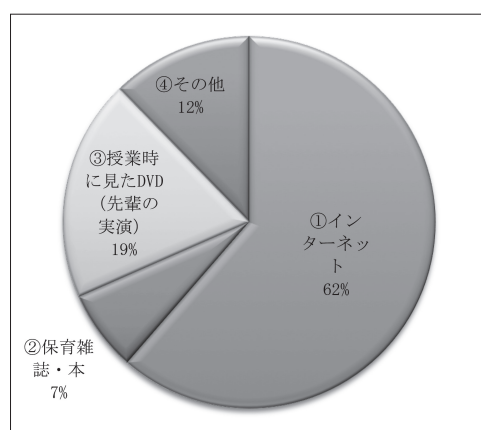
【図1】



「自己紹介で作った教材は何か」について、学生には項目に○を付けてもらった。図1は、準備した教材の回答である。図1より、1番多かった教材は画用紙(色画用紙)であり、57名中29名で全体の51%であった。2番目に多かったのがスケッチブックで16名、28%であった。続いて、ペープサートやその他(からくり屏風、フェルトや生地や包装紙を使用)では、3名で5%。パネルシアターやパペットは、2名で4%、紙皿は1名で2%であり、エプロンシアターは0%であった。

(2) 教材作りで参考にしたもの

【図2】



「自己紹介教材を製作するにあたり、参考にしたものは何か」について、学生には項目に○を付けてもらった。図2は、参考にしたものの回答である。図2より、1番多く参考にしたのはインターネットであり、57名中35名で全体の62%であった。2番は授業で視聴した昨年度の体験実習時の実演風景より参考にした学生が11名で19%であった。続いて、その他は7名で12%であった。その他での回答は、7名中6名が自分で考えたオリジナルであると回答、残り1名は先輩から聞いたとの回答であった。保育雑誌や本を参考にした学生は、4名で7%であった。

製作時期は、1回目の授業で説明をした後、自宅で1週間の製作期間とし、2回目の授業時にロールプレイを実践した。ロールプレイ後は、自分が製作した作品をテーブルに並べ、自由に手にとり学生同士の閲覧の時間とした。

写真1 ロールプレイ



写真2 ロールプレイ



写真3 製作(作品)閲覧



写真4 製作(作品)閲覧



(3) 授業時に製作した後、実習体験時には改良を加えたか。

【図3】

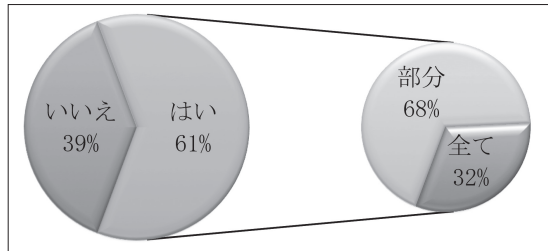


図3より、57名中35名の学生が、改良したという結果である。部分的に改良した学生が7割近くおり、3割の学生が全て作り直し実習体験時の自己紹介の教材として準備をしたという結果である。改良した学生の理由としては、「クラスメイトの自己紹介を見て、他の人からの意見も頂き改良した方が良いと感じた」「何度か使用した際、破損したため、強度を強くするために改良した」「分かりやすく文字を太くした」「名前が大きく見えるようにした」「両手がふさがってしまうので、紐が首からかけられるように改良した」「画用紙が折れないようにラミネートで強化した」「クレヨンで画用紙に書いていたら、色が擦れたので、色画用紙に変更した」「どの年齢の子どもでも、分かりやすく利用しやすいように改良した」「クイズ形式になるように改良した」「裏表紙が白紙であったため、他の学生を見て参考に改良した」「めくりやすいように穴を大きくし、リングを付けた」等の理由であった。

改良しなかった理由には、「この教材での子どもの反応が見たいので改良しなかった」という理由が多く、「良くできていたので改良しなかった」との少数の理由もあった。

写真5 実習体験時の様子



写真6 実習体験時の様子



写真7 実習体験時の様子

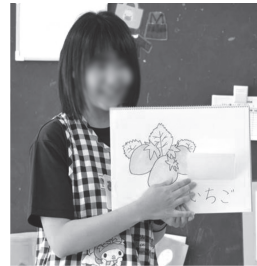


写真8 実習体験時の様子



(4) 自己紹介に関する自由記述式アンケート
(実習体験時)

実習体験で実際に子ども達の前で自己紹介教材を使って、自己紹介を行った。授業では、学生同士で子ども役と実習生役でロールプレイを実施した。その後、他学生の製作した作品の閲覧を行い、他の学生が行った保育技術のほか、製作したものの教材の種類や仕掛け等を閲覧する時間を設けた。それを踏まえ、実習体験に臨むにあたり、「自己紹介教材に関して事前に工夫した点」(表2)、実習体験時に実際に子ども達の前で行った時の「子ども達の反応」(表3)について以下、結果である。

①自己紹介教材に関して事前に工夫した点(表2)について

工夫した点では、絵や文字の大きさを見えるように工夫、仕掛けや音の出る教材を使用する等の保育教材に関する工夫を行った学生と、子どもが参加できるクイズ形式で行う、大きな声で行う、挨拶してから行う、子どもの反応を見ながら行う等、保育技術的な工夫を行った学生の2パターンに分類された。

この結果より、学生自らが発表するロールプレイを通じた経験が、気づきや省察を深めることにつながったと言える。特に他の学生の製作した作品を閲覧したことにより、製作した教材のどの点を工夫したのか、どんな材料で製作したのか等、自分では考えつかなかったことを他の学生の製作を閲覧することで、刺激を受けると同時に子ども達の前でやる自分の姿を想像し、教材の工夫ではなく、クイズ形式で行うことが身振り手振りを大げさに実践する等保育技術的な面の工夫にもロールプレイでの省察を踏

まえ気付けたと言える。実習体験に向けてのモチベーションにつながったことが考えられる。

【表2】事前に工夫した点

事前に準備し工夫した点	人数
*子どもが参加してくれるクイズ形式で行うこと	22
絵や文字を大きく、見えるように工夫	7
スケッチブックの教材を使用し、仕掛けを作った	7
授業時より内容をプラスした	5
両手が自由になるように、教材を首からかけられるように工夫	3
*大きな声でやること	3
子どもが速読しやすいイラストを描いた	1
後ろの子どもも見えるように明るい布色を使用	1
*挨拶をしてから行うこと	1
*子どもの反応を見ながら丁寧に行うこと	1
絵本のように作成したこと	1
平仮名が読めない子どものことを考えイラストで作成したこと	1
色をはっきり見えるようにラミネートで作成したこと	1
*身振り手振り大げさに実践すること	1
子どもの興味を引くように音の出る教材を使用したこと	1
*子どもが知っているリズム感が良い歌で自己紹介を行うこと	1
合 計	57

②子ども達の反応（表3）について

子ども達の反応は、子どもが興味を持ち、楽しんでくれたこと、子ども達への反応も良かったとの結果であった。しかし、クイズが難しい、年少クラスでの反応が少なかった、質問内容の理解が不十分で子どもの返答が違っていた等良い反応ではない結果であった。

子ども達の反応を見た学生は、次の教育実習に向けて、教材に改良を加えた方が良いのか、少なからず次の課題へ繋がったことが考えられる。

子ども達からの反応は、学生が想像していたような結果でなかったことも表3より伺える。しかし、この子ども達からの反応を受け、次の教育実習に向けて、何をすべきなのか、自分に欠けていたことを含め改めて気づき、どのような準備や教材への改良等が必要なのか理解できたように感じる。授業時のロールプレイと比較しても、子どもや保育者がいる実習体験という

【表3】子ども達の反応

子ども達の反応	人数
大きな声で答えてくれた	19
クイズ形式だったので、楽しんでた	10
好きなもの、興味が同じだった時に同調してくれた	8
「〇〇先生と呼んでね」といったら、呼んでくれた	6
自己紹介の教材に反応し対して「かわいい」と反応	3
質問にしっかり返答し、自分達のことも教えてくれた	1
自己紹介が終わってから「先生楽しかった」「先生すごい」とコメントをもらった	1
興味を持ってくれた	1
自己紹介カードをしっかりと見ていた	1
イラストに関するコメントを答えてくれた。例えば「きのこは食べれない」等	1
*クイズが難しいと言われた	1
*年少クラスは反応が少なかった	1
*質問した内容の理解が不十分で、子どもの返答が違っていた	1
*平仮名が読める子どもは反応良かったが、読めない子どももいた	1
*逆に質問された	1
*「終わるのが早い」と言われた	1
合 計	57

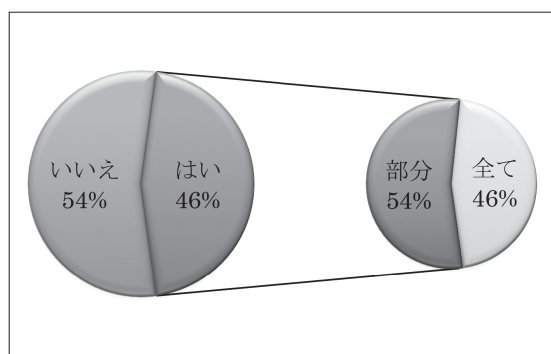
環境の中での気づきや学びにつながったと言える。また、事前に工夫した点の結果からも実習体験に向けて、子どもの興味や関心を引き出すことができるように自分なりに工夫し、保育教材の製作や事前練習をするといった技術を磨く等の準備や心がまえはできていた。しっかりと準備をして臨んだ実習体験ではあったが、実際の子どもの反応の違い、年少、年中、年長と発達年齢やクラスによって反応が異なること等、実体験を持って改めて理解したように感じる。

例えば、平仮名が読める子どもの反応は良かったが、読むことが難しい子どもがいたクラスで自己紹介をした学生は、実習体験を通して子どもの発達の違いを理解できたと言える。準備段階の工夫した点で、平仮名が読めない子どものことを考えイラストで作成した学生もいる。この学生は、事前に子どもの発達の理解ができており、準備段階から取り組めていたことが分かる。

並行した授業の中では子どもの発達の的なことを学ぶ科目があるが、ほとんどの学生が実習体験のように実習生（教職）を体験した時に子どもの発達の違いを明確に実感できたように感

じる。このことから本校の実習体験は、中教審の答申にある「学校現場や教職を体験させる機会を充実させる」ことにつながっているのではない。

(5) 授業時に製作した後、教育実習時には改良を加えたか。



【図 4】

図 4 より、57 名中 26 名の学生が改良したという結果である。実習体験時に改良した学生と比較しても教育実習時に改良した学生は少ないことがいえる。

教育実習時に部分的に改良した学生が 54%、全て作り直し改良した学生は 46%であった。

改良した学生理由としては、「子ども達により名前を覚えてもらいたかった」「名前をより覚えてもらうために名前の質問ページを追加した」「種類を増やして子どもの反応を見たかった」「実習体験で行った際、子ども達があまり楽しめていなかったため」「クイズ形式で時間がかかったため」「使いやすいように改良した」「首から下げる紐の強化を頑丈な物に変えた」「持ち運びを考え、改良した」「実習体験では梅雨時期の物を作成したが、教育実習では夏の時期に改良した」「おもちゃインストラクターの講習を受講し、教わった教材を参考に改良した」等であった。

改良しなかった理由には、「実習体験の時に反応が良かったので特に直す部分なかった」という理由がもっとも多く、「実習体験で指導者（保育者）に褒めて頂き自信になったため」「十分に練習すれば大丈夫だと思ったから」「平

仮名が読める子ども達だったので改良しなかった」「言葉の掛け方の改良はしたが、製作した物の改良はしなかった」との少数の理由もあった。

(6) 自己評価について

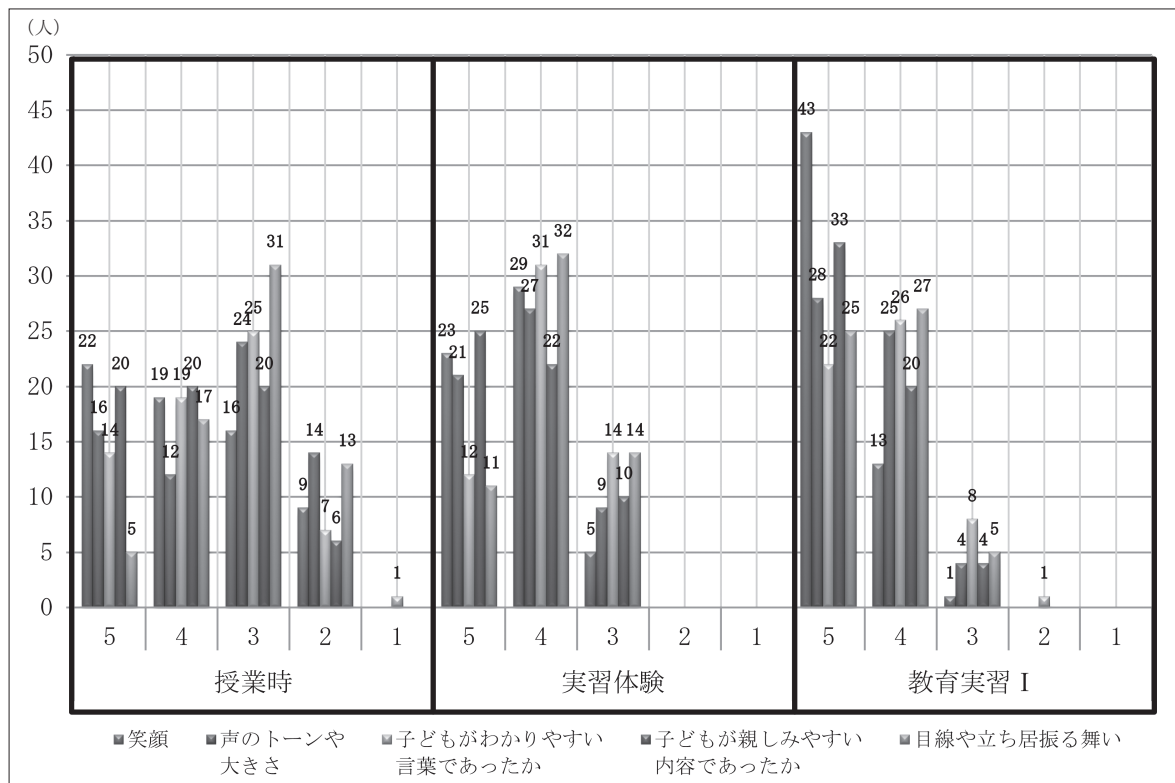
授業時、実習体験、教育実習Ⅰ、それぞれが終わった後に自己評価の学生アンケートを行った。自己評価の項目は、「笑顔」「声のトーンや大きさ」「子どもが分かりやすい言葉であったか」「子どもが親しみやすい内容であったか」「目線や立ち居振る舞い」の 5 つの項目を 5 段階（5＝良くてきた、4＝概ねできた、3＝普通、2＝不十分な部分があった、1＝努力を要する）で自己評価したものである。

図 5-1 より、授業時では、5 段階評価の 3 を中心に 2 の評価を付けた学生もいたが、実習体験では 3 以上、教育実習では、授業時、体験実習に比べ、4 以上の自己評価を付けた学生が多い結果であった。

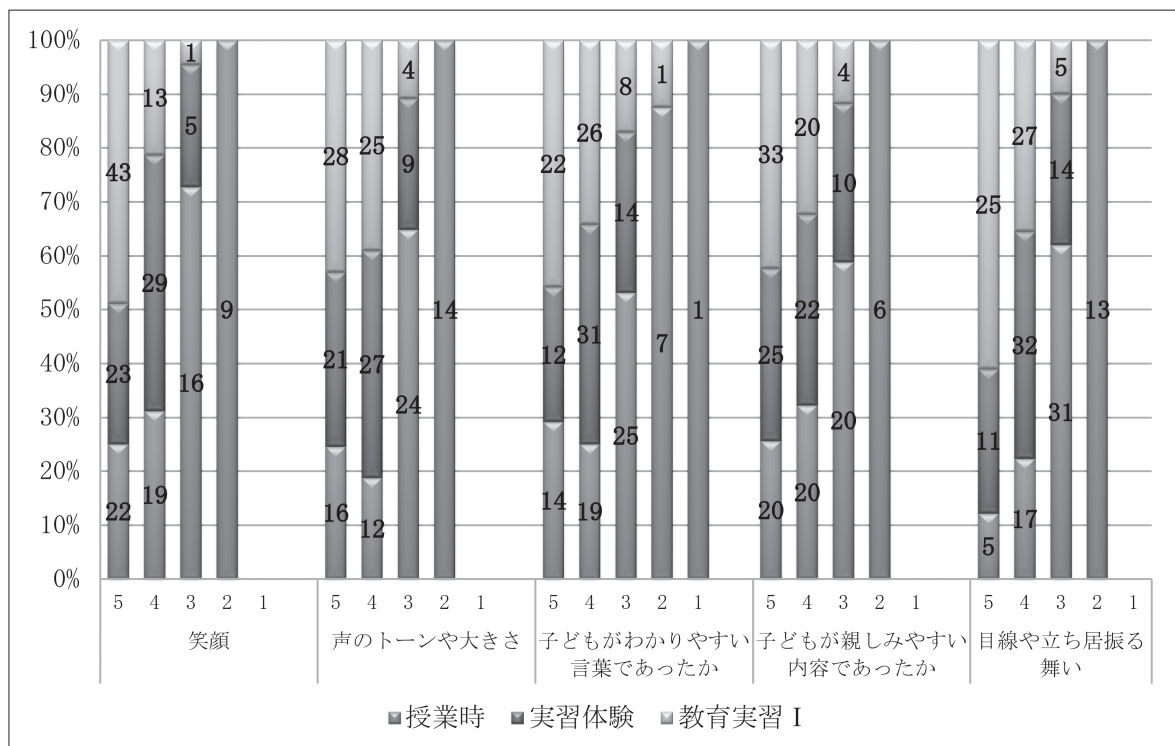
図 5-2 より、自己評価項目別に見てみると、授業時は 4 や 5 の評価を付けた自己評価は少ないが、教育実習では、4 や 5 の自己評価を付けた学生が半数以上の結果であった。

以上のことより、教育実習指導の授業を通して、自己紹介教材の製作、ロールプレイを行うことで、他の学生の製作物、ロールプレイ時の気づきを経て、実習体験に向けての製作物の改良などに活かされたと考えられる。また、実習体験においても子どもの前で行い、子どもの発達や年齢を踏まえ、自分が想像していた子どもの反応と違って点や子どもから直接言われたアドバイスを聞き入れ更に改良への気づきが教育実習に活かされたと考えられる。自己紹介の教材発表を通して学生の気づきや学びは、授業時、実習体験、教育実習と回を重ねるごとにその時の気づきや発見をし、子どもの発達や視点に気づき、教材を使い、どのように紹介をすれば理解を得られるのか、反応が良いのか等考えるようになったと言えよう。同時に入学して半年後には教育実習を経験する本校の学生に

実習体験における教育実習Ⅰの課題と方法



【図 5-1】



【図 5-2】

は、教育実習指導の授業を通して、5 回の実習体験を実施することが、教育実習に行く前に園や子どもの雰囲気を感じ取り、子どもの発達や

年齢に気づき、学びとなった。つまり、授業の学びと交互に繰り返すことでより理解を深め、教育実習に臨めた結果と言えるのではないかな。

4. まとめと今後に向けて

これらのアンケートの結果から、教育実習の前に、体験を段階を経て積み重ねることで、保育者を目指し、これから学ぼうとする意欲にもつながっていた。また、体験が教育実習への課題をより具体化していることも明らかとなった。実体験の中から、学生が手ごたえを感じる意義は大きい。また更に教材づくりから始めたことは、自ら思考し、試し、工夫する力を養うこととなり、学び続ける保育者の基礎となるであろう。つまり、生きる力を育むための幼児期に育てたい資質や能力の3つの柱の基礎といえよう。

今後の課題としては、学生自らが思考し、試し、工夫する、そして振り返る機会を、2年間の養成課程の中で体系的に積み上げていけるような仕組みづくりが必要であると考え。学校での授業の中で、教材研究や指導案、模擬保育を扱う授業がある。それらと、2年間の養成課程の中で実施される実習とが、より効果的に積み重ねて学生が実体験していくことが、今後の養成の鍵となると考える。

謝辞

本稿の執筆にあたり、資料提供およびアンケートにご協力いただいた方々に、ここに記して感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 中央審議会答申 2015「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」
- 2) 片桐恵子・渋谷るり子 2018「学生の教育実習の振り返りからみる実習体験を組み入れた指導計画の意義」『越谷保育専門学校紀要』7. 26-35
- 3) 幼稚園教育要領解説 2018 文部科学省

参考文献

小櫃智子 2018『幼稚園・保育所・認定こども園実習パーフェクトガイド』わかば社
無藤隆 2018『幼稚園教育要領ハンドブック』学研

【研究論文】

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「自立心」についての一考察 — ニューヨーク州日英プリスクールの保育環境より考える — 片桐 恵子[※]

A Study on "the spirit of Independence" which we want infants to acquire by the end of Infancy — Thinking from the Nursery Environment of Japanese-English Preschool in the New York state — KATAGIRI keiko

本稿は、米国ニューヨーク州ブルックリン区にある日本の幼稚園にあたるプリスクールで筆者が保育実践を行った体験から、「自立心」における子どもの姿について、本園がどのように認識・意識しているのかを日常の保育環境から考察することを目的としている。母親もしくは父親が日本人である日本と関連深い子どもが通園している本園では、日本文化や言語の伝承、食育をはじめ多様性を受け入れられる子どもの育成にも力を入れている。その日々の保育の中で、子どもが環境との相互作用を通して成長・発達し、自発性や自主性を養い他者との関係性、創造性や自立を身に付けられる応答性のある環境下において、筆者が実践した保育授業から考察した。

キーワード：自立心、日本の伝統、人的環境、物的環境、壁面装飾

I. はじめに

我が国では、家庭以外での保育として、①「幼児を教育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的」とする幼児のための文部科学省の所管する教育施設である「幼稚園」、②「日々保護者の委託を受けて、保育に欠けるその乳児または幼児を保育することを目的」とする厚生労働省が所管とする児童福祉施設である「保育所」、③「幼稚園及び保育士等における小学校就学前の子どもに対する教育及び保育並びに保護者に対する子育て支援を総合的に提供することを目的」とする子育て支援の総合的な提供を行う施設として、2006年10月に創設された「認定こども園」の三元化で保育を担っている。

アメリカにおける幼児教育、保育施設の名称や目的・保育内容・対象となる子どもの年齢等は、連邦制のため、州によって多種多様であり、学区によっても異なり、把握することは非常に

難しい。義務教育でさえ国で保障する全国制度はなく、我が国のように全国的に画一的な内容にはなっていない¹⁾。

アメリカの就学前教育は、保育園（Nursery School）やプリスクール（Pre-school）と呼ばれる教育機関が担っており、3～5歳から始まり通常1～2年である。我が国の保育園・幼稚園に相当する。我が国で保育園や幼稚園の年中組に当たる学年はキンダーガーデン（Kindergarten）に入る手前の学年ということではプリキンダー（Pre-Kinder）と呼ぶ。

日本の幼稚園にあたるプリスクールはほとんどが私立である。そして、日本の年長にあたるキンダーガーデン（1年間）は、小学校と併設され同じ敷地内で、小学校の一部として存在している。

米国ニューヨーク州での主な区分は、トイレトレーニングが終わる時期、プリスクール（2～3歳）、プリキンダースクール（4歳）、キンダー

※ 越谷保育専門学校専任教員

ガーテン（5歳）となっている。以前は、トレイトレーニングが終わらないとデイケアなどには入れないとも忌まれていたが、最近では、1歳未満でも預かってくれるところも多くある。5歳未満の子どもに関しては、ベビーシッター、プレイグループ、デイケア、ナーサリースクール等時間や曜日が様々に異なる選択肢があり、なかには全日制の保育を行っている施設もある²⁾。

井上等（2008）によれば、日本の幼児教育は、幼稚園教育要領の中にもあるように、生涯にわたる人間形成の基礎を培うためのものである。特に集団生活に必要な能力、知識を身につけることが目標となっている。つまり、集団における人間関係の育ちを大事にしている。それに対しアメリカは、幼児期から個性に応じた教育を行い、自発性や自主性を養うことを中心とした教育を行っている。教師は一緒に遊んではいるが、幼児期から食事、排泄、衣類の着脱など、身の回りのことができるのは当たり前と考え、子どもの行動に対して、直接手助けをすることはほとんどない。唐澤等（2006）によると、日本の幼児教育は、思いやり、共感性、他者への配慮といった他者との協調性を重視する傾向が強い。それに対し、アメリカでは他者との関係性と、創造性や自立を身につけることを重視していると日米の就学前教育の違いについて述べている³⁾。

今回、筆者はニューヨーク州ブルックリン区にある日本の幼稚園にあたるプリスクール（以下、Aプリスクールと称する）で保育者として実践を行ったので、以下に報告する。

II. 方法

i 目的

筆者が、ニューヨーク州ブルックリン区にある日英バイリンガルプリスクールで保育者として実践した内容を基に「自立心」における子どもの姿について、保育者がどのように認識・意識しているのかを日常の保育環境から明らかにすることを目的として実施した。

ii 対象

調査対象は、ニューヨーク州ブルックリン区のAプリスクールに所属する園児、保育者すべてとした。なお、調査は2019年1月に実施した。

iii 倫理的配慮

倫理的配慮としては、Aプリスクールの代表者に、得られたデータを含め個人情報の取り扱いについては目的以外に使用しない旨を伝え、同意を得た。

III. 実践事例

i 2歳児クラス（12名）

- ・ねらい：見る、聞く、触るなどの経験を通して、感覚の働きを豊かにする。
- ・内容：「きらきら星」を2回歌った後に、新聞紙を使い、ちぎる、丸める、投げる。最後にきらきら星のように、ちぎった新聞紙を宙に舞うように投げ、その後、床に落ちた新聞紙をブルドーザーになった子ども達が集めて、用意された籠の中に入れ、お片付けをした。（写真1、2、3参照）

＜写真1 2歳児クラス「きらきら星」＞



<写真2 2歳児クラス「新聞紙①」>



<写真3 2歳児クラス「新聞紙②」>



ii 3歳児クラス（18名）

- ・ねらい：身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫し協力して一緒に活動する楽しさを味わう。
- ・内容：新聞紙1枚を4人で持ち、その上にボールを乗せて運ぶ。ボールが落ちないように4人で協力して新聞紙の持ち方等話し合い、ボールが落ちないようにするにはどうしたら良いか等考えた。

<写真4 3歳児クラス「ボール運び①」>



<写真5 3歳児クラス「ボール運び②」>



iii 4歳児クラス（12名）

- ・ねらい：身近な環境下で国籍や文化の違いを認め、互いに尊重する心を育て、自分で考え行動できることを身に付ける。
- ・内容：構成的グループ・エンカウンター（SGE）の「トラストワーク」^{4）}を実践した。アイマスクをつけて2人1組のペアで保育室内を1分間歩かせて、目が見えない人の気持ちを考える。その後、健常者ではない人達に自分は何ができるのか、子ども一人ひとりから意見を出させた。（写真6、7、8参照）

<写真6 4歳児クラス「トラストウォーク①」>



<写真7 4歳児クラス「トラストウォーク②」>



<写真8 4歳児クラス「トラストウォーク③」>



IV. 結果と考察

i 2歳児クラス

クリスマス会で「きらきら星」のお遊戯を保護者の前で披露しており、その練習を兼ね昨年

より「きらきら星」には馴染みがあったようで、スムーズに実施できた（写真1）。

「きらきら星」のピアノ伴奏が始まると、子ども達は元気に手を上に挙げ、くるくる回る等の動きが上手に出来ていた。筆者は、手作りの手袋シアターを付け、子ども達に接近し、目の前で音楽に合わせ、歌うと同時に子ども達一人ひとりの顔に手袋シアターを近付け、雰囲気が出るように働きかけた。手袋シアターが物珍しかったのか、子ども達は「キャッ、キャッ」言いながらはしゃいで、楽しんでいた。

また、2歳児クラスでは、「きらきら星」を模った壁面制作も行われており、玄関入口に装飾されていた（写真9）。

<写真9 2歳児クラスの壁面制作>



その後、新聞紙を1人1枚手渡し、ちぎる、丸める、宙に投げる等の遊びを行った。まだ、うまく新聞紙をちぎること、丸めることができない子どももあり、筆者や保育者がちぎり方、丸め方を教え、楽しんだ。

最後に保育室内に散らばった新聞紙を「ブルドーザーになって、集めるよ」と筆者が子ども達に声掛けし、両膝、両肘を床に付いた格好で、ブルドーザーになった子ども達が両手で集めた。

基本的な運動機能や指先の機能が発達する時期でもあり個人差はあるが、自分をブルドーザーに見立て、一生懸命にブルドーザーになりきった子ども達は、他の子どもと競争するよう

に散らばった新聞紙集めを楽しみ、積極的に活動していた。

ii 3 歳児クラス

アメリカの新聞紙は、日本の新聞紙ほど大きくはない。今回は、日本の新聞紙で、ビニールボールを運ぶことを実施した。大きい新聞紙に慣れていない子ども達は、四苦八苦していた。

新聞紙の角を持つグループは、新聞紙をピンと広げればボールが落ちる。持ち方によってはボールが新聞紙の中央より下に沈んでしまうが、ボールが落ちないので背が低い子ども達は沈んだまま運んだが、運ぶことが難しそうであった。

4人グループの中に角を持たずに角より少し離れた箇所を持つように、「あなたはここを持って」と3人の子どもに指示している子どももいた。どのような持ち方をすればよいのか、工夫すること、また同じ3歳児クラスの子も同士、担当保育者など身近な人と一緒に親しみをもち、活動する楽しさの中で、関わりを深めることができた。

iii 4 歳児クラス

これから筆者が行う内容、「トラストワーク」⁴⁾のやり方と目的を子ども達に説明を行い、子ども達が納得した上で実践に入った。

アメリカでは、幼児期から個性に応じた教育を行い、自発性や自主性を養うことを中心とした教育を行っている¹⁾。これからキンダーガーデンに入る年齢の子ども達は、他者との関係性と、創造性や自立を身につけることを重視しているため、事前に説明を行うよう、担当保育者より依頼された³⁾。

アイマスクを付けた子ども達は、筆者の指示通りに実践を行った。実践内容は、4歳児クラスとは思えないほど、スムーズに行えた。

その後、「体の不自由な人ってどんな人？」との筆者の問い掛けに「私のおじいちゃん足指がないよ」「腕がない人もいる」「片足のない人もいる」等、身近に関わりのある人との関

係性の中で、子ども達が答えた。

担当保育者は、「この前、行った高齢者施設には、どんな人がいた？」「その人達に自分は何をしてあげられる？」と健常者ではない人達に自分は何ができるのか、子ども一人ひとりに意見を求めた。高齢者施設等を訪問していた子ども達は、その経験から、「手がない人にドアを開けてあげる」「髪の毛がない人に髪の毛をあげる」「指がない人にスプーンで食べさせてあげる」「目が見えない人に『トラック来るよ』と声を掛けてあげる」「口でしゃべれない人と手を繋いであげる」等々と意見が出た。

V. 考察

i Aプリスクールでの日常の保育

2017年に日本の幼児教育・保育の基準となる「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園・保育要領」の3つの法令の改定が行われた。内容の変更に伴い、子どもたちが小学校就学前の姿を想定した「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」が示され、具体的な姿や保育者の指導のポイントがまとめられた。

Aプリスクールでは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」で、①健康な心と体、②自立心、③協同性、④道徳性・規範意識の芽生え、⑤社会生活との関わり、⑥思考力の芽生え、⑦言葉による伝え合い、⑧豊かな感性と表現の順位で、力を入れ日々保育しているそうである。

「自然との関わり・生命尊重」では、近くのコミュニティガーデンを訪問する等、自然との関わりもできるだけ機会を設けてはいるが、ニューヨークという大都会の土地柄なかなか実現させるのが難しい項目の一つであると教務主任は、話された。

「数量・図形、文字などへの関心・感覚」は、日々の保育の中で取り入れてはいるが、基本子どもの興味を尊重した保育に力を入れており、「子どもが興味を示した時が学ぶ時」とし、文字に興味がない段階の子どもに習わせるという

ことはないが、4歳クラスは次にキンダーガーデンに入るので、平仮名やアルファベットの書きを中心に取り入れているそうである。3歳児クラスより平仮名の歌と50音字の認識を保育の中で行う。

2歳児クラスでは、普段の生活（保育）の中で天気、水の実験（浮かぶ、沈む）、数、長さ、色など身近に感じられるトピックを中心に理科・社会・算数の教科を全ての要素を取り入れ、教授しているそうである。

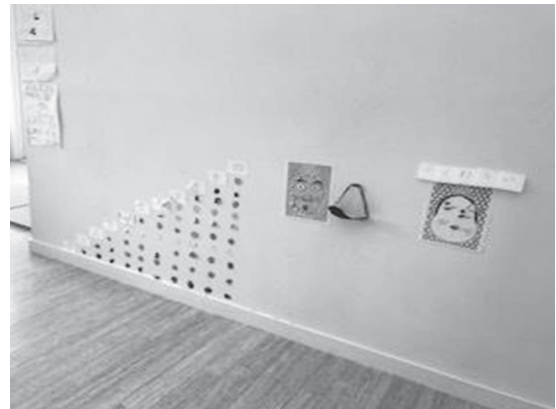
4歳児クラスの壁面に掲載し、1から10までの数を装飾している。子ども達が遊びの中で興味が持てるように担当保育者が工夫していた（写真11）。

＜写真10 2歳児クラスの保育＞



子どもが順次登園してくる時間帯、早く登園した子ども達は、2歳児の保育室内で「かごめかごめ」の伝承遊びを保育者2名と一緒にしていた。2歳児になると友達の名前も覚え、手を繋いで回することもできる。運動会や発表会等で友達と手を繋ぐことが求められ、進級するとその機会は増える。2歳児になると歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動機能や、指先の機能が発達する。Aプリスクールでは、手を繋ぐ練習を踏まえ、手を繋いで回ることができる伝承遊び「かごめかごめ」を保育内容に取り入っていた。子ども達は、保育者と一緒に日本語で歌を歌いながら、子ども一人ひとりの小幅度に合わせてゆっくりと回っていた（写真10）。

＜写真11 4歳児クラスの壁面＞



＜写真12 玄関入口＞



4歳児クラスの壁面には、「おかめ」と「ひょっとこ」を描いた福笑いを目隠しが壁面装飾され子どもの身長に合わせ、福笑い遊びができるようになっていた。

福笑いは、日本の伝統的な正月遊びである。平成以降は、日本では一般家庭での正月の遊びとしては廃れ気味であり、自治体などが執り行う新春行事として恒例とされている（写真11）。

Aプリスクールでは、お正月、節分、ひなまつり、こどもの日、七夕、夏祭り等日本の行事を必ず保育内容に取り入れている。玄関入口には（写真12）、正月飾りを施し、朝の会では、お節料理やお餅などの食について、その意味や作り方などを保育者が子どもに伝えていた。

サマーキャンプなどの短期プログラムでは、着付けの先生や和太鼓奏者を招聘し、十二単を

着る、和太鼓体験、近くの禅寺に行き瞑想、座禅をするなど、子どもが日本文化を経験できる保育内容を取り入れたカリキュラムになっている。和太鼓奏体験では、どうやって太鼓をたたくのか、自ら子ども達が考えるワークショップとしてセッションを実施した。

また、月1回クッキングクラスの食育も実践している。食育では日本の献立を意識し、3月のひな祭り行事には、子ども達と一緒にちらしずし作りを行い、食育の月のねらい「生き物への感謝の気持ち」を考える等、日本独自の保育内容でのカリキュラムを実践していた。

日本でも食育という観点から様々な取り組みが行われている。日本とは食文化の違うニューヨークではあるが、Aプリスクールでは、バランスの良い食事、また、日本の行事食をクッキングクラスという授業内容で取り入れ実践していた。食育は、「食べるものは自分の体を作る」という信念のもとに、正しい食に対する意識と、食への感謝の気持ちを培う目的で子ども達に伝えている。

ii Aプリスクールで筆者が実施した保育

Aプリスクールの教務主任に伺ったのは以下のとおりである。Aプリスクールの子ども達は、日本に関連している（日本人の両親を持つ子どもや父親もしくは母親のどちらかが日本人である）子どもがほとんどである。Aプリスクールは日本の文化や言語の継承、また、多様性を受け入れられる子どもの育成を目指した日英バイリンガルプリスクールである。

Aプリスクールに通園しているほとんどの子どもが、ニューヨーク州の小学校へ入学をする。アメリカの子ども達は、何か問題にぶつかった際、自分で考え、解決していく。そのため、Aプリスクールでは保育内容にも日本の伝統文化を取り入れつつ、自分で考え、問題解決できる能力を養う教育に力を入れている。

日々の保育では、クラス担当保育者が保育を通して、子ども達に学んで欲しい保育内容を検討し、子ども達に何故このような保育を行うの

か、理解させることに重きをおき、子ども達への理由付け、理解、思考力、自立へとつなげる方針で行っている。

Aプリスクールの新学期は、9月である。12月下旬のクリスマス休暇を終え、年明け2日より保育が始まる。日本でいう二学期に筆者は、Aプリスクールで保育を行った。

Aプリスクールの子ども達は各年齢のクラスにおいての保育内容を理解した上で、筆者が提供する保育内容を実践した。特にキンダーガーデンへの入園を8ヶ月後に控えた4歳児クラスで行った保育内容のように子ども一人ひとりに質問を行い、子ども達が答えることは、本日の授業のねらいの理解ができたということにつながり、子どもの理解度を図る結びの質問となる。

日本の幼児教育は、思いやり、共感性、他者への配慮、他者との協調性を重視する傾向が強く、集団における人間関係の育ちを大事にしている^{1) 3)}。

アメリカでは他者との関係性と、創造性や自立を身につけることを重視し、幼児期から個性に応じた教育、自発性や自主性を養うことを中心とした教育³⁾を行ったAプリスクールの保育教育の結果といえる。

VI. おわりに

本稿では、筆者がAプリスクールで保育者として実践した内容を基に「自立心」における子どもの姿について、保育者がどのように認識・意識しているのかを日常の保育環境から明らかにすることを目的とし実施した。その結果、以下のことが明らかになった。

第一に、子ども達に日本の行事、文化、伝統、食育などを取り入れた保育内容を実践し、経験させることで、日本という国への興味、関心を持たせること。同時にニューヨークでの生活環境の中で生きていくため、難しい問題に直面した時、まずは自分で考える粘り強さ、やり抜く力（レジリエンス）、そしてやり尽くせるだけの知識を身に付け、キンダーガーデン（5歳）、

小学校を見据えた保育がなされていた。

第二に、何を実践するにも子ども達にその目的を説明し、最後にその目的を達成することができたのか否かの確認を一人ひとりの子どもに行うことで、子ども達は自分で考え、問題解決できる能力、「自立心」が養われ、身に付けていくと考えられる。

第三に、保育者や子ども、近隣のコミュニティガーデンや高齢者施設の訪問先での人的環境、コミュニティガーデンや施設や禅寺、和太鼓等の物的環境、更には自然や社会の事象など、Aプリスクールではこうした人、物、場などの環境が相互に関連しあえる柔軟な保育内容になっていると言える。

保育者は、子どもが環境との相互作用を通して成長・発達していくことを理解し、豊かで応答性のある環境にしていくことを重んじている。Aプリスクールではこれから、ニューヨーク州のキンダーガーデン、小学校で学んでいく子ども達が様々な経験を積み、人との関わりを深め、子ども自らが積極的に他者と関わっていくことができる環境を日々の保育で子どもに提供している⁵⁾。結果、子ども達は、自発的にいきいきと活動していると言える。

謝辞

本稿の執筆にあたり、ご協力下さいましたニューヨーク州ブルックリン区Aプリスクールの子ども達、保育者の皆様に感謝申し上げますと同時に、お子様方の健やかな成長を心よりお祈り申し上げます。

引用文献・参考文献

- 1) 井上聖子 2008『日本とアメリカにおける就学前教育・保育について』帝京学園短期大学研究紀要 15. 59-64
- 2) 文部科学省国立教育政策研究所・JICA 地球ひろば共同プロジェクト『グローバル化時代の国際教育のあり方国際比較調査』
- 3) 唐澤真弓 林安希子 松本明子 向田久美子 トビン・ジョゼフ 朱瑛 2006『幼児教育の

文化的意味－日本、アメリカ、中国における文化間および文化内比較』発達学研究第20巻. 33-41

- 4) 国分康孝 2004『構成的グループエンカウンター事典』図書文化
- 5) 厚生労働省 2018『保育所保育指針解説』フレーベル館

【研究論文】

保育者養成校におけるピアノ弾き歌い学習のあり方を考える ——新しい教本作成への模索——

川上由美[※]

Thinking of the Way about Classes of Piano in the School of Childcare —Try to Find a Way to Make a New Textbook— KAWAKAMI Yumi

幼稚園教諭・保育士養成校においては長年、ピアノ演奏技術の習得は必須であり、越谷保育専門学校においてもマンツーマン指導を中心とした授業が続けられてきた。授業のカリキュラムや指導法は何度も見直され改正・改善され続けているのだが、それが目に見える形で現れているのが教本の改訂と言えよう。

本論文では、越谷保育専門学校の2014～2019年度のピアノ弾き歌いの授業の実践を振り返り、その教材『Colla Parte』の改訂・改善の経過をたどりながら、そこに積極的な提言をしてきた一人の教員としての考察を加える。

さらに新しい「ピアノと子どもの歌」の教本を作成する必要性や意義を示し、試案を模索する。

キーワード：養成校でのピアノ授業、弾き歌い、子どもの歌、教本、編曲

1. はじめに

筆者が越谷保育専門学校（以下、「本校」とする）においてピアノ実技の授業を担当するようになって6年が経過しようとしている。

開講されているピアノ関係の科目は4つあり、これらはいずれも単独の教員が担当する授業ではない。1コマに対し3～4名の教員が共同で担当をし、90分の中で教員1名あたり5～7人の学生を分担して個別指導する形態をとっている。

よって非常勤講師の主たる任務は、音楽専任教員が定めたシラバスに従い日々の授業を進めることにあるが、筆者は6年前の着任時より授業で取り扱う内容や指導方法・カリキュラムなどについて率直な意見を多く申し述べ、様々な提案をしてきた。これに対し真摯に耳を傾き続け、ピアノの授業の質の向上のため共に情熱を注いでいくことを確かめ合ってきた専任教員の皆様に謝意を表すところから本稿をスタートしたい。

またこれは、開学から半世紀にわたり諸先輩方が試行錯誤しながら築き上げてきた音楽教育の姿に批判を加えるものでは決してないこともここに記しておく。先達の苦勞を敬い、その志を継いでいく一人として、この6年間の授業実践に反省と考察を試みたものである。

2. 本校におけるピアノ授業の概観

2014～2019年度において、ピアノの演奏技術を教授する科目名に変更はなかった。ただし、養成校の教育課程が2019年4月（平成31年度）から一新されるのに先駆ける形で、選択科目については2018年度より授業内容の一部を実践力を高めるものにシフトしている。

各科目の概要についてはシラバスを参照されたい。この節ではシラバスに掲載されない内容を中心に挙げていき、次節3で各々の抱える課題を浮き彫りにしたい。

(1)科目名

音楽ⅠAピアノ基礎

※ 越谷保育専門学校非常勤講師

音楽ⅠBピアノ基礎

音楽ⅠC弾き語り演習

音楽ⅠD弾き語り演習

以上の計4科目全てが演習であり、ⅠAとⅠBは一年次（前期と後期）必修、ⅠCとⅠDは二年次（前期と後期）の選択科目である。

(2)授業形態の実際

1コマ90分で約20名の学生を教員4人程度で分担し、実技のマンツーマン指導を行う。初回の授業時に教員一人当たり学生5～6名程が割り振られ、半期15回の最後まで通して担当する。

ピアノの代用楽器としての電子ピアノが並んだ大教室にて、各教員のレッスンは一斉に行われる。学生は各自ヘッドホンを使用して自主練習しながら指導の順番を待ち、自分のレッスン時のみヘッドホンを外して教員と「音」を共有する。筆者の場合、授業時間の三分の二（60分）でまず各学生を一巡し、残り三分の一（30分）でもう一周することを目標にしている。

(3)教材・教科書

本校が独自に編纂し『Colla Parte』と名付けた子どもの歌のピアノ伴奏譜集を教科書に指定し、他に『心を育む子どもの歌』（教育芸術社）を副教材として使用している。学生はこれらの曲集から必修曲に指定されている約30曲の歌をピアノ伴奏しながら歌うという形に仕上げていく。

なお、楽譜の読み方や手指の構え方から指導する必要がある初心者の学生に対しては、歌の付かないピアノのみの練習曲が初めに課される。日本の初級ピアノ教育の代名詞ともいわれるバイエルから何曲かを学習の後、子どもの歌の弾き歌いに挑戦していく。

(4)演奏発表

単位習得にあたり、半期15回の授業の中で2回の演奏発表が求められる。中間試験・期末試験に相当するもので、普段は「教員」対「学生」の個別指導に限られているものを、この2回の発表時にはクラス全員の前で一人ずつ弾き歌いを披露する。又、発表を聞いているその他

の学生は「子ども役」となって歌って参加する。知らなかった歌をこの場で覚える学生も多い。

発表には課題曲の他、自由曲も認められる場合が多い。

(5)サポートレッスン

本校が謳っている「ピアノ教育の充実」を支えるものの一つとして、授業外に行われているサポートレッスンがある。週に2回、放課後の80分程度を充てて指導を希望する学生に補習のレッスンを行っており、高い効果を上げている。

(6)音楽科教員による会議

従来は設けられていなかった、専任教員と非常勤講師の相互の問題共有や連携を深めるための合同会議が2014年度前期より自発的かつ定期的（半期毎）に持たれることとなった。

各教員が課題や指導の悩み、新しいアイデア等を持ち寄って意見交換をし、授業内容の改善に大きな成果をもたらしている。

3. ピアノ授業の課題提示

ここで、前節で挙げた各項目に対し、それぞれの課題を挙げてみたい。

(1)科目名

『音楽ⅠAピアノ基礎』、『音楽ⅠBピアノ基礎』という名称から推測するとピアノの実技のみ、もしくはピアノ実技を中心にした授業のように思えるかもしれないが、その目指すところは主に「子どもの歌のピアノ伴奏をすること」である。子ども達と一緒に楽しく歌う他、子どもに新しい歌を紹介するにあたり保育者自身がピアノで演奏しながら歌って聴かせること等を目標にしている。

ここで本校の音楽科目名を見渡してみると、「歌」（＝楽曲）や「声楽」（＝歌唱法）そのものに特化した科目がないことに気付く。例えば『弾き語り演習』としてピアノに付随して学んだり、『器楽とオペレッタ』や『幼児の音楽』の中の一部で扱われている程度である。ここから何が読み取れるか考えてみるに、「歌」というのは自然に歌えるもので（ピアノに比べて）

殊更に改めて教授するようなものではない、ということなのかもしれない。確かに少し前の時代までは、歌謡曲などでも老若男女問わず共有できる歌というのが多く存在したし、とりわけ童謡や唱歌やその他子どもの歌の類は誰でもが沢山の曲を知っていて歌った経験もあり覚えていたものだと思う。特殊な歌唱法や外国語を要求されないジャンルの歌ならば皆が気軽に口ずさむことができ、メロディーに聞き覚えがあるはずなのだが、最近は学生がいわゆる「子どもの歌」をあまり知らないことに度々驚かされる状況が存在するのである。我々教員がこの子どもの歌の「文化継承」に危機感を覚えるならば、ピアノと共にもっと「歌」を教授することに比重が置かれても良いのではなかろうか。

科目の名称の中に「歌」という言葉を入れたほうが良い、というのが筆者の考えである。2年次の『音楽ⅠC弾き語り演習』『音楽ⅠD弾き語り演習』が歌の弾き歌い（ピアノ伴奏での歌唱）であることを示しているのだが、この「弾き語り」という言葉がここで適切であるかはやや疑問である。「ピアノ」という単語も「歌」という言葉もなく、ともすれば「歌」と対立する概念を表しかねない「語り」という言葉が使われ続けたのは何故なのか。恐らく少ない字数で「ピアノ演奏」と「子どもの歌」を合わせて教科名にしようと考えたときに、「弾き語り」が適当と考えたのであろう。もっとも、「弾き語り」は日本の音楽芸能の歴史をたどれば「平家物語」を語って琵琶を演奏する中世の盲僧までも遡ることができる伝統的な演奏のスタイルである。ただ現代においてはどうかであろうか。昭和世代であれば「弾き語り」と聞いてまず連想するのは、演歌やムード歌謡などのギター伴奏による歌唱の類ではなかろうか。平成生まれの学生達にはそれすら頭に浮かばないかもしれない。

例えばシンプルに「弾き語り」を「弾き歌い」と言い換えたとしても特に問題はなく、むしろ「ピアノ演奏」以外に「歌」にも重点が置かれた科目であることを的確に表した科目名になる

のではないかと考える。

同様に必修の『音楽ⅠAピアノ基礎』、『音楽ⅠBピアノ基礎』という科目名にも何らかの「歌」の要素が入れば、何を学ぶ科目なのか、何を教授する科目なのかが明解になるのではなかろうか。

(2)授業形態の実際

一回の授業の中で学生一人当たりにつけられる時間が少ないことは否めない。しかしながら、養成校によっては初心者に対してもグループでの指導をしており、本校のようにマンツーマンで演奏の指導が受けられることは贅沢とも言える。

限られた時間を有効に使って指導をすることは各教員が心を砕いており、とりわけ新年度の始まりには一人一人にかなりの時間を要するので、同じような解説を必要とする学生を集めて一緒に説明するなど苦心して時間を作り出している。

電子ピアノを使用しての自主練習や指導に異論はないが、問題点のひとつに「ペダル奏法」の学習に限界があるということが言える。二つ目に広い教室とはいえ複数の教員が同時にレッスンを行う都合上、それぞれのピアノ音や歌声が干渉して集中力を削がれたり、それを避けるために個々が小さめの音量設定で多少遠慮がちに演奏せざるを得ないのは残念なことである。昨年、新しく整備された個室のピアノ練習室を、毎回でなくとも授業に活用することはできないものかとも考える。

(3)教材・教科書

授業内容に直結するのが教材である。学生の音楽的な経験や素質にも年々変化が見られ、自宅での楽器の所有率も下がる中で改正が重ねられているが、具体的に何が問題であるかを挙げていく。

まず主たる教科書である『Colla Parte』がいわばシンプルな楽譜集にとどまっているため、読譜が苦手な学生が自習や予習をできる形にほとんどなっていないことである。これを改善できれば学習意欲を高めて効果を上げること

ができるのではない。2016年度からは巻頭に楽譜の読み方のページが加えられたが、この内容にも更なる検証が必要と思われる。

次に掲載曲の選別である。保育・教育現場で歌われる歌は多岐に渡り、それ故、それらをあまねく掲載することは不可能であり、教材としても実用的でない。曲の選別は必要不可欠であり、新しい曲の掲載など時代の流れを読む必要もある。

さらに重要なのは伴奏の編曲である。初級者のために音楽の豊かさを削ることなく平易な楽譜にすることが必要なのだが、これには相当なセンスが必要とされる。一般に流通している楽譜集の編曲では、簡易版の伴奏にアレンジする過程で必要以上に音が省かれていたり、原曲とだいぶ違った和声が付けられていたり、残念な印象のものが数多くみられというのが筆者のピアノ教師・編曲家としての長年の実感である。

なお、教科書のタイトル名になっている colla parte (コッラパルテ) という音楽用語は、「他のパートに従って」という意味のイタリア語であり、クラシック音楽の合奏や合唱の伴奏譜の中で特に注意を払うべき箇所に使われるものである。2014年度版の教科書には表紙の裏に〈コッラパルテの意味 歌に合わせて〉と説明を記載しているのだが、そもそもこの年度は残念ながらスペルに誤植 (parute) も見られ、このイタリア語の使用に形骸化の感は拭えない。声楽の伴奏には colla voce (= 声に従って) の方が一般的であるし、何より西洋のクラシック音楽を学ぶ楽譜集ではないのであるから、イタリア語の、しかもあまり馴染みのない音楽用語のタイトルに違和感を覚えたとしても不思議ではない。欧化主義の名残りのような曲集名を冠する必要は特になく思える。教科書を授業の「顔」と考えるならば、そろそろ違った観点からのタイトル付けが考えられて良いのではない。

(4)演奏発表

中間・期末発表を行うそれぞれ前の週にリ

ハーサルを行うのだが、一年生の前期は特に人前で弾き歌いを披露する経験など皆無の学生がほとんどであり、大変な緊張感に包まれる。この経験から得るものは実に大きく、そこまでの準備練習やリハーサルの緊張や失敗、成功体験から学生は多くを学んでいく。

ところがこれも回を重ねていくと、緊張感が失われていくことがある。発表を聞いている側のその他の学生達がざわついてしまうのである。これは席の配置を変えることにより改善されることとなった。

教員が最も頭を悩ませるのは、演奏評価の基準である。点数ではなく ABC 評価で、到達目標に沿って判断をおこなう絶対評価だが、筆記試験などと違って音楽の演奏評価という性格上、後から検証することも不可能であるし、審査する教官の主観的な音楽観が入り込む余地がある。公平さを保つために複数の教官のつけた評価を点数化して平均するという方法がとられている。同じ曲を何人もが演奏するためにどうしても相対的な評価に傾きかけてしまうのも悩みである。

また評価段階は現在 A・B・C・D・E の5段階であるが、評価をされた学生が自分の現在の到達度や習熟度をそこから読み取れているかという、この評価方法では単純化され過ぎていて難しいと筆者は考える。学生は、各教員が演奏を聴きながら書いた講評を後に読んで理解を深めているが、何を注意されているのか、あるいはそこに書かれた馴染みのない音楽用語などを改めて細かく説明しないと理解に至らない場合も多い。

(5)サポートレッスン

この放課後の補習レッスンは専任教員によって行われているので、非常勤講師には実態が見えにくかったのであるが、筆者の提案により受講日や受講曲目の記録を残すようになった。これにより受講の有無など学生の学習意欲の状態や学習の進捗状況が共有できるようになり、指導計画が立てやすくなった。

サポートレッスンでは普段の担当教員ではな

い教員の指導を受けることが多く、学生には刺激となるであろう。教員として同様であり、貴重な機会である。

欲を言えば、グランドピアノを使ったレッスンも可能ではなかろうか。普段の授業にはない魅力があれば、学生のモチベーションも音楽に対する興味も上がるのではないかと考えるのである。

(6)音楽科教員による会議

2014年度より始まったこの会議が果たしている役割は非常に大きい。半期毎の継続的な開催により、非常勤講師の立場からでも積極的に意見を述べることができ、学校側の考え方や事情を深く知ることができる。

議題は幅広く、授業時のマナー（スマホや飲料を楽器の上に置かない）や、発表時の服装のルールを定めるようなところから、課題曲の見直し、教科書の改善した方が良いところなどが話し合われている。ただし、その場で問題の解決に直ぐに繋がるとは限らず、提起された事案は後に専任教員の中で再度検討されたり、継続審議とされたりすることも多い。

またこの会議から端を発し、教員全員で分担して教材の全ての曲のピアノ運指（ピアノを弾く際の各指の順番を定めたもの）を改めて時間をかけて見直したこともあった。これは当初の予想を超えて興味深い結果になったので、ここで触れておく。楽譜の実用性を高めるために標準的な指使いを定めようとしたのだが、複数の教員で重ねて検証した結果、多くの曲で想像より実に多様な運指の可能性が判明したのだ。ピアノ演奏技術の奥深さを再認識するとともに、学習者の身体性や運動能力を個々に鑑みた上で指導者自身も多様な案を提示できることが明らかになり、協議の結果、最低限の基本的な運指のみ掲載することになった。このような研究が生まれたのもこの会議あってこそであり、さらなる問題提起が話し合われることを期待したい。

4 『Colla Parte』 2014～2019年度の変遷

以下、実際に教科書が改正されていった具体例を挙げながら変遷を辿っていく。

(1) 2014 → 2015 年度

- ・2014年度版は125頁、全84曲。
- ・「おじぎの和音」が初めて掲載された。これは教育現場の式典やお遊戯会などの行事で頻繁に演奏されるにもかかわらず、きちんと楽譜にして明示されているものを筆者は見たことがなかったので、掲載を提言したものである。就職先の園で何かの行事の折に急に先輩から教えられ、口伝のような形で何となく覚えて自信なく弾いていることがほとんどであろう。これを楽譜にして課題に盛り込んだのは良いアイデアだったと考える。
- ・別刷りのプリントで配っていた「音階」の課題を載せ、「半音階」も課題に加えた。続けて「左手の基本和音（コード進行）」も掲載し、伴奏の基本練習や確認を行えるようにした。
- ・あいうえお順の目次を採用し、曲目の検索が容易になった。

(2) 2015 → 2016 年度

- ・巻頭に「楽譜のやくそく」のページが設けられ、ごく簡単な楽典（楽譜の規則）が確認できるようになった。
- ・収容曲が精査され、一割ほど減少した。代わりに、歌われる頻度の高い歌には原曲の他に簡易伴奏版を載せるようにした。
- ・歌を伴わないピアノ独奏曲の課題として「シューベルトの子守歌」を編曲し掲載。今までの課題曲にはあまりないタイプの、静かで美しい音楽にも触れることとした。

(3) 2016 → 2017 年度

- ・クリスマスの季節の歌など冬の曲を増やした。
- ・ピアノ独奏曲に「みつばちのマーチ」を追加した。

(4) 2017 → 2018 年度

- ・春の曲が少なかったため、4月の年度初めに歌うことの多い曲を追加した。
- ・頁数の増加（2017年度は全180ページ）に伴い、「左手の基本和音（コード進行）」の2ペー

ジが消えることとなった。実際の授業の中で改めて触れる機会が少なかったとはいえ重要事項であるので、形を変えての復活を模索する価値があると考ええる。

(5) 2018 → 2019 年度

- ・改正はほぼ落ち着き、大きな変化は見られなかった。ただし、編曲に難がある曲が依然として残っている印象を持つ。
- ・この時点で 170 頁・全 96 曲。簡易伴奏の併記を含めると延べ 100 曲を超える。

主にこのような変遷をたどり、6 年間で一定の成果をあげられたと考えるが、一方で現在のカリキュラムや教本に限界が感じられ、学生の資質や音楽環境（ピアノ経験や楽器の所有率など）、実際の保育現場などの社会情勢の変化を鑑みると、養成校でのピアノ教育の在り方も変えていく必要を痛感するのである。そこで、次節にて教科書の抜本的な改革を模索し、提案していきたい。

5. 新しい教本作成に向けての試案

理想を述べるならば、この「ピアノ弾き歌い」の教本は「基本的な事柄を網羅し、学習しやすい教材であること」に加えて、「学生時代のみならず、保育現場に出た際にも有用であること」を目標にしたい。中級以上の演奏者だけではなく、初級者にとっても「音楽的に豊か」であることを感じさせるものでありたいと思う。以下、具体的に検討されるべきと思われる項目と内容を挙げていく。

(1) 初心者に対する導入

これは 2016 年度に続き 2020 年度版においても少し改善がみられる予定だが、「楽譜が読めない」学生に対して用意する「読譜のルール」のページがある。西洋のクラシック音楽の延長にある音楽を我々は扱っており、記譜法ひとつとってもそこには長い歴史がある。短期間、短時間で学生に教えるためには省略することが多々出てきてしまうが、説明する言葉の曖昧さをより一層排除し、的確性を高めていく必要が

あると考える。

(2) 副教材の再検討

現在、本校で採用されている副教材『心を育む子どもの歌』は、主たる教材の『Colla Parte』を補完している。この副教材の優れているところは、①巻末の「楽典」の記載、曲がカテゴリー別に分けられていること、②主要な曲に解説があること、③コラムの形で子どもの歌や文化に関する様々なエピソードを紹介していて読み物としても学習できる点などである。この教本を採用し続けるのであれば、もっと有効な活用方法が考えられてよいのではないかと感じる。一方、掲載曲の編曲レベルにばらつきが感じられる点において、学生が使いこなしにくいことも否めない。

(3) 譜面以外の解説やコラム

前項(2)で挙げた副教材の秀でている点の一つ「解説やコラム」②は、主教材にも取り入れたらよいのではと考える。さらに実践的に、楽譜の中に分かりやすい形で演奏のワンポイントアドバイスを書き添えることも初心者向けの教本によく見かけられるスタイルであり、検討されても良いだろう。自習しやすい形に整えることは大切である。

後述するが、歌の歌詞に出てくる言葉についても学生の理解が低い場合があり、文化的な背景を含めた説明の必要性を痛感する。

(4) 掲載する曲の数と内容

曲数は、即ち、どの程度の規模の教本にするかということであるから、慎重に考えなくてはならないだろう。沢山の曲を網羅して曲事典のように整えるのも理想ではあるが、今のところ現実的ではない。だが、あまり絞り込み過ぎても学生が様々な曲に触れる機会を減らしてしまうと考える。

例えば分冊化して、第 1 巻に必修曲やその周辺のなるべく習得しておきたい曲、第 2 巻にその他の曲（自由曲・参考曲）を掲載することも一案であろう。

(5) 編曲

教本の編纂にあたって最も重要な事項はこの

「編曲」であると考え。「子どもの歌のピアノ伴奏譜集」がどのような価値を持つかは、この「編曲」次第で大きく変わってしまう。音楽的な豊かさを保ちながら教育的配慮を施すことが大切で、技術習得の実践に傾き過ぎて「音楽」が忘れ去られてしまうことのないように切に願うものである。平易な伴奏でも音楽的な豊かさを持たせることは可能なはずである。

(6)簡易伴奏

これも前述の「編曲」の問題や「掲載曲数」と密接に絡む問題である。「子どもの歌」の中には、作曲家の原曲伴奏に高度な演奏技術が求められるものが存在する。何故なら、必ずしも保育現場で演奏されることを目的に作曲されていないからである。プロの歌手が歌い、プロのピアニストが弾くことを前提としているような曲もある。それ以外の一般的な歌でもピアノ初心者にとっては難しいと感じる楽譜が多いのが現実である。また「簡易伴奏」にも色々なアレンジやレベルが考えられ、一概に「オリジナル」対「簡易」とは片付けられない。市販されている教材を見てみると、一つの楽曲に必ず二つか三つの伴奏パターンを載せているものもあり、本校でも色々な曲で試してみたいと考える。

(7)声域を考慮した調性

これも又「編曲」に付随する問題だが、「歌」の場合は子どもや保育者の声域によって歌唱が難しくなってしまう場合がある。特に戦前の唱歌や童謡は現代の幼児にとって音域が高い印象は否めない。「子どもの歌」と分類はできても、実際に保育現場で幼児が歌うために作曲された曲ばかりが存在する訳でもなく、プロの歌手が歌うのを聴くといった「鑑賞」に向く歌や、「子どもの世界」を表現する芸術的な楽曲も生まれているのである。つまり、原曲そのままでは保育現場で弾き歌いし難いものがあることを忘れないようにしたい。

なお、時々見かけるのは、ピアノ伴奏の簡易さを優先するなどの主客転倒が起こって、歌のパートが高すぎたり低すぎたりしている楽譜である。複数の調性による楽譜を提示する等、声

域に配慮することを早くから学生に習慣づけた方が良いと思われる。グレードの進んだ学生には、自分で移調したり楽譜を書き直すことを学ばせるのも良いだろう。

(8)歌詞の記載とその方法

現在の「Colla Parte」では、歌詞の記載場所は楽譜内のメロディーのすぐ下で、音符一つに対しひらがな又はカタカナ一音を表記する形をとっている。これは多くの楽譜集にみられる一般的な形式なのだが、それに加えて歌詞を別記するのが理想である。漢字を交えて表記することで、言葉の意味の把握がスムーズに素早く可能になるであろう。全ての曲で必要とはいえないが、学生から歌詞について思いもよらぬ質問を受けたり誤った解釈を聞くにつけ、歌詞の適切な表記や解説が必要なのではないかと思う。

またこの方法は、「詩」全体の姿の把握を促し、その世界を楽しみながらの豊かな歌唱やピアノ表現を目指す一助となると考える。叙情的な詩の他、子どもの歌ならではの「空想的な世界」や「擬人化された歌詞」をうまく想像できていない学生が散見されることを憂慮している状況があり、また最近の新しい子どもの歌は一人称で「感謝」や「元気」等を歌うものに偏る傾向が感じられ、歌詞に捻りが少ないものが多いのも気がかりである。「詩的な世界を持つ音楽」に触れる経験が減少しているとしたら、あまりに寂しくはないか。養成校の授業でも、歌詞から導入しての豊かな音楽表現や、高い芸術性を目指す方法がとられても良いのではないだろうか。

(9)実用性

最後に調整されるべき点は、教本の実用性であろう。分冊化する等して学生が手に取りやすく所有・携帯しやすいこと、教員にとっては指導の質を著しく向上させることのできるものであること、そして著作権の許諾が整ったものであることが条件であることは言うまでもない。

基礎的な事柄を網羅し、実用性がありながらも汎用性の高い良質な楽譜集を教本にすること

ができれば、学生は卒業後も楽譜を活用し続けることができ、理想的であろう。

6. 新しい教本作成の意義

これまで見てきたように、新しい教本が作られようとするならば、「楽譜集」としての価値が高いものを切望したい。「楽譜」は「音」が鳴る以前の状態である訳だが、これを演劇に例えるなら「台本」なのであり、芝居（音楽）の質を大きく左右してしまうのである。初心者の学生が苦勞に苦勞を重ねて練習した結果、弾けるようになったレパートリーが良質のものであって欲しいと思うとともに、学習の過程においても音楽的な豊かさを味わって欲しいと思うのである。

ピアノは万能の楽器と言われ、教育現場での有用性が高いが、習得にはかなりの鍛錬が必要であり、全くの初心者が短期間の練習だけで出来るようになるのは難しく、技術の保持にも努力を要する。だからこそ、感動や憧れを胸に持ちながら音楽を学んでいくことができたなら、練習の苦勞も乗り越えられるであろうし、将来に渡って子どもたちと音楽の喜びを分かちあえる存在になれるはずである。

演奏をする人にとって、楽譜は「財産」である。シンプルでありながらなるべく無味乾燥を排したピアノ教本であること、そして様々な音楽的要素が集約されている「歌」が尊重されてこそ、保育者養成校のピアノ弾き歌い教本としてふさわしいのではないかと考えるのである。

この論文を叩き台の一つとして、新しい「ピアノと子どもの歌」の教本作成への熱意が高まることを期待したい。

参考文献

越谷保育専門学校 2019年度 教科目概要
服部公一 1999『子どもの声が低くなる！—現代ニッポン音楽事情』東京：筑摩書房
井出美佐子 2014「保育者へのアプローチ —弾き語り曲でピアノの基礎を学ぶ—」越谷保育専門学校研究紀要第2号

参考楽譜

越谷保育専門学校（編）2014年度版 Colla parute¹⁾
_____（編）2015年度版 Colla parte
_____（編）2016年度版 Colla parte
_____（編）2017年度版 Colla parte
_____（編）2018年度版 Colla parte
_____（編）2019年度版 Colla parte
南曜子・今村方子・今川恭子（編曲）2005『心を育む子どもの歌』東京：教育芸術社
_____（編曲）2014『2訂版心を育む子どもの歌』東京：教育芸術社
大海由佳・古谷和子・肝付文子 2015『保育士・幼稚園教諭のための弾き歌い伴奏集 改訂版第1巻』東京：学研パブリッシング
_____ 2015『保育士・幼稚園教諭のための弾き歌い伴奏集 第2巻』東京：学研パブリッシング
東京福祉専門学校 編 2009『現場で役立つ 幼稚園教諭・保育士のためのピアノ入門』東京：ドレミ楽譜出版社

1) 正しいイタリア語の綴りはparteだが、原典のまま記載した。本文3(3)にて言及。

【研究論文】

本校独自の実習体験が本実習に与える影響と今後の課題 — 事後指導から考える振り返りを取り入れた実習体験より考察する — 渋谷るり子[※]・片桐恵子[※]

The influence which a training experience peculiar to our own school, gives to
the real training and future problems
— consider them from a training experience introduced by looking back on
the guidance after that —
SHIBUYA Ruriko・KATAGIRI keiko

本稿は、越谷保育専門学校での実習体験という独自の取り組みから、教育実習に向かうまでの学生の自己分析をもとに、実習体験が教育実習に与える影響と課題について考察したものである。

保育の現場での経験は養成校で学ぶ学生にとって貴重であり影響も大きい。また実体験を伴う学びがイメージを高めることや、より具体的な本実習（教育実習）へも目的・目標を持ちやすくすることにおいて効果的であると考え、実習体験という取り組みが成す効果について、学生の自己分析の客観的なデータをもとに、知識と実践の統合がどのように行われているのかを考察する。

キーワード：教育実習指導、実習体験、自己分析、PDCAサイクル

1 はじめに

教職実践演習の導入、教職課程の改善や充実の検討が重ねられ、体験活動や学校インターシップの充実、平成30年3月の幼稚園教育要領の改訂に合わせ、この度、教職課程コアカリキュラムが文部科学省から示された。また、幼稚園教諭の養成課程における、モデルカリキュラムも研究開発され、指導案の作成や模擬保育・ICTの活用など、教職に対する学びの内容がより具体的になった。これらの動向から学生が身につけた資質・能力を統合して実践に臨む教育実習や教職実践演習に求められる内容、意義や期待は大きい¹⁾。

本校の実習体験は、独自のカリキュラムである。必要単位の授業時間数には組み込まれていないが、主に教育実習指導の授業の一環として実施している。9月に実施される教育実習Ⅰ（2週間：観察・参加・部分実習）に向けて、教育実習指導の授業で学び、理解を深めていくわけだが、授業の進度と並行して幼児教育の現場で

体験を重ねることで、より授業内容を実体験と共に理解し、教育実習に対するイメージができ、より具体的な目標を持った教育実習に繋がりたいというのが本校のねらいである。また、実習体験が単に教育実習の指導の一環として実施する事にとどまらず、科目相互的に実施できる仕組み、カリキュラムのシークエンスと関連づけて考え、2019年度からのカリキュラムの構成を再検討した（表1）。

また、授業で教わったことが、実習現場でどのように生かされ、役立ち、課題を見い出せるのかについて、学生自身が実体験から認識することが本校の授業での学ぶ姿勢につながる。それと共に普段の授業がどのように実習の現場でいかされるのか、PDCAサイクルを実習以外の授業内容とリンクし、学生自身が実感していくことが、学び続ける保育者の育成の鍵になると考える。

2018年に実施した教育実習の事後指導で1、2年の全学生に「今後の課題として必要と思わ

※ 越谷保育専門学校専任教員

れる項目」についてのアンケートを実施した(表2)。その結果「ピアノのスキル」「絵本・紙芝居や手遊びの際の導入やまとめ(終わり)方」「手遊びのレパートリー」と答えた学生が1年2年生ともに上位を占め、課題として必要性を感じた学生が多い結果であった。実習を終えた学生は「部分実習の紙芝居などの読み終わった後の終わり方」「ピアノ、本、手遊び、声の大きさ、声掛けの種類」などを自分の課題としている。特に部分実習ではピアノを課題としている学生が多かったことが表2の結果より見えた。言い換えれば教育実習での今後の課題では、ピアノの伴奏や絵本の内容について、準備不足や教材研究の重要性を示唆しており、次への具体的な方策も見いだしている学生が多いことが考えられる。

また一方、子どもの実態の理解や子どもとの関わりの経験の浅さから、どうしてよいか分か

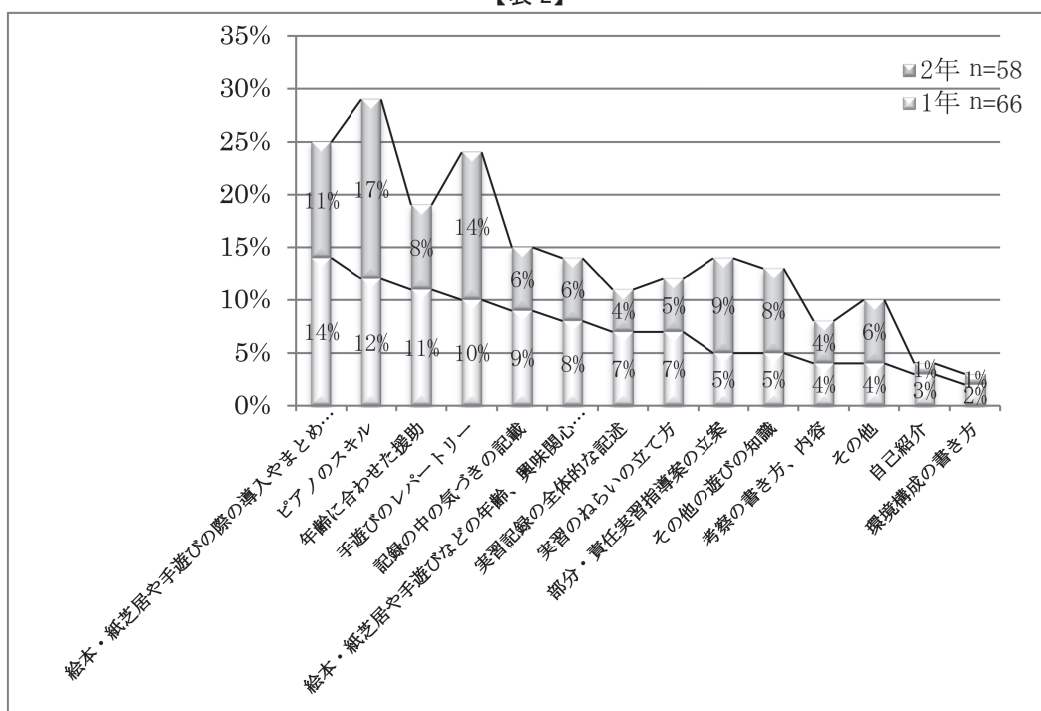
らずに具体的な方策が見いだせない学生の現状を感じている。そこで教育実習前の実習体験の充実を図るために教育実習指導の授業内容を再構成し、体験の内容も見直した。具体的には、自己紹介の教材準備とロールプレイの実施、体験的な部分実習だけでなく指導案を作成した部分実習の経験の2点が主であり、2019年度前期の教育実習指導及び実習体験を実施した。

本研究の目的は、前年度実施した事後指導からの「振り返り」が今回の実習体験にいかされた上で、指導案の作成や模擬保育を取り入れた他の授業科目と並行し実習体験でどのように生かされているのか、初めての实習に臨むにあたり、学生がどのような点を意識しているのか、またどのような点に意識が向いていないのかを把握し検証することで、実習体験のあり方について今後の学生教育に役立てることをねらいとする。

【表1】
現在の1年生の実習の流れ

	4月	5月	6月	7月	8月	9月
授業科目	教育実習指導 (15回)				事前指導	
		実習体験 2回	実習体験 3回			教育実習 I

【表2】



今後の課題として必要と思われる項目

2. 研究方法

われる項目に関するアンケート

(1) 調査対象

教育実習Ⅰの受講学生 66 名

(3) 調査時期

2019 年 4 月～7 月

(2) 調査内容

- ① 実習体験の振り返りに関する 5 段階アンケート（3 回目、5 回目）
- ② 実習体験で努力したこと、成長したことに関する自由記述式アンケート
- ③ 本実習で身に付けたいことに関する自由記述式アンケート
- ④ ③の目標達成するために実践することに関する自由記述式アンケート
- ⑤ 本実習を終え、今後の課題として必要と思

(4) 倫理的配慮

学生には、来年度以降の教育実習指導の授業の改善を含め、教育実習Ⅰがスムーズに行えるように検討するなど趣旨説明を行い、調査結果については目的以外に使用しない旨を伝え、同意を得た。

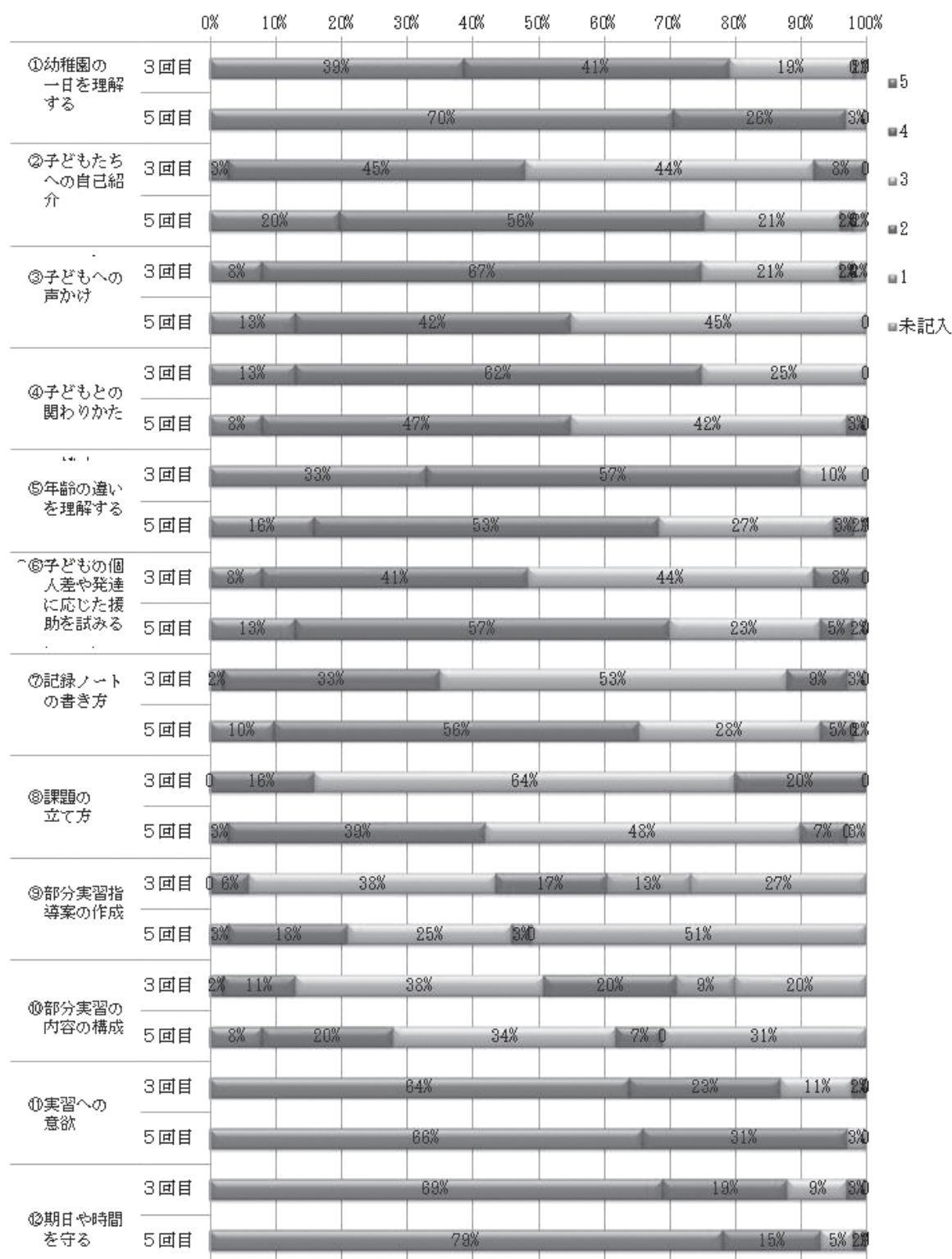
3. 結果と考察

(1) 実習体験の振り返り

【表 3-①】実習体験の振り返り

		5	4	3	2	1	未記入
①幼稚園の一日を理解する	3 回目	39%	41%	19%	0	2%	0
	5 回目	70%	26%	3%	0	0	0
②子どもたちへの自己紹介	3 回目	3%	45%	44%	8%	0	0
	5 回目	20%	56%	21%	2%	0	2%
③子どもへの声かけ	3 回目	8%	67%	21%	2%	0	2%
	5 回目	13%	42%	45%	0	0	0
④子どもとの関わりかた	3 回目	13%	62%	25%	0	0	0
	5 回目	8%	47%	42%	3%	0	0
⑤年齢の違いを理解する	3 回目	33%	57%	10%	0	0	0
	5 回目	16%	53%	27%	3%	2%	0
⑥子どもの個人差や発達に応じた援助を試みる	3 回目	8%	41%	44%	8%	0	0
	5 回目	13%	57%	23%	5%	2%	0
⑦記録ノートの手書き方	3 回目	2%	33%	53%	9%	3%	0
	5 回目	10%	56%	28%	5%	0	2%
⑧課題の立て方	3 回目	0	16%	64%	20%	0	0
	5 回目	3%	39%	48%	7%	0	3%
⑨部分実習指導案の作成	3 回目	0	6%	38%	17%	13%	27%
	5 回目	3%	18%	25%	3%	0	51%
⑩部分実習の内容の構成	3 回目	2%	11%	38%	20%	9%	20%
	5 回目	8%	20%	34%	7%	0	31%
⑪実習への意欲	3 回目	64%	23%	11%	2%	0	0
	5 回目	66%	31%	3%	0	0	0
⑫期日や時間を守る	3 回目	69%	19%	9%	3%	0	0
	5 回目	79%	15%	5%	2%	0	0

【表 3-②】実習体験の振り返り



実習体験は、5月と6月に5回行う(表1参照)。1回目は5月の2週目、2回目は4週目。3回目は6月の1週目、4回目は3週目、5回目は4週目に実習体験を行い終了となる。2回目と

3回目、4回目と5回目は、本実習を考え2週続けての実習体験を経験できる日程を組んでいる。

授業では、9月の教育実習Ⅰに繋げるために、

アンケートにある①～⑫の項目の理解や重要性について触れている。それを受けてアンケートの項目を決めている。

アンケート項目は5段階評価である。学生自身が5回の実習体験を乗り越えたことを自己評価としてどう判断するのか、学生が自分の振り返りのための評価である。ここでは、教育実習に臨む前段階とし4以上の評価を理解したと判断する。3は普通ではあるが理解をどの程度しているのか不明なところもあり、評価の3を含めそれ以下は今後の学生指導含め、授業内容に反映していきたいと考えている。

実習体験が3回終わった時と5回終わった時の2回、振り返りのアンケートを実施した（表3-①、3-②参照）。5回の実習体験を終えた時点で、項目⑫の期日や時間を守る、項目⑪の実習への意欲、項目⑤の年齢の違いを理解する、項目①の幼稚園の一日を理解する、の4項目では、9割の学生が4以上の理解を示している結果となった。

項目⑧課題の立て方、項目⑦記録ノートの書き方の2項目では、理解できている学生とまだ不安を抱えている学生がいることが読み取れる。子どもとの関わりかた、子どもへの声かけ、子どもたちへの自己紹介の3項目では、7割以上の学生が理解を示す結果ではあった（表3-①、3-②参照）。

部分実習の内容の構成、部分実習指導案の作成の2項目では、未記入が目立つ結果である。未記入は、5回の実習体験時に部分実習指導案作成を1度も行わなかった学生である。附属園の事情もあり、自己紹介以外の部分実習を行うことが難しかった学生が数名いたことも事実である。教育実習の部分実習の内容は、自己紹介、手遊び、絵本である。子どもの前で緊張しながらも実践することは、学生自身大きな喜びであり、更なる成長に繋がっていると考え。その時にどのような実体験が得られるかは、その後の学びの意欲にも大きく影響するはずと考え、実習体験での理解や経験を全学生が同じようにできることへの配慮および対策として、2019

年度は自己紹介の教材作りにも力を入れ、必須とした。自己紹介の教材とは、子どもたちの前で実習生が自己紹介をする機会に使う教材の事である。

今回は、授業を通じて教材の作成と事前の授業内発表（ロールプレイ形式）をさせた。項目⑫の子どもたちの自己紹介の評価結果は、3回目、5回目と回を重ねるごとに評価が上がり、不安を感じている学生が減ったことがわかる。実習体験の回を重ねる中で、実際に子どもたちの前での自己紹介の実践を観察すると、自分が作った教材の見直しや、方法の工夫が見られた。実習体験では、1回から2回で配属クラスや年齢が変わるため、同じ教材を違うクラスで実践していく中で、学生が課題を持ちながら手応えを感じているのではないだろうか。

子どもとの関わりかたや子どもへの声かけも自己紹介を始め、手遊びや絵本の読み聞かせの経験を行うことにより、「声が聞こえない」「絵本が見えない」「ページをめくるのが早い」など普段自分では気が付かないことを、反省会で指導教諭からのアドバイスで気づかされ、次回へと活かされている。つまり、部分実習を複数回実施した学生と少ない学生では、部分実習に対しての評価と経験の差ができたと考えられる。実習体験で部分実習を行った学生は、同じ教材でも年齢やクラスでの発達に違いがあることが実体験として理解できた結果となった。

一方で項目①幼稚園の一日は理解できたが、項目④子どもとの関わりかた、項目③子どもへの声かけには、3回の実習体験を終えた時点で3割の学生が、5回の実習体験を終えた時点で2割の学生が不十分であると言える。実習体験の回数を重ね、さまざまなクラスに配属し経験する事で、子どもの個人差や、年齢による発達に差がある事は理解できたことが、項目⑥の結果の変化に出ており、項目③④はそれと反比例する結果から、実際に実践していく中で個々の課題や保育の難しさに直面した結果であろうと考えられる。

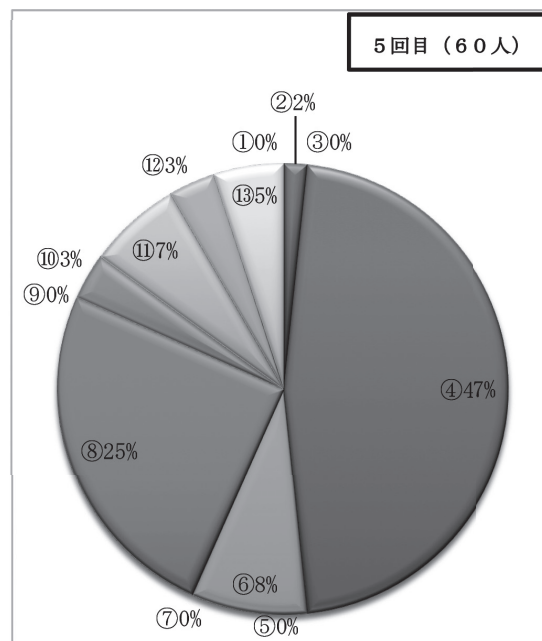
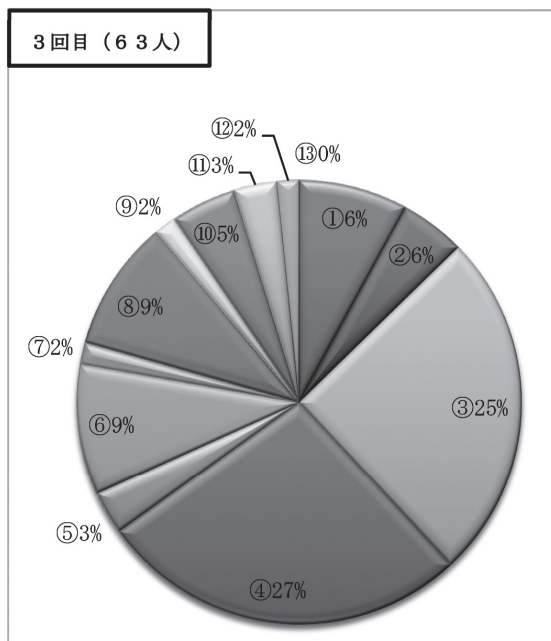
項目⑧の課題の立て方や、項目⑦の記録ノー

トの書き方では、どのような視点で今日1日の実習体験に臨んだのか、1日を終えた時点で、学生はどう感じていたのか、記録を残すことが教育実習に影響する大きな学びとなる意識が少なかったことが考えられる。

今後は、6園の附属幼稚園には、クラスの子どもの前で部分実習のお願いと同時に指導案の作成への協力の2点について、徹底し依頼を行う予定でいる。

【表4】実習体験で努力したこと

- | | | |
|-----------------|------------------|-------------------------|
| ■① 幼稚園の一日を理解する | ■② 子ども達への自己紹介 | ■③ 子どもへの声かけ |
| ■④ 子どもとの関わりかた | ■⑤ 年齢の違いを理解する | ■⑥ 子どもの個人差や発達に応じた援助を試みる |
| ■⑦ 部分実習指導案の作成 | ■⑧ 部分実習の内容の構成 | ■⑨ 子どもの帰園後の清掃等、準備すること |
| ■⑩ 喧嘩の仲裁について | ■⑪ 保育者を観察し、見習うこと | ■⑫ 積極性 |
| ■⑬ 発達障害の子どもと関わる | | |



5回の実習体験では、学生が努力したことは、3回目より5回目の振り返りの方が、積極性や子どもとの関わりなど、待ちの姿勢ではなく、自ら行く姿勢になったと言える結果であった（表4）。特に興味深いのは、3回目の実習体験後に努力したと感じていた項目が、5回を終えた段階で0%もしくは著しく減っている結果である。特に、幼稚園の1日の理解や、子どもへの積極的な声かけなどは、実習体験の回数を重ねるごとに実習のねらいや理解の段階がレベルアップしている結果であると考えられる。幼稚園の1日の流れの理解や、子どもの降園後の清掃や準備の手伝い、子どもへの積極的な声かけなどは、実習初期の段階のねらいにあたる内

容であり、3回目から5回目にかけて子どもとの関わりかたや部分実習内容の構成などを努力した割合が増えていることから、裏付けられる。多くの学生が、5回を通して実習の目標の置き方に変化があったことがわかった。

また、保育者を観察し、見習う姿勢も3回目の時点より5回目の時点の方が多く、5回の回数の中で、少なからず回を重ねることが学生の貴重な体験となり、附属園の保育者からのアドバイスを真摯に受け留め、各学生自身が個々に努力した結果と言える。

一方であまり変化が見られない項目もあった。子どもの個人差や発達に応じた援助については、差が見られなかった。これは、個々に応

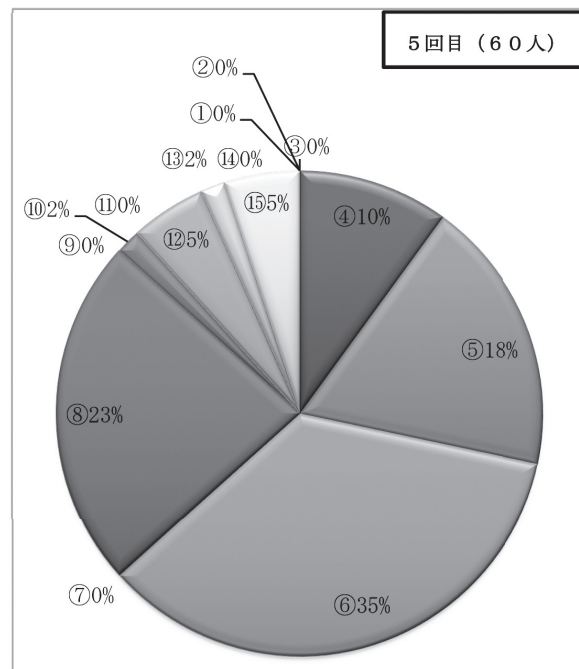
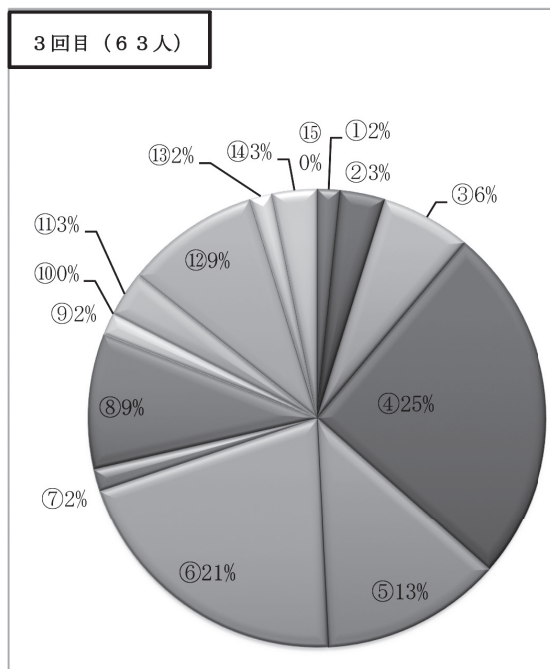
本校独自の実習体験が本実習に与える影響と今後の課題

じた変化の大切さを理解しながらも、実際に実践する中でまだ試行錯誤の段階が続いているのではないかと推察される。このことは、学校に戻った時の振り返りや情報交換などでも、学生から挙がった声である。回数を重ねながら、保

育者を観察し見習うことなど、目の前の子どもだけではなく、少しずつ視野を広げ、観察から実践に移すことが出来てきたのではないかと考える。

【表 5】実習体験で成長できたこと

- | | | |
|------------------|-------------------------|-----------------------|
| ■① 幼稚園の一日を理解する | ■② 子ども達への自己紹介 | ■③ 子どもへの声かけ |
| ■④ 子どもとの関わりかた | ■⑤ 子どもの個人差や発達に応じた援助を試みる | ■⑥ 記録ノートの書き方 |
| ■⑦ 部分実習指導案の作成 | ■⑧ 部分実習の内容の構成 | ■⑨ 子どもの降園後の清掃等、準備すること |
| ■⑩ 喧嘩の仲裁について | ■⑪ 保育者を観察し、見習うこと | ■⑫ 積極性 |
| ■⑬ 保育者としての自覚が持てた | ■⑭ メモを取る | ■⑮ 前回の反省を生かし毎回実習に臨んだ |



成長できたことについては、学生個人が自己分析し成長できたところを自由記述で行った。

成長ができた実感できた項目は、記録ノートの書き方が目立つ結果となった（表 5）。入学後 1 か月で、教育実習の記録様式と同じ内容とボリュームで実習体験でも記録をしていくことは、学び始めた学生にとっては大きな負担と努力であったと同時に、記録の書き方の概要は理解できたという実感に繋がった。実習体験開始前に、5 回を通して記録の書き方の基本を理解するという授業担当者の目標はある程度達成できたと考える。また、部分実習の内容の構成について言及している学生が多いのは、やはり

記録ノートと共に苦勞をした結果であろう。やり終えた、頑張れたという達成感からの結果であるのではないだろうか。実際の記録ノートや指導案の内容については、理解したというレベルであり、実際には書き方の指導はつづいているのが現状である。

いずれにしても、学生一人ひとりが幼稚園実習に関して見る視点が、教育実習で学ぶ観察、参加、部分実習の内容の視点を持つことができたと言えるのではないかと。

【表 6】本実習で身に付けたいこと

身に付ける事	人数	割合
記録ノートの書き方	20	22
子どもとの関わりかた	17	18
部分実習の内容の構成・スキル	16	17
子どもの個人差や発達に応じた援助を試みる	9	10
喧嘩の仲裁について	9	10
年齢の違いを理解する	6	6
子どもへの声かけ	4	4
積極性	3	3
子どもの前に立つ時、落ち着いて発表すること	3	3
部分実習指導案の作成	2	2
幼稚園の一日を理解する	1	1
見守りと援助の境を付ける	1	1
ピアノのスキル	1	1
言葉で子ども達をまとめる力	1	1
合計	93	100

学生たちは実習体験を通して、自分なりに努力し、成長できたことを自負すると同時にその経験の中で、次に本実習ではどうすればよいのか、身に付けたいことと、達成するために行うことを冷静に自己判断することに繋がっていると考えられる（表 6、7）。

表 7 より、①保育者より学ぶこと（表 7 ※ 1 の項目）、②部分実習に向けた準備と練習の重要性（表 7 ※ 2 の項目）を、5 回の実習体験で得ることができ、教育実習においても重要であると学生が感じたと言える。

具体的には、1 点目、「保育者を観察する」「保育者に相談しアドバイスをもらう」ことは学校の授業時に、保育者の行動や声かけなど素敵だと感じることは自分に取り入れるように伝えているが、理解に結びつけるのは難しいと言える。しかし、実習体験を行ったことで、保育者の意図した援助や声かけによる子どもの変化を目の当たりにした結果、保育者を観察すること

【表 7】目標を達成するために行うこと

達成するために行うこと	人数	割合
保育者を観察する（※ 1）	24	26
部分実習の練習をする（※ 2）	12	13
部分実習に関して事前に調べ準備する（※ 2）	11	12
保育者に相談しアドバイスをもらう（※ 1）	10	11
子どもを観察する	8	9
広い視野を持ち、周囲を見て保育する	8	9
実習体験（記録含）を見直す	7	8
気付き等細かくメモを取る	5	5
先輩を参考にする	1	1
普段の授業で意欲的に発表する機会を持つ	1	1
ピアノの譜面を読める努力をする（※ 2）	1	1
指導案をたくさん書く（※ 2）	1	1
子ども目線になり保育する	1	1
時系列をパターンで覚える	1	1
授業で学ぶ	2	2
合計	93	100

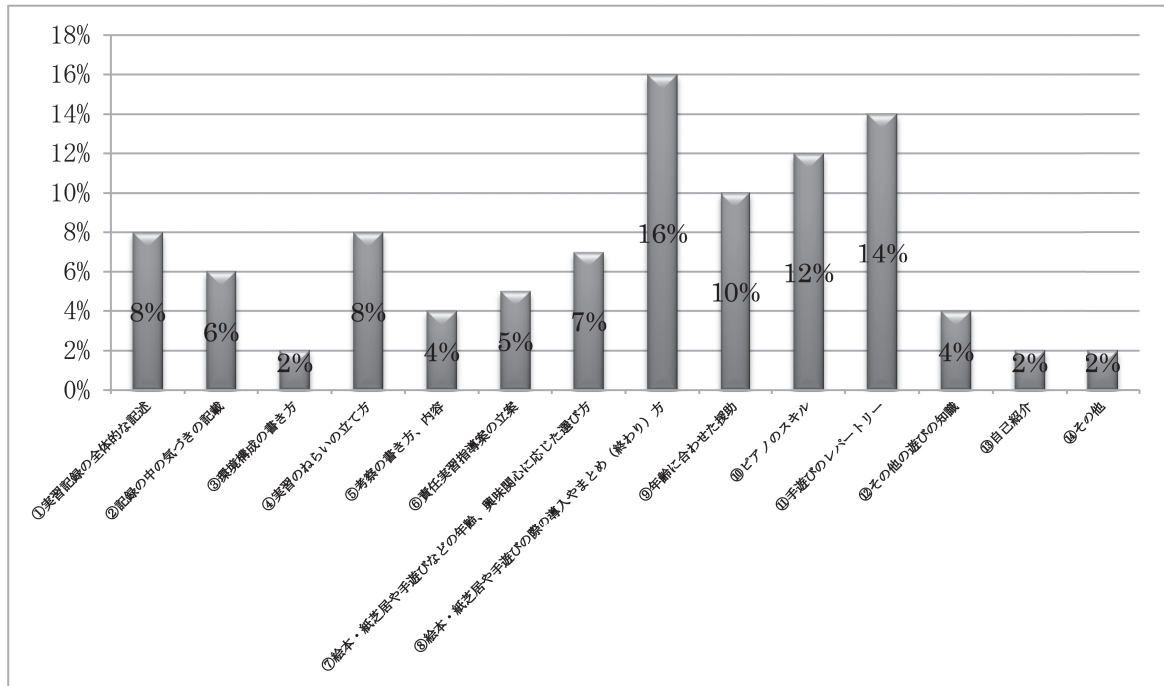
や保育者に相談しアドバイスをもらうことの重要性に気づき、学んだ結果と言える。

2 点目、部分実習の練習をする、部分実習に関して事前に調べ準備する、ピアノの楽譜を読めるように努力する、指導案をたくさん書くなど部分実習に関する記載が多かった。つまり、実習体験で実際に行うことにより、子どもの前で行う難しさ、準備の必要性など肌で感じた結果と言えるのではないかな。

（2）本実習での振り返り

【表 8】は教育実習を終えた 1 年生の学生に「今後の課題として必要と思われる項目」についてのアンケートを実施した結果である。「絵本・紙芝居や手遊びの際の導入のまとめ（終わり）方」「手遊びのレパートリー」「ピアノのスキル」「年齢に合わせた援助」「実習記録の全体的な配慮」「実習のねらいの立て方」が必要であると感じた学生が多い結果である。

【表 8】 今後の課題として必要と思われる項目（2019 年入学生）



【表 6】の教育実習で身につけたいことのアンケートと比較すると、教育実習前は記録ノートの書き方や子どもとの関わりかたを身につけたいと目標を掲げていたが、教育実習後には絵本や紙芝居、ピアノ等の部分実習に関するスキルが必要であると感じた学生が多い結果であった。目標に掲げていた記録ノートの書き方は「実習記録の全体的な記述」は8%、「記録の中の気づきの記載」6%、「考察の書き方、内容」4%と課題として感じている学生が少ない結果であった。

また、子どもとの関わりかたを身につけたいという目標を掲げていたが、年齢に合わせた援助を課題として感じている学生は10%であった。理由には、「子どもが自ら出来ることまで必要以上に援助してしまうことがあった」「年齢に合わせた適切な援助が出来るようになりたい」「自由遊び時に異年齢と関わる際、関わりかたが難しかった」「観察はできたが実践することがあまりできなかった」「どこまで援助し、一緒にやるべきなのか分からない」「援助の度合いは、年齢以外にも個々に対応しなければならず難しかった」「年長への声掛けでは、指示

だしではなく他の方法で伝えることが難しかった」等の記載があった。

授業科目と並行している実習体験では、体験実習の翌週に授業を通して反省・考察を含め、具体的な学びと指導、学生間の振り返りの共有を行っている。そのため、実習体験の保育現場で解決できなかったことや不安を授業で解消といった個々のPDCAサイクルと学生間での情報共有(共感)が両方できるような仕組みになっている。しかし、教育実習では連続した10日間の実習であり、不明なことがあっても途中で授業を行うことはできない。

その点から、実習体験時は、記録ノートの書き方や子どもとの関わりかたを課題にあげていた学生が多かったが、連続性の本実習では、保育者としての専門的な技術やスキルを課題にあげた学生が多い結果になったと考えられる。当然ながら記録し保育を振り返ることも大切ではあるが、保育者として子どもと関わる際、1日の保育の流れの中で、また年齢や季節など、子どもが日々学び成長している中で、保育者がその時々合った子どもへの専門的技術を目の当たりにしたであろう。具体的には、学生が考え

ていた部分実習（絵本・紙芝居・手遊びなど）のレパートリー数よりはるかに多かったこと、また保育の様々な場面で絵本の読み聞かせなどを観察し、1つの教材から多様な関わりを展開できる保育者の保育技術を、教育実習を通して感じた結果と言える。

実習体験の目的は、本実習に行く前に現場の幼稚園（本学では附属幼稚園）の雰囲気を感じ取り、授業の学びと実習経験を交互に繰り返すことで、より理解を深めることであり、また、学生が一番つまずく、実習記録や部分実習指導案の書き方なども教育実習に倣い実施することである²⁾。

昨年度のアンケート調査では「1日の保育者の動きの理解」「幼稚園教諭という仕事の厳しさや大変さの理解」「実習体験が今回の教育実習に生かされた」の項目は100%の結果であった。特に実習体験が教育実習にいかされた結果では、保育者を目指す学生の中には、現場実習でつまずき、自信をなくし、保育者を目指すことを諦めてしまう学生の減少になる。本校としては、入学後半年でいきなり実習に行くのではなく、授業と並行し、教育実習と同じように観察、参加、部分実習を実習体験の中で1日を通して経験することで、教育実習での学び、学生が自ら省察しながら保育者像を思い描き、今後の学び、実習の意義につながる役割に実習体験が生かされていることが結果である²⁾。

今回は、その実習体験で回を重ねるごとに振り返りを行い、教育実習に備えた。しかし、連続した教育実習では、幼稚園教諭の仕事の厳しさや大変さを理解した上で、保育者の動き、子どもへの適切な指導や援助方法などを学び、子どもと関わる専門的技術やスキルの必要性を感じたと考えられるのではないかな。

4. まとめ

教育実習は理論と実践を自ら統合して主体的に実践する科目である。今回の結果から、5回の実習体験という限られた期間の中での学生の気づきの変化や実習生としての日々の小さな成

長を数字としてとらえることができた。このことは理論と実践の統合がどのように行われていったかの手がかりとなり、実習体験が教育実習へ与える影響は多岐にわたったと考えられる。また教育実習に向けてどのような道筋を立てたいのかという本校の姿勢や、育てたい保育者像が大きくあらわれるともいえる。今後も学生の実態に合わせた、継続的な内容の改訂が欠かせないであろう。

引用文献

- 1)「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」2017 文部科学省
- 2) 片桐恵子・渋谷るり子 2018「学生の教育実習の振り返りからみる実習体験を組み入れた指導計画の意義」『越谷保育専門学校紀要』7. 26-35

参考文献

- 汐見稔幸 2017『平成 29 年告示 保育所保育指針 まるわかりガイド』、チャイルド本社
- 白石崇人 2016『教育実習（幼稚園）の概要と課題』、教職センター年報第 4 号
- 無藤隆 2017『平成 29 年告示 幼稚園教育要領 まるわかりガイド』、チャイルド本社
- 無藤隆 2018『幼稚園教育要領ハンドブック』、学研

謝辞

本稿の執筆にあたり、資料提供、アンケートへのご協力頂いた方々に、ここに記して感謝申し上げます。

【研究論文】

自然の音環境に意識を向けた活動の一考察 —公園での音探しの活動から— 渋谷るり子[※]

One consideration from activities that focus on the natural sound environment — Sound hunting activities in the park— SHIBUYA Ruriko

幼稚園教育要領「表現」における、自然の中にある音に焦点をあてた活動から考察するものである。自然の中にある音や音環境は、その環境下にいる子どもたちの音に対する意識や表現活動にどのような影響を与えるかについての予備的な意味合いを含む研究である。音と形の関わり、活動から得られる環境構成への気づきなど、一つの活動から多岐にわたる影響の可能性についてまとめたものである。

キーワード：音環境、環境構成、自然の中の音、領域表現

1. はじめに

2017年3月に告示された幼稚園教育要領「表現」の「内容の取扱い」には、新たに「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など、自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」という文言が加わった。子どものみならず、私たちを取り巻く音の環境は激変している。音を作り出す電子回路（PSG）の発明と普及に伴い、電話機の発着信のベルやブザー音が短いメロディーや曲に変化し、電車の発車ベルも、駅や地域にちなんだ曲に変化した。お店では扉が開くと合図のメロディーが鳴り、店内ではBGMが流れている。携帯キーを操作する度にプッシュ音が鳴り、充電コードに接続した音が鳴り、音が鳴ることで正常に機能していると安心するほど、電子音に溢れている。

ジョン・ケージ、マリー・シェーファー、武満徹に共通する見解として、現代人は耳の感受性が衰え、聴くことを怠っているという論がある¹⁾。音は、時として生活の中になくってはならない大切な役割を担っている場面も多い。周りに溢れた電子音を否定するのではなく、このような音環境の中であるからこそ、今回の自然の中にある音に気付くという意味の深さを感じ

る。自然の中の様々な音を聴く体験を子どもたちが重ねることで、単に物理的な音として知覚するのではなく、生命の響きあう音として感じる¹⁾ことに繋がっていくと考えるが、子どもの偶然の気づきだけを待つことは難しいと考える。大切なのは、そこに寄り添う保育者の感性であり環境構成であり、ねらいではないだろうかと考えたときに、保育者を目指す学生がどれだけ音に対して意識を向けているのか、敏感になっているのか。本稿では、保育者を目指す学生の音に対する意識や感じ方とそれらの変化をまとめることで、保育者養成校としての領域「表現」における指導や、子どもの心を育む音楽活動について考えることとする。

2. 予備調査（研究の動機）

学生には口頭で倫理的配慮や研究の主旨を説明した上で、下記のとおり調査を実施した。

対 象：保育者養成校に在籍する学生 72 名
(1 年生)

実 施 日：2017 年 4 月

調査内容：音に対する記憶と気持ち

質問事項：今日聞いた音で記憶（印象）に残っているものと、その理由

※ 越谷保育専門学校専任教員

1年次の4月に「音楽Ⅱ理論と音楽あそび」の初回授業時、上記の質問をなげかけ、紙に記入してもらった。質問をした時の学生の反応は、始めは覚えていないとざわついていたが、少し考えてから記入している様子が見られた。

結果は、電車の走る音や発車ベルに関する登校時のものが25%で最も多く、次いで目覚まし時計のアラームが18%、雨音や雨が傘にあたる音が13%、学校近くの工事現場の騒音が11%、周囲の生活音（話声や歩く音）が9%、風の音が8%、イヤホンで聞いた好きな曲が6%、その他が10%となった。その日の背景として、入学後授業の初日、雨が降っていたうえ、風も強い日であった。電車の走る音や発車ベルを挙げた理由としては、学校へ向かう電車から聞こえる音が、自分自身のこれから始まるぞという気持ちや不安、期待、一日の始まりを挙げており、目覚まし時計のアラームについては、今日から学校であることや、がんばろう、もう時間かと思った、まだ寝ていたい等の理由が挙げられた。3番目の雨音については、憂鬱な気持ち、胸騒ぎ、嫌だな、雨音がやむと嬉しいといった理由が挙げられた。

音の種類に関わらず、頑張ろう、嬉しい、焦り、嫌だといったその時の自分の気持ちに置き換えていた理由が72%で最も高く、時間や合図、場の状況を理由に挙げていたのが17%、無記入が11%であった。

記憶（印象）に残った音について、事前の予想では雨や風などの自然音について、もう少し数値が高くなるかと想定していたが、学校初日への期待や気持ちを電車の響きとともに記憶した音として上位にあげられたことは意外であった。保育者を目指す学生が普段自分の周囲の音に対してどのように感じているのか、気にしているのかという疑問、音が溢れすぎている昨今、音を単に物理的なものとしてとらえるだけでなく、面白いもの、心を揺さぶるものとして感じるものでもあるという視点を合わせ持つ必要性を感じ、研究動機として繋がった。

後で記述するが、公園での音さがしを実施し

た後の学生のリアクションペーパーには、自然の音はこんなにも心地良いものかと改めて感じた、イヤホンで音楽を聴かずに自然の音も楽しみたい、普段気にとめていない音に気がつける人になりたい等といった記載が多かった。それと合わせて、音を子どもと一緒に楽しむ保育をしたい、子どもたちにも自然の様々な音に気が付いてほしいと結んでいる学生が多かった。

3. 授業での実践

授業の中では、自身の音に気付く感性、音を感じる感性を呼び起こそうと学生たちに伝えている。大人が聞き逃してしまいそうな音や、たいてい気にもとめていない音を子どもは認識し、保育者に報告するような姿が実際の保育現場で見られることから、大人になった学生たちには、呼び起こそうという言葉を使っている。

問題なのは、音に気付く感性や感じる感性が鈍っているまま保育者として子どもと向き合うことであると考えからだ。生後10ヶ月くらいまでは、人間は視力よりも聴力に頼っている「聴覚優位」の状態から、発達と共にいつしか視覚に頼っている。発達とともに、意思を持って聴く音と、注意を向けなくてやり過ごす音を意識的に分けて聞くことができるようになるからだ。扶瀬（2018）の調査によれば、学生たちは「自然音に関する幼少期の記憶が確かにあり、風や雨の音に耳を澄ませた経験がある」という²⁾。そのことから、呼び起こしの作業を授業で実践し、学生の気づきの変化をとらえることとした。

(1) 実践の方法と内容

学生には口頭で倫理的配慮や研究の主旨を説明した上で、下記のとおり調査を実施した。

対 象：保育者養成校に在籍する学生56名
(1年生)

実施時期：2019年5月

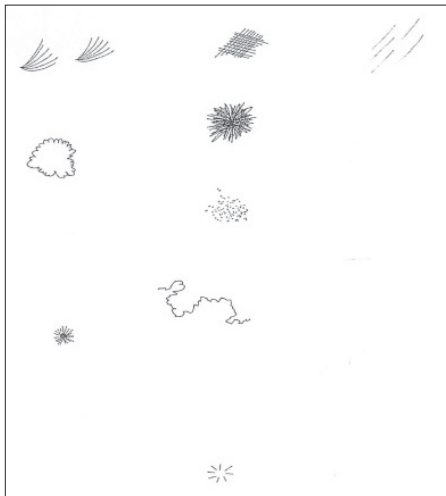
実践内容：マリー・シェーファー「音さがしの本」より、絵にぴったりの音探しを学校近隣の公園で実施。(図1参照)

導入として、公園までの移動時にも音に関する課題を与え、現地到着後もイヤークリーニングとして耳を澄ます活動を実施してから行う。

まず、学校から公園までは徒歩でおよそ5分である。住宅街と畑がある比較的静かな道で、大通りから一本離れている。移動する間は、聞こえてくる音に耳を傾けるように伝えた。

公園到着時、①移動中に聞こえた一番大きな音 ②自分についてきた音 ③通り過ぎていった音 ④嫌だなと思った音 を尋ね、記入した。

①については、多くの学生が車などのエンジン音、側溝の石がガタガタする音、犬の鳴き声などが挙げられた。②については、自分の足音や友達の足音が多数であった。③については、通り過ぎた車や自転車ほとんどで、風の音、鳥の鳴き声も挙げた。④については、特になしの回答の他、飛んできた虫の羽音、車の音などが少数だが挙げた。



(図1)

公園到着後は、図1の絵柄をランダムに白い用紙に印刷したものを一人一枚配り、公園内で音探しを実施した。音探しの実施時間は約30分とした。音は、その場において聞こえてきた音でも、自分で何か動作をした時に発した音（例えば砂利の上を歩く、ブランコをこぐ等）でも良いとした。絵の横に、音が何から発せられた音なのかと、それを言葉で表した表現（サラサラ、

ガチャガチャ等の擬音）も記入するようにした。言葉で表した表現については、今回の研究からは除外する。公園の環境としては、住宅街の中にあり、周りを高さ10mから20mの大きな木が囲んでいる。シロツメクサやたんぽぽなどが咲いている広いフィールドと、滑り台やアスレチック、ブランコ、鉄棒などの固定遊具も設置されている。広いフィールドでは、高齢者がグランドゴルフを楽しみ、遊具の周辺では近所の親子が数人遊んでいる。またテニスコートが隣接しており、硬式テニスを楽しむ人々の姿がある。

(2) 実践の結果

それぞれの絵柄に対して、公園内で探した音は、「草を手で触った音」「鳥の鳴き声」「砂を蹴った音」「ブランコを漕いだ時の鎖の音」「車のエンジン音」「雲が動く音」などという表現で示された。それらの音を①生きもの（植物） ②生きもの（動物） ③砂、土、石などの土壌と水 ④人工物や遊具 ⑤その他（未記入を含む）の5つに分類した。それぞれの絵柄9種類の結果は下記のとおりとなった。



(シロツメクサの花や葉を触ってみよう)



(木の枝をゆすってみたらどんな音がするかな)



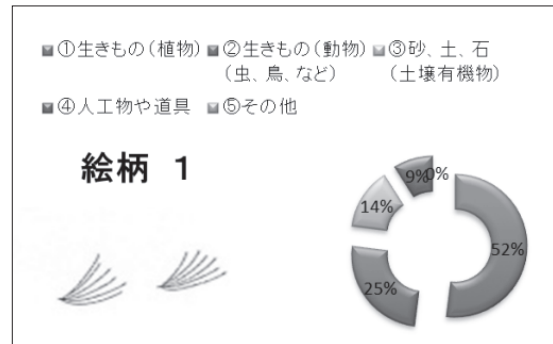
(土を触ってみようか)



(走ってみよう!)

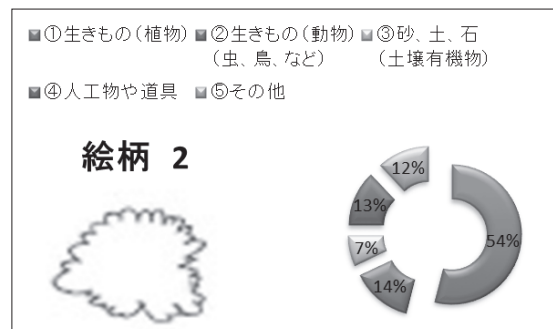
(i)

絵柄 1 に関しては、草を触った時の音、葉が風で揺れる音、雑草を踏んだ音、たんぽぽの綿



毛を揺らした音、風で葉が飛ぶ音といった①に関する回答が52%となり、次いで鳥の鳴き声、綿毛を飛ばす自分の息と回答した②が25%と続いた。③は砂を投げた音が挙がり、④はブランコなどの遊具で遊んだ音との回答があった。たんぽぽの綿毛に関しては、綿毛が飛ぶ自然音は非常にかすかな音ながら、想像も加わった音として「サラサラ」「ワサワサ」「フワー」といった表現にしたものを①と分類し、綿毛を飛ばす息として「プー」「フー」といった表現になっていたものを②と分類した。

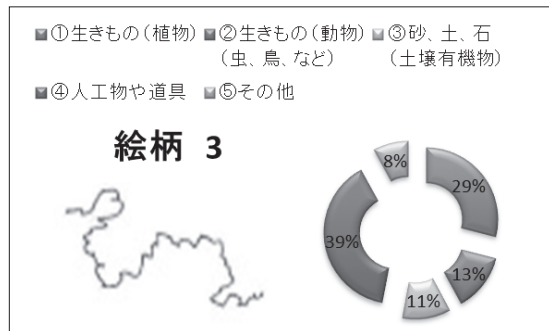
(ii)



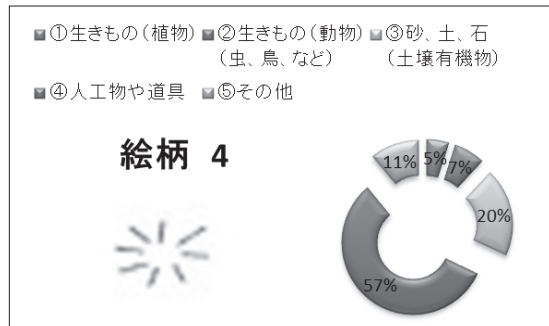
絵柄 2 に関しても絵柄 1 と同様①の植物から発せられた音と回答する割合が54%と高かった。綿毛やシロツメクサの花を触ったりした時の音として回答があり、②の人の話し声や鳥のさえずり、犬の鳴き声といった回答で14%となった。④は隣接するテニスコートのボールを打つ音や車のエンジン音が多く13%となった。⑤には、雲が動く音との回答で12%となり興味深い。

(iii)

絵柄 3 に関しては、④の 39%が多く、ブランコを漕いだ時の鎖の音、重機のエンジン音、服の摩擦、ボールが地面を転がる音、鉄棒をひっかいた音などとの回答があった。①は木に登り枝を揺らした、木の枝がきしむ音、棒で木の幹をひっかいた音、葉が落ちる音などの回答であった。②は虫の羽音、鳥の声の回答、③は地面を足で擦ってみた音、地面を棒で掻いた音の回答であった。

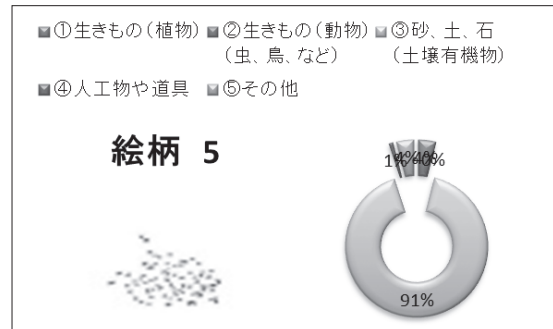


(iv)



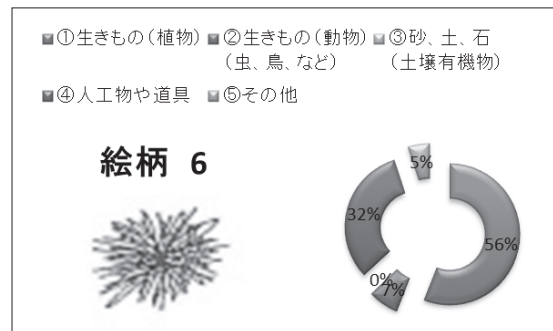
絵柄 4 については④の回答が 57%と多く、グランドゴルフのボールを打つ音、テニスボールを打つ音が目立った他、カメラのシャッター音、ペンのノック音、ヒールの足音といった回答があった。続いて③が 20%となり、水道の蛇口から(しずく)が落ちる音、石が落ちる音との回答があった。

(v)



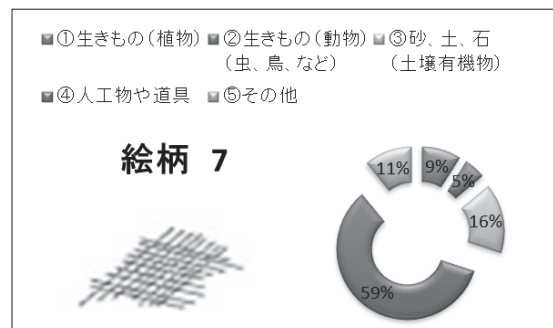
絵柄 5 については、③の回答が 91%と大多数を占め、砂の音、砂を踏む音であった。

(vi)



絵柄 6 については、①の回答が 56%と高く、図柄 2 同様にシロツメクサの花や、たんぽぽの綿毛と回答する者が目立った。また④の 32%はブランコの鎖やテニスのボールを打つ音との回答であった。②の 7%は少数であるが、人の声と全員が回答した。

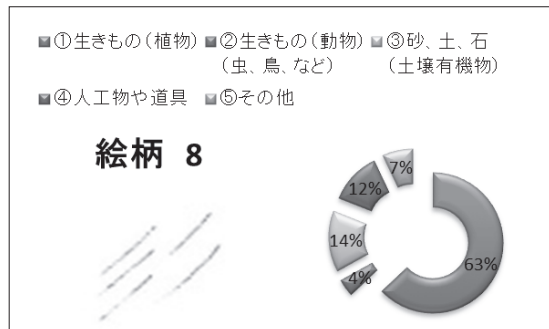
(vii)



絵柄 7 については④の 59%が最も多く、アスレチック遊具のロープ、網の遊具、フェンスの音との回答が目立ち、次いで滑り台や車のエンジン音、遊具を揺らす音であった。③の

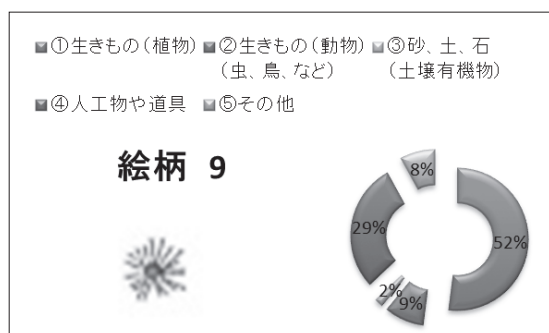
16%には、地面をひっかく音、地面にいたずら描きをする音、砂地で足を擦るなどの回答であった。

(viii)



絵柄8については、①の63%で、草や葉っぱが風で揺れる音が大多数となった。その際、風というキーワードを入れている学生が目立った。63%のうち、風という言葉を使った回答は43%で、残りの20%が草や葉だけの言葉であった。③の14%は砂を投げる音、砂を触った音との回答だった。④の12%はブランコを漕いだ時に聞こえた音、車の通る音との回答があり、図柄6のブランコの鎖の音、図柄2の車のエンジン音と表現が区別されている回答も興味深い。

(ix)



絵柄9については、①の52%が多く、シロツメクサの花、草をちぎった音、木の実を踏んだ音となった。④の29%は、テニスボールを打つ音、ゲーム開始の笛の音となり、②の9%は鳥の鳴き声、虫の羽音、人の声となった。

4. 実践後の学生の気づき

音探しの実践後は、教室に戻り自分たちの探してきた音について意見交換をした後、どのような気づきがあったのか、振り返りシートに記入した。以下学生からの意見である。

- ・日常生活には様々な音があふれており、常に聞いているつもりだったが、聞いていた音は人工物の音(ブランコや車)であり、葉が擦れる音などの自然音は耳を傾けないと聞き逃してしまう音が多かった。
- ・同じ絵に当てはめたい音が複数あった。
- ・音を探さなくてはと思っていたが、歩いたり触ったりして探している時にすでに音があることに気が付いた。
- ・公園に行ってみて自然から様々な音が出ていることが気づけた。
- ・大人になって音を気にしなくなっていたが、子どもは気になっていたり不思議に思っていることを忘れてはいけないと思った。
- ・嫌な音が無かったのは、日常的に聴きなれている音が多かったからかもしれない。
- ・自分の周りに音があふれていることを改めて感じ、自分に必要のない音は脳内で排除しているのではと考えた。そうであるなら、普段聞こえない音(聴こうとしていない音)を聞けないのは残念に思った。
- ・同じ草でも音は様々、聞こえ方も様々で不思議に思ったし、その日の体調によって感じ方も変わるのではないかと思った。
- ・普段聞こえてこない音がいっきに聞こえてきた。
- ・音を見つけたときは嬉しかったし、人の意見をきくのも面白かった。
- ・外へ行くことで、自然の音(虫、鳥)に意識を向けることができた。
- ・耳を澄ますと、車のエンジン音や機会音が思いのほか大きな音に聞こえた。
- ・自然の音はきれいで落ち着く。
- ・外に出ることで、自然が多く、虫や鳥など向こうから音がやってくることもわかった。
- ・一番心地良かったのは鳥の声で、全部違う声

(音)だと気がついた。

- ・友達と見つけた音を共有することはとても楽しく、様々な意見があることに気がついた。
- ・自分の周りに様々な音の世界があることを子どもにも感じてもらえるようにしたい。
- ・草の音、鳥の声、砂の音など、歩くと何かが音を発していて、生きている音の実感があった。
- ・晴れた日に音探しをしたが、雨や曇りの日にも実践したらどんな変化があるのかと興味深い。
- ・音探しという課題を持つだけで、外あそびが変化することに気が付いた。
- ・音に意識を向け音探しをしていたつもりだが、太陽の光、ちょうちょう、雲、葉から透けた光など目からもたくさん自然を感じていた自分に気がついた。
- ・人工物の音は濁音が多いが、自然音はやわらかいもので聞き心地の良い音が多かった。
- ・大きな音ほど人工的で、小さな音ほど自然の音だった。
- ・私にしか感じない聞けない音をこれからも探したいと思った。

5. まとめ

今回の結果から、公園でのフィールドワークは視覚、触覚、聴覚のすべてがフルに活動していることがわかった。また、絵柄5に対して砂にかかわる音だと回答することから、形と音の関わりは、大人の場合今まで経験し、見たことのある物との関わりが深いということも興味深い。また、活動からは自然の中に身を置き、自分自身を感じた学生が多い。学生の気づきにもあったように、行動のねらいは音探しをしていた訳だが、その活動から自然の音に気がつくだけでなく、葉や草の形から自然の中の形を感じるものであった。聞こえた音の数を数えることを提案すれば、より音が耳に入ってくるであろう。

扶瀬(2018)は、「幼児が「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある

音、形、色などに気付く」ためには、本来 hearing として聞こえている音を、保育者としては listening している必要があるのではないか」と述べている。今回の音探しのように、保育者を目指す学生が、子どもたちだったらどのように感じるのか、どう気づくのか、子どもと同じように試してみる経験は大切であると考え。体験してみて、感じること、気づくこと、体験を通して理解することの意義は大きい。そして子どもたちが自ら感じることでできる仕掛けを保育者が工夫すること、つまり保育者の環境構成や関わりの重要性をこの活動から学生が気づけたと考える。

松寄らの研究によると、「保育経験年数が多い保育者の方が音環境についての意識が高い、音楽に関して園が様々な取り組みを行っている」と答えた保育者の方が、意識が高い³⁾という。

「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など、自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」という一文が明記されたことの意義を、そして音環境に関する関心を、これからも学生に問い続けたいと考える。

引用文献

- 1) 無藤隆・吉永早苗 2016 『子どもの音感受の世界―心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探究』、萌文書林
- 2) 扶瀬絵梨奈 2018 「領域「表現」における自然音に意識を向けた指導の一考察 ―音環境と音の記憶についての視点から―」、柳白こども学研究 第1号
- 3) 山寄洋子・吉永早苗・岡本祐子・無藤隆・新開よしみ 2010 「保育現場の音環境に関する意識の構成要素と関連要因」、埼玉学園大学紀要 第10号

参考文献

- 文部科学省 2018 幼稚園教育要領
今野貴子 畑瞬一郎 2014 「子どもの心を育む音楽活動 音楽療法からのアプローチ」

無藤隆 2018『幼稚園教育要領ハンドブック
2017 年告示版』学研

謝辞

本稿の執筆にあたり、調査にご協力いただいた
学生の皆様に感謝申し上げます。

【研究論文】

ソフィア・アラベラ・アルウィンの“会集”の保育実践について ～玉成幼稚園の保育実践内容の一考察～

畠田 貞子[※]

About childcare practice of the “Morning Circle” by Sophia Arabella Irwin — One consideration about contents of childcare practice in Gyokusei Kindergarten — SHIMADA Sadako

2016年に100周年を迎えた玉成幼稚園について研究しており、現在までに幼稚園の創設者である日系二世女性（ソフィア・アラベラ・アルウィン）が苦難を乗り越えて、幼稚園・保育者養成校創設の経緯と教育思想についてまとめた。継続研究として、本論文では幼稚園の朝の会（会集）に着目して、幼稚園でどのような教育・保育実践が実施されていたのか、また、保育実践に創設者の教育思想等がいかに反映されたのか考察を試みたいと思う。

キーワード：ベラ・アルウィン、幼児教育思想、玉成幼稚園、保育実践方法、会集

I. はじめに

本論文は筆者が勤務していた玉成幼稚園創設者の教育思想と具体的な保育実践に関して考察を試みるものである。玉成幼稚園については『幼稚園教育百年史』や『キリスト教保育125年』に大正5年に創設した「玉成幼稚園」の創設者として日系2世（父がベンジャミンフランクリンの子孫：アメリカ人でハワイ公使、母が木曾義仲の子孫で日本人）のソフィア・アラベラ・アルウィン [Sophia Arabella Irwin 1883-1957]（以後、ベラと呼称する）が掲載されているにも関わらず、創設者に関する資料を見つけるのが至難の業である。しかし、幼稚園は2016年に100周年を迎え、今も多くの園児を迎え入れ、脈々と保育実践しているのである。そこで、筆者がまとめたベラの教育思想や学園の経緯を礎として、本論文ではベラが重要視した「会集 (Morning Circle)」についての教育思想や実践方法に着目して考察を試みようとする。

創立100周年を経過した私立「玉成幼稚園」及び「玉成保育専門学校」の創設者であるソフィ

※ 越谷保育専門学校非常勤講師

ア・アラベラ・アルウィンが幼稚園創設に至った動機と教育思想は、大方、以下の3項目にまとめられる。

- ① ベラが幼少期より伊香保の別荘にて多数の子ども達と遊び交流した経験から「子どもと共にいる幸せ、子ども達と関わることが上手である」ということと子どもへの愛情と幼児教育への情熱を自己発見した。
- ② キリスト教への深い信仰心と結婚問題から至った決意（戦時中、二世である苦悩の末、生涯独身を通した）により幼児教育に邁進していった。
- ③ 多数の留学経験（ドイツのフレーベル学園、イタリアのモンテッソーリ国際コース等）と偉大な教育者達（マリア・モンテッソーリ [伊：Maria Montessori, 1870 - 1952]、ヘレン・パークスト [米：Helen Parkhurst, 1887 - 1973]、A.L. ハウ [米：Annie Lyon Howe, 1852-1943]、倉橋惣三 [日：1882-1955]、他）達との出会いと学びにより、玉成幼稚園と玉成保育専門学校を創設したことを明確にした。

そこで、本論文では創設した玉成幼稚園に於

いて、ベラの幼児教育思想がどのように具現化し保育実践されていたのか、「ソフィア・アラベラ・アルウィンの“会集”の保育実践について～玉成幼稚園の保育実践内容の一考察～」とテーマを設定し考察を試みたい。

本来であれば、幼稚園と共に創設された保育者養成校の教育内容も概観したい所であるが、紙面上の都合により本論文では玉成幼稚園の会集を中心とした保育実践の内容等を中心に、概観し考察していくこととする。

Ⅱ. 国内幼稚園創設期の保育内容について

世界初の幼稚園〔独：Kindergarten〕は、1840年ドイツのブランケンブルクにフレーベル〔独：Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852〕によって創設された。

その後、フレーベルの幼児教育思想は後援者や学徒によりヨーロッパやアメリカに伝えられ、私立の幼稚園が多数設立されている。

フレーベル没24年後に、日本では公立（国立）の幼稚園が創設されたのである。

1872（明治5）年8月に学制が公布され、幼児教育機関としての幼稚小学が規定された。

その4年後、1876（明治9）年11月にわが国初の東京女子師範学校附属幼稚園（現 お茶の水女子大学附属幼稚園*）が創設された。幼稚園設立の趣旨は「学齡未満ノ小兒ヲシテ天賦ノ知覺ヲ開達シ固有ノ心思ヲ啓発シ身体ノ健全ヲ滋補シ交際ノ情誼ヲ曉知シ善良ノ言行ヲ慣熟セシムルニ在リ¹⁾」とされ、この幼稚園を模範として、その後さまざまな幼稚園が設立されていったのである。当時の幼稚園では、どのように保育実践がなされていたかという点、ドイツのフレーベルが創案したGabe（英：Gift, 日：恩物）を使用した保育を基本として保育実践がなされた。東京女子師範学校附属幼稚園の保育内容は、下記のような順序で30～45分ごとに実践されていた。以後、設立された他の私立幼稚園等も同様の保育内容・保育活動であった。

東京女子師範学校附属幼稚園の 保育の一日の流れと活動

登園→整列→遊戯室（唱歌）→（会集）→開誘室（修身話か庶物話、談話や博物理解等）→戸外遊び→整列→開誘室（恩物、積み木）→遊戯室（遊戯か体操）→食事→戸外遊び→開誘室（恩物）→帰宅²⁾

* 開誘室とは、現在の「保育室」のことである。

大正時代になるとアメリカの児童中心主義の潮流の影響で、新教育運動が起こりフレーベル主義からの脱却やモンテッソーリ法、律動遊戯など幼児主体の保育が実践されるようになった。

玉成幼稚園と玉成保育専門学校は、1916（大正5）年、2月に文部省より学校の認可があり、4月より市ヶ谷駅（麹町土手三番町）近くの閑静な住宅街の一般住宅を校舎として開園・開校が決まった。

園児と生徒の募集に関しては、伊香保の打撃（S・S事件）³⁾がベラのトラウマになっていたため、必ず信頼のおける紹介者を介してのみの募集とした。創立当初の幼稚園園長兼保育者養成校所長は、勿論ベラで「玉成幼稚園」創立当初の園児は15名、「玉成保姆養成所」の学生は11名であった。昭和2（1928）年に校舎を高井戸に新築するまでの12年間、園児の兄弟姉妹や知人の入園希望があっても、幼稚園はずっと15名の定員を守り続けた。この学園創設について、『ペスタロッチー・フレーベル事典』ではベラについて「フレーベルの教育精神に根ざした幼児教育の先駆者、恩物を使って保育する方法を普及させた⁴⁾」という表記が見られるのである。幼児教育の飽くなき探求心と学び、キリスト教の伝道を始めた幼稚園・保育者養成校の創設の理想を、実際に創設した幼稚園でどのように具現化して実践していたのか、概観していきたい。

Ⅱ-1. 玉成幼稚園について

ドイツ、イタリア、アメリカ等の多数回にわたる留学から帰国したベラは、「幼稚園と保育

者養成学校を設立したい」と希望した。そして、日本国内のさまざまな幼稚園（キリスト教、国公立、仏教系等）や保育所、施設等の視察を通して、各施設の特徴や内容、制度等の資料や情報を意欲的に集めた。それと共に、資金を集めるために質素儉約に努め、物件探しや教員探しに奔走した。

大正5年麹町区土手三番町（現市ヶ谷：資料表記通り）に待望の玉成保姆養成所と玉成幼稚園を創立した。もちろん、園長はベラであった。[図1]のように、一間の簡単な門、両側に家があり右が家主の山寺宅（保姆養成所一回卒業生宅）の二間続きの部屋と庭を使って園児15名の保育をした。

幼稚園と言っても、玄関は二畳、襖や障子を外した六畳と八畳の二間続きの部屋であった。八畳の部屋の床の間にピアノと黒板を置いて、六畳の部屋にはフレーベルの恩物とフレーベル机2台が置いてあった。押し入れの下段には園児が自分達で出し入れできるように、教材や教具が綺麗に整理整頓して並べてあった。「三体つなぎ（フレーベルの恩物の一種）」等の教材は、日々の保育後、保育者が1つずつ丁寧に拭いて常に清潔を保つようにしていた。



〔図1〕創設期の玉成幼稚園

幼稚園創立当初の園児は10名（その後、15名になった）で、保姆養成所の生徒は15名であった。創設時の園児はベラの知己の子どもや兄弟に限られた。

その後、関東大震災1923（大正12）年での倒壊や第二次世界大戦等、の幾多の自然災害や社会情勢等の影響により、現在の場所に辿り着くまで、実に11回の移転・転居が繰り返されたのである。

11回の移転先には、幼稚園在園児父兄のご厚意で在園児の自宅の離れや庭を借りたり、また、教会の敷地を借りて保育活動を行っていた。

1952（昭和27）年、杉並区松庵（現在の土地）に新園舎を新築して移転〔図2〕し、現在に至っている。震災や戦争等の社会情勢の影響が大きかったとは言え、11回も移転していることに、幼稚園存続の苦労と幼稚園再起を繰り返し実行している点から、苦労に勝るベラの幼児教育実践への情熱が感じとれるのである。



〔図2〕昭和27年の玉成幼稚園

Ⅱ-2. 玉成幼稚園創設期の保育内容について

1916（大正5）年2月麹町土手三番町（現市ヶ谷）に創設した玉成幼稚園ではどのような保育実践がされていたのだろうか。すべての保育内容の資料が揃ってはいないので、幼稚園創設期の内容を基に、玉成幼稚園の一日の流れと保育内容について概観したい。

玉成幼稚園で実践されていた保育内容は、明

治期に日本で初めて創設された東京女子師範学校附属幼稚園やその他の幼稚園の保育内容と同様であったか、また、ベラが留学時に学んだ経験や教育思想がどのように反映された保育であったのかも含め考察したい。

Ⅱ -3. 一日の流れと保育内容

玉成幼稚園の創設期の一日の流れ、園児と保姆（保育者）の活動及び保育内容を〔表1〕にまとめた。

玉成幼稚園の一日の流れや保育活動は、前述した東京女子師範学校附属幼稚園の流れや保育内容と似ている。東京女子師範学校附属幼稚園では、登園後整列してから戸外遊び、唱歌、修身話、恩物、遊戯か体操等を30～45分ごとに（小学校の時間割のように）全て一斉指導の保育活動となっている。

一方、玉成幼稚園では園児が登園してくると、一人ひとりの子どもの状態に合わせてモンテッソーリ教具を渡して指導したり、園児の意思によっては別室で絵を描いたり、フレーベルの三体つなぎをしていた。その後、1時間程園庭にて自由遊びをしている。

〔表1〕玉成幼稚園の保育内容と一日の流れ
（筆者作成）

活動内容	園児の活動	保姆の活動 （ベラが主担当）
		・部屋（保育室）と庭（園庭）の掃除 ・生花の水替え ・ピアノの練習 ・各教材準備
登園	・各自、好きな物を選んで遊ぶ ・モンテッソーリ教具で遊ぶ・絵を描く（別室） ・三体つなぎ等（フレーベルの恩物）	・子どもの状態に合わせてモンテッソーリ教具を渡して指導する ・各園児に合わせた教材を渡し、指導・助言する

庭（園庭） 〈1時間〉	・庭（園庭）で好きな遊びをする（砂場、滑り台など）〔図3〕 ・垣根栽培（きゅうり、豆等）調理 ・自然観察（朝顔等） ・片付けてトイレに行く	・ジョーロ、バケツ、スコップ等を準備する ・栽培した野菜を調理する
片付け		・洗面器、石鹸、タオルを準備する
会集	・畳みの上に正座し、会集に参加する ・讃美歌や歌を歌って祈る ・音楽リズム ・表情遊戯（園児の自由な発想で） ・椅子に座ってフレーベルの恩物をする	・園児と一緒に正座する ・ベラの発声で讃美歌や歌を歌う ・ピアノを弾く ・歌を歌う ・机と椅子、恩物等を準備する ・恩物の指導をする
弁当	・お弁当を食べる	・机を拭く ・栽培して調理した物を準備する
絵本	・絵本を見る	・ベラが海外（ドイツ、アメリカ、イタリア等）で購入した絵本を読む
戸外遊び	・庭（園庭）で遊ぶ	・園児と一緒に遊ぶ
降園	・ベラと一人ずつ握手をして挨拶する ・迎えに来た人力車で降園	・1人ひとりの園児と握手をして「さようなら」の挨拶をする



〔図3〕園庭・砂場での自由遊び

東京女子師範学校附属幼稚園と異なる点は、朝の登園時に園児を整列させることはなく、園児の自主性や状態に合わせて好きな遊びを選んでいる点である。また、ベラがキリスト教の信者であったので、会集の中で讃美歌を歌う等、が異なる点である。ベラは子どもの主体性を重視した教育理念とキリスト教主義に基づいた保育実践を行っていた、と考えられるのである。

さらに、「垣根栽培」は、明治10年代の愛珠幼稚園（大阪）の保育内容に「耕作」が取り上げられていた。明治中期以降は東京女子師範学校附属幼稚園を始めとした幼稚園の園庭に幼児用菜園が備えられ、野菜や花の種をまいて水をあげ、雑草を取ったりして「園芸」として取り扱われ、観察・栽培が盛んに実施されるようになった。

玉成幼稚園でも垣根を利用して朝顔を育てる等して自然観察をした。きゅうりや豆等を園児と一緒に種まきをして、手入れや栽培・収穫し、保育者が調理してお弁当を食べる時に園児に出していた。玉成で保姆養成所の生物学講師であった下和重吉氏は「アルウィン先生が当時私にご注文になった“何でも生きた物を生きた姿で見せてあげてください”というお言葉を思い、今日のこの世相に対して非常に先見の明のあった方だと最近になって感じる⁵⁾」と書き記している。[表1]にも、園児の登園前の保姆の活動の所に「生花の水替え」という表記があるが、保育室に常に生花を飾り、毎日水替えをして生花を長持ちさせ飾る環境整備にも配慮していた。

1921年（大正10）年の岡山市立幼稚園の「保育事項ノ要旨」の園芸の中で、「園長ハ主トシテ四季ノ草花又ハ菽類（豆類ノ総称）菜類ヲ培養セシメ或ハ動物ヲ飼育セシメ、動物生活植物生活及自然法則ノ存在ヲ悟ラシメ且自然ニ対スル愛ト興味トヲ喚起セシメ知ラズ識ラズ幼児ノ發育ヲ助クルヲ以テ要旨トス⁶⁾」と記されている。このように草花・野菜栽培や自然観察、動物飼育等は、1926（大正15）年に発布された「幼稚園令」の「遊戯」「談話」「唱歌」「手技」の

4項目の保育内容と共に「観察」として位置づけられ、各幼稚園で盛んに保育実践に取り入れられた。玉成幼稚園でも積極的に取り入れて保育実践されていたのである。

Ⅲ. 時代背景と玉成幼稚園の特徴

玉成幼稚園が創立された大正時代は、1900（明治34）年に東京女子師範学校を中心とした研究団体“フレーベル会”刊行による「婦人と子ども」誌上、アメリカの幼稚園教育改革運動がコロンビア大学で進歩派代表のヒル氏〔米：Patty Smith Hill, 1868-1946〕の記事が紹介され、自由保育の考え方が主流になっていった。フレーベルの恩物中心の幼児教育から、児童の自発的活動（幼児の主體的な遊戯）を重視する児童中心主義へと移行し、モンテッソーリ教育法等も導入されるようになった。独のフレーベル学園や米のコロンビア大学への留学、ローマのマリア・モンテッソーリから直接教示を受けたベラは大正時代の流れに沿いつつも、ベラ自身が学び考えた幼児教育の実践を具現化していったと考えられる。

Ⅲ-1. 玉成幼稚園の保育活動の特徴

玉成幼稚園の保育活動で特徴的だった点は、次の3点が挙げられる。

1点目は、お弁当を食べた後の絵本の内容である。「表1」の絵本の項目を見ると、「ベラが海外で購入した絵本を読む」とあるが、この絵本は日本国内の絵本を始めとした、ベラがアメリカやドイツ、イタリアなどに留学していた時に購入した海外の絵本である。ベラはフィラデルフィアに留学中、童話に特別な興味を持ち、アンデルセンの『絵のない絵本』、イブセンの『ペールギュント』、セルマ・ラーゲルレーフ（ノーベル賞受賞者）の『幻の馬車』等をはじめ、日本や中国、インドの民話等も研究して論文の筋書きとして記録している。このように、留学中に研究した童話の内容を選択して本を購入し、ベラが良いと思った本を園児に読んでいたのである。

2点目は、キリスト教の信仰心に基づいた保育と深い愛情を一人ひとりの園児に注いだこと、さらに、園児一人ひとりの性格や個性をよく理解し対応していたことである。

登園後の自由遊びの際にも、モンテッソーリ教具を園児一人ひとりの状態に合わせて渡す、または、モンテッソーリ教具以外にも各園児に適した教材を渡したり、園児自体が遊びを選んでおり、決して強制することなく保育しているのである。この点は、昨今のインクルーシブ教育、多様性を受け入れ各々に合った保育対応に通じる思想である、と考えられ、先見の明を感じるところである。

会集(朝の会)には必ず讃美歌を歌い祈った。ベラは「仏教であれキリスト教であれ宗教とは決して強制して教えるものではない。神は幼児と共にあり、幼児の中にこそその実在を顕示している。幼児に神を教えるのではなくて知らせること、幼児自身が神を発見し感知し得るよう環境をととのえることが、幼児教育の任務⁷⁾(原文のまま)」と考え、キリスト教の話しを通して神の愛を知り、全ての物に感謝の気持ちを持てるようにと祈ったのである。また、降園時には園児一人ひとりと握手をして帰りの挨拶をしたのである。

卒園した園児達が作成した同窓誌「つみき創刊号」の挨拶の中で、ベラは卒園児に向けて「大好きな皆様、とても、始終お逢ひしたい皆様…。あなた方が、どうなさっておいでか、始終知り度いと存じて居る私…。今度こう云ふ雑誌が出るようになったこと、もう嬉しくつてうれしくつて、たまりません。⁸⁾(原文のまま)」と記入して、園児・卒園児に深い愛情を注いでいた様子やベラの嬉しい気持ちが伝わってくるのである。

玉成幼稚園での特筆すべき3点目の特徴として、ベラは園長であったので通常であれば「園長先生」或いは「アルウィン先生」と呼称されるところである。しかし、他の保育者や学生を除いて、園児や保護者達から「アルウィンさん」と呼ばれていたことである。当時の園児たちは

「アルウィンちゃんと呼んで自分たちの仲間で、ただ面白いお話をたくさんしてくれて、いろいろゆかいな遊び方を考え出して遊んでくれる人と思っていた⁹⁾」と回想している。

父母たちと取り交わされた教育相談の手紙も多数残されていて、その手紙からも保護者との深い信頼関係があったことを伺い知ることができるのである。

Ⅲ-2. 昭和初期の保育内容

西荻窪時代(昭和2年)の保育内容は、[表1]で示した内容と同様であるが、新たに加わった活動に着目すると、自由主義教育(プロジェクトメソッド[Project Method])、ヒル氏

[米:Patty Smith Hill, 1868-1946]の積み木、年中行事、同窓会等の4項目が挙げられる。4項目の内(1)自由手技教育、(2)ヒル氏の積み木、(3)年中行事の内容について概観したい。

(1) 自由手技教育(プロジェクトメソッド):

空き箱、空き缶、糸巻、毛糸、包装紙等の廃品材料を並べ、園児は自分で材料を選び思い思いの作品を制作した。各園児が個人的に制作する場合と4~5人のグループで制作する場合とあった。グループ制作した物を利用してお店屋さんごっこ(パン屋・花屋等)、買い物ごっこ等の活動をする、園児が乗れる大型自動車等も作成した。これらの制作を通して、各園児の個性を生かすことができるような指導を実施した。

(2) ヒル氏の積み木:

(1)の自由手技教育の大型自動車等を作成する際、ベラがアメリカ留学から持ち帰ったヒル氏の積み木(恩物中心のフレーベル主義を批判し子どもの自発的な遊びを重要視するカリキュラム開発、大型積み木を考案した¹⁰⁾)をグループ制作や保育活動に活用した。お店屋さんごっこや電車ごっこ、おままごと等、共同制作や「ごっこ遊び」の遊びに活用して指導した。このヒル氏の積み木は、他園でも導入されていた

が、廃材制作も含めて園児の興味や関心に沿って大型積み木も活用していたと考えられる。

(3) 年中行事：

ベラは日本の伝統行事を大切にとらえ、保育活動に取り入れていた。お正月には羽根つき大会、かるた取り、独楽まわし、凧上げ等を園児と共に楽しみ、お汁粉を食べ正月気分を味わった。このお汁粉作りはベラと共に保育に携わった教員が保育学校の文化祭に引継がれ作られている。

5月の節句には自然物を利用してさつまいもの金太郎、筍の皮やとうもろこしのひげで鍾馭様等を作成した園児一人ひとりの作品に万雷の拍手をして飾った。

その他に、春秋の遠足や自然観察（近隣に畑がありじゃがいもやさつま芋、大根など）と栽培・調理をして食べた。10月の創立記念日には自然物で装飾してお祝いした。

クリスマスは、遊戯室の天井まで届くようなクリスマスツリーを設置して園児と共に装飾し、ベラの指導の下園児が降誕劇を演じ、ベラが作詞した園歌「にこにこの種」[図4]を歌った。

にこにこの種を お庭にまいたら
かわいい二つの 芽が出ました
まがらず育てよ まっすぐに育てよ
いつでも元気に 大きくなれよ
大きくなったらば きれいなお花を
咲かせてにこにこ お笑いなさい
詩 ベラ・アルウィン
(ベラ没後、昭和32年に園歌となる)

〔図4〕 園歌「にこにこの種」

卒園式は園児一人ひとりに卒園証書を手渡し厳かに行われた。さらに、日本の皇紀2600年式典に参加し、支那事変や満州事変等に出征していく兵を園児と共に日の丸の旗を持って見送る等した。しかし、ベラは第二次世界大戦が勃発し両親の国同士が戦っていることに大変心を

痛めた。キリスト教の信仰心と人類平等・平和主義をモットーとして、保育の中で子どもの遊びから極力「軍艦」「鉄砲」「戦争ごっこ」がないように配慮して保育実践したのである。

このように大正末期から昭和初期には、児童中心主義のアメリカ新教育運動や倉橋惣三や和田実らの提唱する「誘導保育」等の保育思潮の影響もあり、保育内容も変化していった。

奈良女子高等師範学校附属幼稚園の保育要目にも「四月；花祭り、天長節、五月；聖武天皇祭、大仏殿参詣、五月節句、金太郎、六月；蛍、梅雨、七月；七夕祭¹¹⁾」(二年保育：年長組)」等の行事の保育内容項目が計画され保育内容に取り入れて活動していることから理解できるのである。

IV. 「会集」について

日本で最初に創設された東京女子師範学校附属幼稚園の「保育の一日の流れ」にも記したように、園児が登園してくると「会集」の活動が取り入れられていた。附属幼稚園を模して他の幼稚園でも「会集」は取り入れられた。

大阪市の愛珠幼稚園の明治26年の保育項目・保育規定にも「第七条 幼児ハ大約年齢ト発達ノ度トノヨリテ便宜ヲ分チ保育スルモノトス但シ会集ノ時間ヲ設ケ全園ノ幼児ヲ会シテ興味アル談話若クハ唱歌或ハ遊嬉ニヨリテ会スルノ快楽ヲ感セシメ幼児相互ノ親睦ヲ計ルヘシ¹²⁾」(下線＝は筆者)」と書かれており、会集の時間を設けていたことが分かる。

幼稚園創設期の明治時代には「会集」は園児登園後に園児と教職員が全員で集まって実施されていた。当時は、園児が富裕層の子どもに限られ、全園児でも50人以下であったため、全園児と教職員が一堂に会して会集が実施可能な状況であったと考えられる。また、「会集」の内容として、「園児の興味がある談話(話)や唱歌(歌)、遊嬉」であったと推察されるのである。

IV-1. 玉成幼稚園の「会集 (Morning Circle)」

玉成幼稚園で保育実践をするにあたり、ベラの留学経験や確固たる信念に基づいた保育が実施されていた。彼女はキリスト教に基づいた全人教育を理想として保育実践していた。ベラが特にこだわって実践していた保育内容は、1. 会集、2. フレーベルの恩物とモンテッソーリ教具、である。本論文では、1. 会集に焦点をあてて、実際の保育実践内容を概観したい。

ベラが特にこだわって実践した保育内容の一つに、「会集」という項目がある。明治期から大正時代にかけて、東京女子師範学校附属幼稚園の一日の流れの中にも会集が組み込まれている。しかし、アメリカの新教育運動等の影響を受けて大正期から昭和前期頃には、会集を廃止する幼稚園が増えていった。それでも、ベラは他の幼稚園で会集を廃止しても、玉成幼稚園では「会集」を重視し取り入れていた。ベラが会集を保育の中で日々実践していたのには、強いこだわりがあった。会集の内容についてベラのノートを参照すると、「会集」を「Morning Circle」と記して、副題に“1) Religion Circle, 2) Intelligence Circle, 3) Education Music Circle”、等とし、朝の会で実施する大切なプログラムとして考えていたことがわかる。「会集」のプログラムの内容と順番は、以下のようであった。

会集 (Morning Circle)

- (1) 奏 楽 (Quiet Music)
- (2) 祈 り (Prayer)
- (3) 讃美歌 (Hymn)
- (4) 挨拶 (Greeting)
- (5) 暦 (Calender)
- (6) 歌とリズム遊戯 (遊び)
- (7) 話

会集は環境の異なる各家庭から幼稚園に登園してきた全園児と全教師が一同に集まって活動する。ベラは、この会集に参加することは異年

齢の集まり「縦割り保育」の形態で、忍耐や譲り合い、いたわり合うこと等の経験が出来る貴重な場であると想定していた。会集を行う場所は、室内、戸外を問わず全園児が集える広さがあれば良いと考えていた。

IV-2 会集の活動内容について

会集の具体的な活動内容は、以下の7項目である。ベラは、この会集で「幼児の純真無垢な心に、神の存在を知らせること」を主眼としたキリスト教思想を根底にした会集を重要視し実施していたと考えられる。

(1) 奏 楽 (Quiet Music)

ベラは会集の一番初めに奏楽を考えた。奏楽とは、「楽器を演奏して園児に聴かせること」である。奏楽の目的として「①幼児の音楽鑑賞、②心理的生理的神経の鎮静化、③注意力の持続訓練、④潜在意識下に美しい音楽を浸透する」等で、楽器はピアノを始め、独唱や全ての楽器を考え、その上で、担任教諭が真心を込めて演奏することが大事である、と考えていた。また、キリスト教信者であったベラは「神が人間に与えたたくさんの賜物の中でも特別に素晴らしいものは音楽である」とも思っていた。そのような理由から、会集の最初に奏楽をもってきたのである。

奏楽の注意点としては、子どもの年齢や発達段階による音楽を聴く集中時間（例えば、3歳児：30～60秒、4歳児：1分～1分半、5歳児：1分半～2分半）内での奏楽曲を選んだ。さらに、奏楽の曲として、季節や幼児に身近な題材曲を始め、クラシック曲（バッハのプレリュード、ヘンデルのラルゴ、メンデルスゾーンの春の歌等々）も多数選曲して演奏した。

(2) 祈 り (Prayer)

奏楽で心静かになった後に「全ての生命の守護と感謝を祈る」ことを主眼として、子ども達に分かりやすい言葉で祈った。ベラは自身の信仰の立場から奏楽の次に「祈り」を取り入れた。

自身はキリスト教信者であるが、キリスト教だけでなく宗派を問わず宗教や祈りを大切にしていた。[図5]

ベラは「宗教とは決して強制するものでなく、教えるものでもない。ただ、知らせるもの、伝えるべきもの」と信じていた。

「祈る」時は、幼児に理解できるわかりやすい言葉で、丁寧に且つ上品、真摯な態度で、幼児の代弁者として祈ることが大切だ」と考えていた。祈りの内容は幼児のための祈りであって、時間は1分位が適切だと思っていた。



〔図5〕 戸外でお祈り（会集）

(3) 讃美歌 (Hymn)

祈りに続き、神への感謝、喜びを歌うのが「讃美歌」である。子ども達は起立して胸を張り、声をあげて歌うことで、奏楽・祈りと静かに過ごした後、歌うことで精神的解放を感じる。怒鳴らず美しく歌うよう、教師が正確な伴奏で明確に歌うことが必要と考えた。讃美歌は「神の恵みをほめたたえる神聖な歌」であるので、他の歌と区別して礼儀正しく歌うことが大切とされた。この「礼儀正しく歌う」ことに関しては、教師が口やかましく注意したりしなくても、教師自らが真剣に敬虔な姿勢で歌え（示せ）ば、幼児たちも見倣うと考えて実践していた。

(4) 挨拶 (Greeting)

子ども同士、教師と子どもの再会を喜び朝の挨拶は心を込めて行われていた。朝の挨拶以外の挨拶も折々に相応しく実施することが社会生

活の道徳と考えられ保育実践されていた。

挨拶の方法としてはく起立して一斉に礼をする><’おはよう’の歌を歌う><隣同士で握手する><教師が子ども一人ひとりと礼をかわす>等々、さまざまな方法があると考えた。また、挨拶は「日々、新しい感激の気持ちでお互いを確かめあい、マンネリズムに陥らず生き生きとする」ことを重要視した。

社会生活上のマナーの第一歩として挨拶の心構えや態度・言葉使い、TP0に合わせた挨拶等を考えていた。ベラは「挨拶は、信頼関係を基にした社会生活の道徳である」と考え心を込めて、相手への敬意をもって挨拶をすることを自ら実践したのである。

(5) 暦 (Calendar)

人間社会の「時間（過去・現在・未来）」一日、一週間、一か月、一年や四季（春夏秋冬）」を知らせることが大切と考え、会集の5番目に暦を取り入れた。

子どもに「昨日、今日、明日」を知らせる教材として暦を活用した。同時に、時間（一日は24時間）、一週間（7日間）、一か月（月ごとに異なる）、一年（12ヶ月で365日）等の概念や数、年齢、季節と行事等について理解をうながすことに繋がると考えた。

教師が毎月描画・作成した暦（新聞を半分に折った大きさ）を使用した。この暦を描いたり作成する時、絵の上手下手は問わなかった。あくまで、園児のために教師が心を込めて手作りが大切だと教えたのである。日々の暦に貼る物（日々の表示）は園児と一緒に作った切り紙や折り紙等を使用した。例えば、4月なら桜の切り紙、5月なら折り紙で折った兜やこいのぼり等、であった。12月のクリスマスには、アドベントカレンダーを作成して、毎日扉を開けるとクリスマスにちなんだ物が出て来るようにしたり、紙で作成したクリスマスページェントを毎日一つずつ子ども達に話して机の上に飾っていく等、も実践された。

(6) 歌とリズム遊戯（遊び）

幼児の歌いたい本能や身体的鍛錬をしつつ豊かな感性を養うために「歌とリズム遊戯（遊び）」を取り入れた。聴覚・発音発声、音感、平衡感覚等の発達と教育的効果を考え、標準語や歌の長さ、内容等を精査した。

ベラが幼児の歌を選曲する際、次の事柄に気を付けて選んだ。「①歌詞は平易で子どもがよくわかる言葉、きれいで品格のある標準語、②子どもが覚えられ長さ、③明るい内容、④子ども達に身近な内容、⑤子どもの夢が広がる物、⑥子どもを取り巻く自然界の全てを温かく的確に表現している」等である。

反対に選曲をしない内容として「㉔卑俗な言葉、㉕ヒューマニズムに反する言葉、㉖乱暴・残酷な言葉、㉗闘争的な内容、㉘軽薄な内容」等を例に挙げ、避けた。

リズム遊戯（遊び）に関しては、アメリカの留学時代に学んだダルクローズリトミックを取り入れた。当時流行の表情遊戯をせず、子ども達の自主性を重んじ、子ども達がやりたいように躍らせたのである。さらに、ダルクローズリトミックの指導者として保育者養成校の学生には、小林宗作〔日：1893- 1963〕を招いて教示して貰っている。

(7) 話

会集の最後のプログラムは「話」である。

幼児の発達段階や年中行事等によって、話の種類や内容を考えた。「①言語教育、②観察、③五感を通しての知的鍛錬、④社会の一員であることを目的と考え、1. 聖話、2. 母の歌と愛撫の歌、3. 行事、4. 観察話、5. 童話・伝説・民話」等を取り入れた。全園児で話を聞くので、年齢の一番小さな年少の子ども達に合わせて話を選んだ。

①言語教育に関しては、幼児にわかりやすい標準語で丁寧な言葉を使う。

②話の内容は弱肉強食等に関する言葉を言い直して子ども達に伝えた。

③話の内容把握に関して、ベラは「保育者は色々

な事柄について広く深く見識を高め教養を持つべき」と考えていた。

④話す前準備について、繰り返し練習をしておくこと、席や環境設定、話し方等も充分準備することが必要だと教えた。

⑤話す時間は、子どもの年齢や発達段階に合わせて簡潔にすることが大切だとした。



〔図6〕室内での会集 (Morning Circle)

上記した「会集」は(1)～(5)、(7)話、までは順番通りに行うことが多く、(6)歌とリズム遊戯（遊び）は会集に含めず活動することもあった。

玉成幼稚園に於いて、「会集」は幼稚園開設時より令和の昨今まで、ベラの理念を引き継いで保育実践がされている。〔図6〕

特に(5)暦は玉成幼稚園だけでなく、多数の保育現場で「月、日にち、曜日」等のカードを作成して、登園してきた園児（3歳以上の子どもの場合）がシール帳にシールを貼る時に机に掲示し園児に理解しやすくしている。

玉成幼稚園の場合は、暦としてカレンダーを毎月、教員が手作りで作成し、子どもと季節に合った折り紙制作等をして、作成した折り紙を日付確認と共にカレンダーに貼るという実践がなされていた。ベラの「教員が心を込めて描く、作る」という保育実践への考え方がカレンダーや誕生日カード制作に反映され実践されていたのである。

IV-3. フレーベル恩物とモンテッソーリ教具

(1) フレーベルの恩物

登園後の自由遊びや会集終了後にもフレーベルの恩物遊びやモンテッソーリ教具等を使用していたので少し触れておきたい。

ドイツの「フレーベル学園」で学んだベラは恩物を一式購入して帰国した。しかし、恩物は「インチ」で作られていたので（日本に導入された時にインチであったため、子どもへの指導が大変で保育者が混乱したとも言われている）、幼稚園で使用するために単位を全て「センチ」に切り替えて東京のフレーベル館に恩物作成の依頼をして購入した。そして、昭和2年の西荻窪時代の幼稚園では、フレーベルの恩物は遊戯室、机、椅子、戸棚や壁が全て黄色い部屋で実践されていた。ベラはフレーベルのキリスト教に基づいた教育思想に傾倒し、幼稚園で恩物教育を一貫して実施した。

子どもの年齢と発達理解や興味に基づき、恩物の種類の選択や提供の方法を年間・月間・週間・一日のカリキュラム等を作成して活動した。さらに、各年齢と園児一人ひとりの個性と能力に合わせて恩物を与え指導していたのである。ベラは常に全ての恩物の並べ方や、色彩の調和、数の概念の理解等に注意を払って指導した。第1恩物から第10恩物の長年の保育実践記録を恩物の意義と遊び方と共に『恩物の理論と実際』としてまとめて出版した。その後、第11恩物から第20恩物は『手技工作 (Occupations)』として1976(昭和51)年に学園創立60周年を記念して出版した。現在も『恩物であそぼう』『恩物であそぼう～絵画・造形編～』として出版され、保育現場やフレーベル教育思想・恩物研究者にも資料として活用されている。

(2) モンテッソーリ教具と感覚教育

イタリアの「モンテッソーリ教育(国際コース)」に学んだベラはモンテッソーリ教具をアメリカの“The House of Childhood 会社”で購

入して帰国した。モンテッソーリ教具は遊戯室や机・椅子、棚等全てが青い部屋で実施した。モンテッソーリ教具を活用して園児が生活習慣の自立が図れるように“衣服の着脱やボタンはめ、紐結び”等の教具を使用した。

また、園児の描画から形を理解できていない園児には“型はめ”の教具、そわそわと落ち着きのない園児には“大階段や方塔”等、各園児に適した教具を渡すなど、常に一人ひとりの園児に心配りをして保育をした。

ベラはモンテッソーリが知的障害児に向けた「愛」から障害児向けの教具を考案した思想に共感しつつも、自分の幼稚園では定型発達児(健常児)に役立つと考え、子どもの特性に合わせて渡して指導した。ベラは「感覚教具は、単に手や指先の訓練、聴覚の訓練、視覚、臭覚、味覚、皮膚感覚の訓練だけを目標としたものではなく、その子どもの内にある叡智を目覚めさせる教育」と考えていたのである。ベラがモンテッソーリの感覚教育で重要視したのは「数」「言語」「環境教育」であった。数はフレーベルの恩物と、言語は会集の話と関連づけて実践から指導方法を研究していたと考えられるのである。

V. まとめと今後の課題

本論文では、玉成幼稚園の保育内容である「会集(Morning Circle)」に焦点をあてて概観した。玉成幼稚園創設当初は、他の幼稚園同様に東京女子師範学校附属幼稚園を模範とした保育内容を踏襲しつつも、玉成幼稚園として特徴ある保育実践していたことが伺えた。

登園してきた個々の園児の特性に合わせて、フレーベルの恩物、モンテッソーリ教具、描画等の教材を選択して園児に渡して指導していたこと、また、「神の前に人は皆平等である」というキリスト教の信仰を根底に置きつつ、全人教育や平等教育の理念から、会集を実施していたこと。一人ひとりの園児に深い愛情を注ぎ、ベラ自身の留学・学習経験から最善を尽くして保育実践したことが理解できた。

「会集」の7項目の中に、キリスト教の信仰心と園児や教員たち全員で集まり、顔を合わせ互いの無事を喜び、各々の健康と幸せを祈ったのだと思われる。そこに、震災や戦争による社会情勢の厳しい中、命の尊厳を重要視し幼子の成長を祈るベラの篤い願いを感じるのである。時代や世情と共に他園では「会集」が消えていく中、玉成幼稚園では昨今まで実践されている所に、創設者の「会集」への強いこだわりと確固たる信念が強く感じられる。100周年を迎えてなお、このように創設者の信念と思いを引継ぎ実践してきた教え子達に強い敬意を覚えるのである。

現代では各地の幼稚園、保育所、こども園で「会集」の呼び方や形態は変化しているものの、「朝の会」として保育実践がなされている。「朝の会」では大半の園で、「朝の挨拶をして出席を取り、カレンダー（暦）を確認し歌を歌う」等が実践されている。そこには、クラス全員、或いは縦割りのメンバー全員が顔を合わせ、互いに登園できたことを喜び合い、本日の活動に期待をもちつつ園生活の始まりのけじめとして「朝の会」を設定しているのだと考えられる。

時代や価値観は変化し、形態も変化するが、「子ども達のより良い成長・発達を願い、最善の利益を考える」保育・幼児教育の原理がしっかり根付いていることが理解できる。子どものことを最優先に考え「園児一人ひとりの特性を理解し、常にベストを尽くし丁寧に対応していた点」にベラの幼児教育への篤い信念を感じ取れるのである。

今後の課題として、保姆養成所（保育者養成校）の推移と養成校での教育内容にベラの教育理念がどのように具現化されていたか、概観し考察したいと考える。さらに、移転期ごとの保育内容を検討できるように、資料収集に努め、分析・考察していきたいと考える。

※本論文では引用文献の『幼稚園教育百年史(文部省)』『東京女子師範学校附属幼稚園』と表記しています。



〔図7〕園児を抱っこしたベラ（41歳）

引用文献

- 1) 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに株式会社 1979 序
- 2) 同上 pp. 57-58
- 3) 松村康平『荒野に水は湧きて』学校法人アルウィン学園 1980 pp. 118-123
- 4) 日本ペスタロッcher・フレーベル学会『ペスタロッcher・フレーベル事典』玉川大学出版部 1996 p8
- 5) 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに株式会社 1979 p161
- 6) 松村康平『荒野に水は湧きて』学校法人アルウィン学園 1980 p251
- 7) 同上 p128
- 8) 玉成幼稚園同窓会々誌『つみき創刊号』玉成幼稚園内同窓会 1939(昭和14)年 pp. 1-2
- 9) 松村康平『荒野に水は湧きて』学校法人アルウィン学園 1980 p155
- 10) 柴崎正行編著『保育方法の基礎』わかば社 2015 p79 (嵩田貞子著)
- 11) 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに株式会社 1979 pp. 245-246

- 12) 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに株式会社 1979 p75

*本論文は畠田貞子「ソフィア・アラベラ・アルウインの幼児教育思想について(1)～日系二世女性が幼稚園創設に至った教育思想の一考察～」2018 秋草学園短期大学紀要第34号の資料等を基に執筆した。

図 (写真)

- 1 ～ 4 : 玉成 70 年記念委員会「玉成」1985 盛光印刷所 pp. 8-15
5 : 「アルウイン学園 80 周年記念誌」(有)いづみプリンティング 1995 年 p. 14
6 : 玉成 70 年記念委員会「玉成」盛光印刷所 1985 p. 5

参考文献

1. 清原みさ子 2014『手技の歴史 フレーベルの「恩物」と「作業」の受容とその後の理論的、実践的展開』新読書者
2. キリスト教保育連盟 2014『キリスト教保育 125 年』キリスト教保育連盟
3. 永井理恵子 2011『近代日本キリスト教主義幼稚園の保育と園舎―道愛幼稚園における幼児教育の展開―』学文社
4. 松浦公紀著 2004『モンテッソーリ教育が見守る子どもの学び』学習研究社
5. 湯川嘉津美 2001『日本幼稚園成立史の研究』風間書房
6. 小原芳明 1996『ペスタロッチー・フレーベル事典』玉川大学出版部
7. 80 周年記念委員会 1995『アルウイン学園 80 周年記念誌』いづみプリンティング
8. キリスト教保育連盟 1986『日本キリスト教保育百年史』
9. 玉成 70 年記念委員会 1985『玉成』盛光印刷所
10. 岡田正章編 1982『フリードリッヒフレーベル いま、私たちが学ぶもの』フレーベル館
11. 日本保育学会編 1979『日本の幼児教育 Early Childhood Education and Care in Japan』チャイルド社
12. 文部省 1979『幼稚園教育百年史』ひかりのくに株式会社
13. 松村康平 1980『荒野に水は湧きて』学校法人 アルウイン学園
14. 玉成高等保育学校幼児保育研究会 1978『フレーベルの恩物の理論とその実際』フレーベル館
15. Friedrich Fröbel: Kleine Schriften und Briefe, hrsg. v. E. Hoffmann, Bd. 1. Stuttgart: Klett-Cotta, 1982.
16. Friedrich Fröbel: Die Menschenerziehung, hrsg. v. E. Hoffmann, Bd. 2. Stuttgart: Klett-Cotta, 1982.
17. Friedrich Fröbel: Vorschulerziehung und Spieltheorie, hrsg. v. E. Hoffmann, Bd. 3. Stuttgart: Klett-Cotta, 1982.
18. Friedrich Fröbel: Die Spielgarben, hrsg. v. E. Hoffmann, Bd. 4. Stuttgart: Klett-Cotta, 1982.
19. Friedrich Fröbel: Das Paradies der Kinderheit, hrsg. v. E. Hoffmann, Bd. 2. Stuttgart: Klett-Cotta, 1982.

越谷保育専門学校研究紀要規程

平成25年6月11日制定

(名称)

第1条 研究紀要の名称を「越谷保育専門学校研究紀要」とする。

(目的)

第2条 越谷保育専門学校（以下、「本校」）の教育・研究活動の成果を発表し、学問、教育、文化の発展に寄与すること。

(発行)

第3条 研究紀要は、原則として年1回発行する。

(編集)

第4条 研究紀要の編集は、本校紀要委員会が行う。

(投稿資格)

第5条 研究紀要の投稿者は、本校教職員（非常勤講師を含む）およびその他校長が認めた者とする。

(原稿の種類)

第6条 投稿できる原稿の種類は、論文、実践報告、その他とし、未発表のものに限る。

(執筆要領)

第7条 原稿の執筆要領については、別に定める。

(修正)

第8条 提出された原稿については、紀要委員会の判断によって、著者に修正を求めることがある。

附則

この規程は、平成25年6月11日から施行する。

越谷保育専門学校研究紀要 第 8 号

発	行	令和 2 年 3 月 31 日
編集・発行		学校法人ワタナベ学園 越谷保育専門学校 〒 343-0023 埼玉県越谷市東越谷 3-10-2 TEL 048-965-4111
印	刷	共立速記印刷株式会社 〒 102-0072 東京都千代田区飯田橋 3-11-24 TEL 03-3234-5511（代表）